愛媛大学埋蔵文化財調査報告　XVI

文京遺跡Ⅴ

― 文京遺跡18次調査報告 ―

愛媛大学埋蔵文化財調査室

2007

愛媛大学埋蔵文化財調査報告　XVI

文京遺跡V

── 文京遺跡18次調査報告 ──

愛媛大学埋蔵文化財調査室

2007

序　　文

愛媛大学は、本部事務局と法文学部・教育学部・工学部・理学部の４つの学部が所在する城北キャンパスに縄文時代から中世にわたる複合遺跡である文京遺跡、農学部のある樽味キャンパスに弥生時代から中世の樽味遺跡を抱え、1987年に愛媛大学埋蔵文化財調査委員会のもとに埋蔵文化財調査室を設置し、埋蔵文化財の保護に努めている。

その中で、城北キャンパスでは、これまで30次にわたる全面調査が実施されている。本書で報告する文京遺跡18次調査は、1998～1999年に実施した愛媛大学総合情報処理センター（現 総合情報メディアセンター南棟）建物新営工事に伴う発掘調査である。調査地点は城北キャンパス西部の旧グラウンド北部にあたる。周辺では、1996・1997年に文京遺跡15・17次として実施した確認調査によって、東西にのびる谷状の窪地と、土層断面観察から窪地には水田が営まれていることが明らかにされていた。今回の発掘調査では、まさしく古代～中世の水田跡が整然とあらわれ、畠跡と考えられる犁による耕作痕跡も出土し、文京遺跡が占める扇状地の扇央部における古代～中世の水田開発の歴史を考える貴重な手がかりとなる。

また、谷状の窪地への落ち際の微高地部分と、建設建物につづく共同溝部分では、弥生時代、古墳時代、古代の３つの時代の集落跡があらわれた。古代においては、谷状の窪地への落ち際に、高床建物と考えられる小型の掘立柱建物群が建つ。これまで、文京遺跡では古代の遺物は出土していたが、遺構が出土したのは今回の調査がはじめてである。先に述べた水田跡や畠跡とあわせ、文京遺跡における古代の集落の実像を考えることができる資料である。

加えて、古墳時代の遺構は共同溝部分で数多く出土した。これらは南に隣接する文京遺跡14次調査地区の古墳時代後期の集落の北東端にあたる。さらに、弥生時代の遺構としては、谷状の窪地への落ち際で、高床倉庫と考えられる小型の掘立柱建物群が出土した。文京遺跡では、これまでの調査で、弥生時代に西日本屈指の大規模集落が営まれていたことが明らかにされている。今回の調査地点では、旧グラウンド南半部の竪穴式住居跡が密集し大型掘立柱建物がある集落の中心部とは異なり、高床倉庫群が建ち並ぶ。弥生時代の大規模集落の構造をより具体的に解明することができる成果の一つである。

今回の調査では、こうした多くの調査成果をえることができた。しかし、その後も連続して進められた校舎建設に対応する発掘調査が優先され、整理作業は寸断され、大きく停滞した。そこで、施設部と協議して短・中期的な整理計画をつくるとともに、整理体制の強化を図り、報告書刊行の準備を進めることとした。そうした体制整備によって、今回、ようやく正式調査報告書を刊行することができた。発掘調査から記録・遺物類の整理、そして報告書の刊行にいたるまでには、多くの方々から協力を得た。それらの方々に深く感謝するとともに、本書が多くの人々に利用・活用されることを祈念します。

2007年３月30日

愛媛大学埋蔵文化財調査室
室長　下　條　信　行

例　　言

1．本書は、愛媛大学埋蔵文化財調査室が1998（平成10）～1999（平成11）年度に実施した愛媛県松山市文京町３番の愛媛大学総合情報処理センター（現 総合情報メディアセンター南棟）建物新営工事に伴う文京遺跡18次調査の正式調査報告書である。
2．愛媛大学埋蔵文化財調査室では、これまで文京遺跡８・９・11次調査、同10次、13次調査、20・23次調査の発掘報告を刊行している。本書が５冊目の報告書となることから『文京遺跡Ⅴ』とした。また同時に、愛媛大学埋蔵文化財調査報告ⅩⅥにあたる。
3．本書で示した方位・標高値は、平面直角座標Ⅳ系にしたがっている。
4．土色と遺物の色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版標準土色帖』（1976）に準拠したが、本文中ではマンセル記号は省略した。
5．本書に使用した遺構図は、田崎博之・三吉秀充・坂元恒太・丸毛のぞみ・武田尊子・田中久美子・田中いづみが実測図を作成し、田崎博之・三吉秀充・宮崎直栄が浄写を行った。
6．遺物図は、田崎・三吉・宮崎・西澤昌平・濱田美加が実測図を作成し浄写を行った。また、本書の巻末表２の遺物観察は、各遺物の実測者が共同して作成した。
7．遺構・遺物写真は、田崎・三吉が撮影した。
8．本書の執筆は、序説～Ⅳ章は田崎・西澤、Ⅴ章は三吉・濱田、Ⅵ章は田崎・三吉が共同して執筆した。
10．本書の編集は、埋蔵文化財調査室長下條信行の指導のもとに、田崎が行った。
11．本書に報告した文京遺跡18次調査にかかわる記録類・出土遺物は、愛媛大学埋蔵文化財調査室において保管されている。

本文目次

序　説
1　調査にいたる経緯と調査体制 …… 1
（1）調査にいたる経緯
（2）発掘調査体制
（3）発掘調査の経過
2　整理作業と報告書刊行の体制と経過 …… 5
3　調査・整理の方法と遺物・記録類の保管 …… 6
（1）調査区割りの設定と呼称
（2）遺構・遺物の登録番号と種別の表示
（3）調査記録類・出土遺物の保管

Ⅰ　位置と環境
1　文京遺跡の位置と環境 …… 9
2　周辺の既往調査 …… 11

Ⅱ　調査の概要
1　層序の概要 …… 16
2　遺構の概要 …… 17

Ⅲ　A区の遺構・遺物の記録（その1）－Ⅱ-2層（水田層）と自然流路（SR-400）の調査－
1　層序 …… 23
2　Ⅱ-2-①層と出土遺物 …… 24
3　Ⅱ-2-②（上層水田）層の遺構と遺物 …… 26
（1）遺構
1）水田　SS-1（26）　SS-2（26）　SS-3（27）　SS-4（27）
SS-5（28）　SS-6（28）　SS-7（28）　SS-13（28）
SS-14（29）　SS-15（29）　SS-16（29）　SS-17（30）
SS-19（30）　SS-20（30）　SS-21（30）　SS-22（31）
SS-23（31）　SS-26（31）　SS-27・28（31）　SS-30（32）
SS-31（32）　SS-32・33（32）　SS-34（32）　SS-35（32）
SS-36（33）　SS-37・38（33）　SS-39（33）　SS-40（33）
2）溝　SD-8（33）　SD-9（33）　SD-10（34）　SD-11（35）
SD-12（35）　SD-18（36）　SD-24（38）　SD-25（38）
SD-29（39）
3）小穴
（2）水田耕作土・畦畔・床土出土の遺物
4　Ⅱ-2-③層と出土遺物 …… 40
5　Ⅱ-2-④（中層水田）層の遺構と遺物 …… 43

（1）遺構
1）水田　SS-105（43）　SS-106（44）　SS-107（45）　SS-108（45）
SS-109（46）　SS-110（46）　SS-111（47）　SS-112（47）
SS-113（47）　SS-115（48）　SS-116（48）　SS-117（48）
SS-118（49）
2）溝　SD-101（49）　SD-102（52）　SD-103（53）　SD-104（54）
SD-114（55）　SD-119（55）　SD-120（55）　SD-122（55）
3）水溜遺構　SX-121（56）
4）土壙　SK-123（56）
（2）水田耕作土・畦畔・床土出土の遺物
6　Ⅱ-2-⑤層上面から掘り込まれた遺構と遺物 …… 61
（1）遺構
1）土壙　SK-201（61）　SK-202（62）　SK-203（62）　SK-204（62）
2）溝　SD-208（62）　SD-209（66）
3）小穴・その他
7　Ⅱ-2-⑤層と出土遺物 …… 66
8　Ⅱ-2-⑥層（下層水田）の遺構と遺物 …… 69
（1）遺構
1）水田　SS-303（69）　SS-304（69）　SS-305（70）　SS-306（70）
SS-308（70）　SS-309（71）　SS-310（71）　SS-311（71）
SS-312（71）　SS-314（72）　SS-316（72）　SS-317（72）
SS-318（72）
2）溝　SD-301（73）　SD-302（75）　SD-307（76）
（2）水田耕作土・畦畔出土の遺物
9　自然流路 SR-400 と出土遺物 …… 78

Ⅳ　A区の遺構・遺物の記録（その2）－微高地上の遺構の調査－
1　出土遺構の概要 …… 90
2　耕作痕跡 …… 90
3　掘立柱建物 …… 92
SB-410（92）　SB-411（94）　SB-412（94）　SB-413（95）
SB-414（95）　SB-415（96）　SB-416（99）　SB-417（100）
SB-418（102）　SB-419（104）　SB-420（105）　SB-421（106）
SB-422（108）　SB-423（108）　SB-424（109）
4　土壙 …… 110
SK-401（110）　SK-402（114）　SK-403（116）　SK-404（116）
SK-406（116）　SK-407（116）　SK-408（116）　SK-425（118）
5　溝 …… 118
SD-405（118）
6　柵列 …… 118
SA-409（118）
7　小穴・その他 …… 119

Ⅴ　B区の遺構・遺物の記録

1　層序と出土遺構の概要 …… 123

2　竪穴式住居跡 …… 124

SC-605（124）　SC-606（125）　SC-670（128）　SC-689（131）
SC-729（131）　SC-730（132）　SC-738（132）　SC-741（133）
SC-747（113）　SC-748（134）　SC-750（134）　SC-751（135）
SC-752（137）

3　掘立柱建物 …… 138

SB-740（138）　SB-743（141）　SB-744（142）　SB-746（143）
SB-749（143）

4　溝 …… 144

SD-601（144）　SD-602（144）　SD-603（145）　SD-604（150）
SD-610（150）　SD-627（151）

5　土壙 …… 152

SK-647（152）　SK-662（152）　SK-663（152）　SK-666（153）
SK-675（154）　SK-684（154）　SK-690（155）　SK-693（155）
SK-695（156）　SK-697（158）　SK-705（160）　SK-710（162）
SK-711（162）　SK-713（164）　SK-725（164）　SK-732（166）
SK-733（167）　SK-735（167）　SK-739（168）

6　炭化物集積 …… 170

SX-669（170）

7　立柱痕跡をもつ柱穴・小穴 …… 170

8　Ⅲ層出土の遺物 …… 177

Ⅵ　調査のまとめ

1　古代～中世 …… 180

2　古墳時代 …… 193

3　弥生時代 …… 195

挿図目次

図１　文京遺跡18次調査地点とグリーンゾーン（遺跡保存地区）配置図（縮尺１／3,500）……２
図２　Ａ区Ⅱ-２-②（上層水田）層上面の調査……４
図３　法文学部考古学概論講義の遺跡見学……５
図４　城北キャンパス西半部の調査地点（縮尺1／2,000）……７
図５　道後平野の地形概要と道後城北遺跡群・文京遺跡の位置（平井1989より作成）……９
図６　道後城北遺跡群における地形と発掘調査地点……10
図７　1974（昭和49）年頃の愛媛大学城北キャンパス周辺……11
図８　旧地形の復元図（縮尺1/4,000）、文京遺跡15次調査７・８トレンチ実測図（縮尺１／300、１／30）……14-15（折り込み）
図９　文京遺跡18次調査の基本土層概念図（縮尺1／500、1／40）……17
図10　文京遺跡18次調査Ａ区の出土遺構配置図１（縮尺1／300）……18
図11　文京遺跡18次調査Ａ区の出土遺構配置図２（縮尺1／300）……19
図12　文京遺跡18次調査Ａ区の出土遺構配置図３（縮尺1／300）……20
図13　文京遺跡18次調査Ｂ区の出土遺構配置図（縮尺１／100、１／200）……22
図14　塹壕出土遺物実測図（縮尺２／３）……23
図15　Ａ区土層断面図（縮尺１／80）24-25（折り込み）
図16　Ａ区Ⅱ-２-①層出土遺物実測図（縮尺１／３）……25
図17　Ａ区Ⅱ-２-②（上層水田）層遺構配置図（縮尺１／100）……26-27（折り込み）
図18　Ａ区Ⅱ-２-②（上層水田）層に伴う水口部分の土層断面図（縮尺１／20）……27
図19　Ａ区Ⅱ-２-②（上層水田）層に伴う溝の土層断面図１（縮尺１／20）……34
図20　Ａ区Ⅱ-２-②（上層水田）層に伴う溝の土層断面図２（縮尺１／20）……35
図21　Ａ区Ⅱ-２-②（上層水田）層に伴う水路・水口出土遺物実測図（縮尺1／３）……36
図22　Ａ区Ⅱ-２-②（上層水田）層の耕作土出土遺物実測図（縮尺1／３）……37
図23　Ａ区Ⅱ-２-②（上層水田）層の畦畔部出土遺物実測図１（縮尺1／３）……37
図24　Ａ区Ⅱ-２-②（上層水田）層の床土層出土遺物実測図（縮尺1／３）……38
図25　Ａ区Ⅱ-２-②（上層水田）層の畦畔部出土遺物実測図２（縮尺２／３）……38
図26　Ａ区Ⅱ-２-③層出土遺物実測図１（縮尺２／３）……40
図27　Ａ区Ⅱ-２-③層出土遺物実測図２（縮尺１／３）……41
図28　Ａ区Ⅱ-２-③層出土遺物実測図３（縮尺１／３）……42
図29　Ａ区Ⅱ-２-④（中層水田）層に伴う水口部分の土層断面図１（縮尺１／20）……44
図30　Ａ区Ⅱ-２-④（中層水田）層遺構配置図（縮尺１／100）……44-45（折り込み）
図31　Ａ区Ⅱ-２-④（中層水田）層に伴う水口部分の土層断面図２（縮尺１／20）……50
図32　Ａ区Ⅱ-２-④（中層水田）層 SD-101出土遺物実測図（縮尺１／３）……51
図33　Ａ区Ⅱ-２-④（中層水田）層に伴う水口部分の土層断面図３（縮尺１／20）……52
図34　Ａ区Ⅱ-２-④（中層水田）層 SD-102出土遺物実測図（縮尺１／３）……53
図35　Ａ区Ⅱ-２-④（中層水田）層 SD-103・104・114・119・122・水口出土遺物実測図（縮尺１／３）……54
図36　Ａ区Ⅱ-２-④（中層水田）層 SX-121出土遺物実測図（縮尺１／３）……56
図37　Ａ区Ⅱ-２-④（中層水田）層耕作土出土遺物実測図（縮尺１／３）……57
図38　Ａ区Ⅱ-２-④（中層水田）層畦畔出土遺物実測図（縮尺１／３）……58
図39　Ａ区Ⅱ-２-④（中層水田）層床土層出土遺物実測図（縮尺１／３）……59
図40　Ａ区Ⅱ-２-③層、Ⅱ-２-④（中層水田）層耕作土層・畦畔・床土層出土遺物実測図（縮尺２／３）……60

図41　A区SK-201～204遺構実測図（縮尺１／50）……61
図42　A区Ⅱ-２-⑤層上面から掘り込まれた遺構配置図（縮尺１／100）……62-63（折り込み）
図43　A区SK-201・202、SD-208出土遺物実測図（縮尺１／３）……63
図44　A区SK-201出土遺物実測図（縮尺２／３）……64
図45　A区SK-201・SD-208・209出土遺物実測図（縮尺２／３）……65
図46　A区SD-209出土遺物実測図（縮尺１／３）……65
図47　A区Ⅱ-２-⑤層出土遺物実測図１（縮尺１／３）……67
図48　A区Ⅱ-２-⑤層出土遺物実測図２（縮尺１／３）……68
図49　A区Ⅱ-２-⑥（下層水田）層遺構配置図（縮尺1／100）……70-71（折り込み）
図50　A区Ⅱ-２-⑥（下層水田）層SD-301・302・水口出土遺物実測図（縮尺１／３）……73
図51　A区Ⅱ-２-⑥（下層水田）層SD-301出土遺物実測図（縮尺１／２）……74
図52　A区Ⅱ-２-⑥（下層水田）層SD-301・307・水田畦畔出土遺物実測図（縮尺２／３）……75
図53　A区Ⅱ-２-⑥（下層水田）層耕作土層出土遺物実測図（縮尺１／３）……76
図54　A区Ⅱ-２-⑥（下層水田）層畦畔部出土遺物実測図（縮尺１／３）……77
図55　A区Ⅱ-２-⑤層、Ⅱ-２-⑥（下層水田）層耕作土層・畦畔部出土遺物実測図（縮尺２／３）……77
図56　A区SR-400①層出土遺物実測図１（縮尺１／３）……79
図57　A区SR-400①層出土遺物実測図２（縮尺１／３）……80
図58　A区SR-400②a層出土遺物実測図（縮尺１／３）……81
図59　A区SR-400②b～m層出土遺物実測図（縮尺１／３）……82
図60　A区SR-400②b層出土遺物実測図（縮尺１／３）……83
図61　A区SR-400②i～m層出土遺物実測図（縮尺１／３）……84
図62　A区SR-400②e層出土遺物実測図１（縮尺１／３）……85
図63　A区SR-400②e層出土遺物実測図２（縮尺１／３）……86
図64　A区SR-400③層出土遺物実測図１（縮尺１／３）……86
図65　A区SR-400③層出土遺物実測図２（縮尺１／３）……87
図66　A区SR-400①・③層出土遺物実測図（縮尺２／３）……88
図67　A区SR-400③層出土遺物実測図３（縮尺２／３）……88
図68　A区DV・DW-41・42区、DX～DZ-41～44区の耕作痕跡（縮尺１／100）……91
図69　A区犂による耕作痕跡出土遺物１（縮尺１／３、２／３）……92
図70　A区SR-400および微高地上の遺構配置図（縮尺１／100）……92-93（折り込み）
図71　A区SB-410～412遺構実測図（縮尺１／50）……93
図72　A区SB-412出土遺物実測図（縮尺１／３）……94
図73　A区SB-413遺構実測図（縮尺１／50）……95
図74　A区SB-414出土遺物実測図（縮尺１／３）……95
図75　A区SB-414遺構実測図（縮尺１／50）……96
図76　A区SB-415遺構実測図（縮尺１／50）……97
図77　A区SB-415出土遺物実測図１（縮尺１／３）……97
図78　A区SB-415出土遺物実測図２（縮尺１／３）……98
図79　A区SB-416遺構実測図（縮尺１／50）……99
図80　A区SB-416出土遺物実測図（縮尺１／３）……100
図81　A区SB-417遺構実測図（縮尺１／50）……101
図82　A区SB-417出土遺物実測図（縮尺１／３）……102
図83　A区SB-418遺構実測図（縮尺１／50）……103
図84　A区SB-419遺構実測図（縮尺１／50）……103
図85　A区SB-419出土遺物実測図（縮尺１／３）……104
図86　A区SB-420遺構実測図（縮尺１／50）……105
図87　A区SB-420出土遺物実測図（縮尺１／３）

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 106
図88　A区 SB-421遺構実測図（縮尺１／50）・・・・ 107
図89　A区 SB-421出土遺物実測図（縮尺１／３）
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 107
図90　A区 SB-422遺構実測図（縮尺１／50）・・・・ 108
図91　A区 SB-422出土遺物実測図（縮尺１／３）
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 108
図92　A区 SB-423遺構実測図（縮尺１／50）・・・・ 109
図93　A区 SB-423出土遺物実測図（縮尺１／３）
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 109
図94　A区 SB-424遺構実測図（縮尺１／50）・・・・ 110
図95　A区 SB-424出土遺物実測図（縮尺１／３）
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 110
図96　A区 SK-401・402・406・407・408・425遺構実測図（縮尺１／50）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 111
図97　A区 SK-401・408出土遺物実測図（縮尺１／３）
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 112
図98　A区 SK-401出土遺物実測図（縮尺２／３、１／３）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 112
図99　A区 SK-402出土遺物実測図１（縮尺１／３）
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 113
図100　A区 SK-402出土遺物実測図２（縮尺１／３）
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 114
図101　A区 SK-402出土遺物実測図３（縮尺１・２：２／３、３：１／２）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 114
図102　A区 SK-402出土遺物実測図４（縮尺１／３）
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 115
図103　A区 SK-404・406・407・425出土遺物実測図（縮尺１／３）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 117
図104　A区 SD-405遺構実測図（縮尺１／50）・・・・ 118
図105　A区 SA-409遺構実測図（縮尺１／50）・・・・ 119
図106　A区 SP-443・466・473・495・496・508・528・539・566・567・569遺構実測図（縮尺１／50）
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 120
図107　A区 SP-446・471・473・508・527・529・539・566・569出土遺物実測図（縮尺１／３）
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 121
図108　B区土層断面図（縮尺１／80）
・・・・・・・ 122-123（折り込み）
図109　B区遺構配置図（縮尺１／100）
・・・・・・・ 122-123（折り込み）
図110　B区 SC-605遺構実測図（縮尺1／50）・・・・・ 124
図111　B区 SC-605・606（DG・DH-38・39区）上面Ⅲ層出土遺物実測図（縮尺１／３）・・・・・・・・・ 125
図112　B区 SC-606出土遺物実測図（縮尺１／３）
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 125
図113　B区 SC-606・741・747・748遺構実測図（縮尺1／50）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 126
図114　B区 SC-670遺構実測図（縮尺１／50）・・・・ 127
図115　B区 SC-670出土遺物実測図１（縮尺１／３）
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 129
図116　B区 SC-670出土遺物実測図２（縮尺１／２）
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 130
図117　B区 SC-670上面Ⅲ層出土遺物実測図（縮尺１／３）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 130
図118　B区 SC-689・738遺構実測図（縮尺１／50）
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 131
図119　B区 SC-729、SK-713遺構実測図（縮尺１／50）
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 132
図120　B区 SC-729・SC-730・SC-738出土遺物実測図（縮尺１／３）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 132
図121　B区 SC-730・SC-735遺構実測図（縮尺１／50）
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 133
図122　B区 SC-750遺構実測図（縮尺１／50）・・・・ 134
図123　B区 SC-750出土遺物実測図１（縮尺１／３）
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 134
図124　B区 SC-750出土遺物実測図２（縮尺１／２）
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 135
図125　B区 SC-750出土遺物実測図３（縮尺１／２）
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 135
図126　B区 SC-751・752遺構実測図（縮尺１／50）
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 136
図127　B区 SC-751出土遺物実測図（縮尺１／３）
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 137
図128　B区 SC-752出土遺物実測図（縮尺１／３）
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 138
図129　B区 SB-740遺構実測図（縮尺１／50）・・・・ 139
図130　B区 SB-740出土遺物実測図１（縮尺１／３、２／３）
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 141
図131　B区 SB-740出土遺物実測図２（縮尺２／３）
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 141
図132　B区 SB-743・744・746・749遺構実測図（縮尺１／50）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 142
図133　B区 SB-749出土遺物実測図１（縮尺１／３）
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 143

図134 B区SB-749出土遺物実測図２（縮尺１／２）……143
図135 B区SD-601遺構実測図（縮尺１／60）……145
図136 B区SD-601出土遺物実測図１（縮尺１／３）……145
図137 B区SD-601出土遺物実測図２（縮尺１／１、１／２）……146
図138 B区SD-601出土遺物実測図３（縮尺２／３）……147
図139 B区SD-602遺構実測図（縮尺１／60）……147
図140 B区SD-602出土遺物実測図（縮尺１／３）……147
図141 B区SD-603・604・610遺構実測図（縮尺１／50）……148
図142 B区SD-603出土遺物実測図（縮尺１／３）……149
図143 B区SD-603上面出土遺物実測図（縮尺１／３）……149
図144 B区SD-604出土遺物実測図（縮尺１／３）……150
図145 B区SD-610出土遺物実測図（縮尺１／３）……151
図146 B区SD-627遺構実測図（縮尺１／60）……151
図147 B区SK-647・662・663・666・675・684・693・697・710遺構実測図（縮尺１／50）……153
図148 B区SK-647・SK-662・SK-693出土遺物実測図（縮尺１／３）……154
図149 B区SK-663出土遺物実測図１（縮尺１／３）……155
図150 B区SK-663出土遺物実測図２（縮尺１／２）……155
図151 B区SK-690・695遺構実測図（縮尺１／50）……156
図152 B区SK-690出土遺物実測図１（縮尺１／３）……157
図153 B区SK-690出土遺物実測図２（縮尺１／３）……158
図154 B区SK-690出土遺物実測図３（縮尺１／２）……159
図155 B区SK-695出土遺物実測図１（縮尺１／３）……160
図156 B区SK-695出土遺物実測図２（縮尺１／２）……160
図157 B区SK-697出土遺物実測図（縮尺１／３）……160
図158 B区SK-705出土遺物実測図１（縮尺１／３、２／３）……161
図159 B区SK-705・725遺構実測図（縮尺１／50）……162
図160 B区SK-705出土遺物実測図２（縮尺１／２、１／４）……163
図161 B区SK-710出土遺物実測図（縮尺１／３）……164
図162 B区SK-711・739遺構実測図（縮尺１／50）……164
図163 B区SK-711出土遺物実測図１（縮尺１／３）……165
図164 B区SK-711出土遺物実測図２（縮尺１／２）……165
図165 B区SK-713出土遺物実測図（縮尺１／３）……166
図166 B区SK-725出土遺物実測図（縮尺１／３）……167
図167 B区SK-725あるいはSK-732出土遺物実測図１（縮尺１／３）……167
図168 B区SK-725あるいはSK-732出土遺物実測図２（縮尺２／３）……167
図169 B区SK-739出土遺物実測図（縮尺１／３）……169
図170 B区SX-669出土遺物実測図（縮尺１／３）……170
図171 B区SP-607・608・609・611・626・637・656・659・661・683・702・715・716・723・724・737遺構実測図（縮尺１／50）……171
図172 B区SP-611・628出土遺物実測図（縮尺１／３）……172
図173 B区SP-607・655・656・659・665・668・672・677・683・699・701・708・728出土遺物実測図（縮尺１／３、２／３）……173
図174 B区SP-624・626・682・702・721出土遺物実測図（縮尺１／３、２／３）……174
図175 B区Ⅲ層出土遺物実測図１（縮尺１／３）……176
図176 B区Ⅲ層出土遺物実測図２（縮尺１／３）……177
図177 B区Ⅲ層出土遺物実測図３（縮尺１／２、２／

3）…… 178
図178 文京遺跡18次調査Ａ区出土の古代～中世の遺物分類１（縮尺１／３）…… 181
図179 文京遺跡18次調査Ａ区出土の古代～中世の遺物分類２（縮尺１／３）…… 184
図180 各型式の層序における出土状況 …… 186
図181 古代後半～中世前期の土師器・黒色土器の変遷（縮尺１／５）…… 187
図182 文京遺跡18次調査Ａ区の遺構変遷１（縮尺１／500）…… 190
図183 文京遺跡18次調査Ａ区の遺構変遷２（縮尺１／500）…… 191
図184 文京遺跡18次調査Ｂ区周辺の古墳時代後期の遺構分布 …… 194
図185 文京遺跡18次調査Ａ区における弥生時代の遺構分布（縮尺１／500）…… 195
図186 文京遺跡18次調査Ｂ区周辺の弥生時代の遺構分布 …… 197
図187 文京遺跡18次調査Ｂ区の弥生時代遺構の変遷 …… 198

写真図版目次

図版１－１　愛媛大学城北キャンパス（中央の運動場が調査地点、1998年12月、南西から）
２　Ａ区調査区東壁土層
３　Ａ区調査区北壁中央～東部土層
図版２－１　Ａ区全景（調査前、南東から）
２　Ａ区表土剥ぎ作業（南東から）
図版３－１　Ａ区Ⅱ-２-②（上層水田）層完掘状況（東から）
２　Ａ区Ⅱ-２-②（上層水田）層完掘状況（北東から）
図版４－１　Ａ区Ⅱ-２-②（上層水田）層完掘状況（西から）
２　Ａ区Ⅱ-２-②（上層水田）層完掘状況（北西から）
図版５－１　Ａ区東半部Ⅱ-2-②（上層水田）層完掘状況（北西から）１
２　Ａ区東半部Ⅱ-２-②（上層水田）層完掘状況（北西から）２
図版６－１　Ａ区Ⅱ-２-②（上層水田）層 SD-10周辺（西から）
２　Ａ区Ⅱ-２-②（上層水田）層 SD-12周辺（東から）
３　Ａ区Ⅱ-２-②（上層水田）層 SD-18周辺（西から）
４　Ａ区Ⅱ-２-②（上層水田）層 SD-25（北から）
図版７－１　Ａ区北東部Ⅱ-２-②（上層水田）層完掘状況（北西から）
２　Ａ区北東部Ⅱ-２-②（上層水田）層完掘状況（西から）
３　Ａ区Ⅱ-２-②（上層水田）層 SD―8～10東半部周辺（北西から）
４　Ａ区Ⅱ-２-②（上層水田）層 SD-10（DV-45-5区）獣歯出土状況
図版８－１　Ａ区Ⅱ-２-④（中層水田）層完掘状況（北東から）
２　Ａ区Ⅱ-２-④（中層水田）層完掘状況（東から）
図版９－１　Ａ区Ⅱ-２-④（中層水田）層完掘状況（南西から）
２　Ａ区Ⅱ-２-④（中層水田）層完掘状況（北西から）
図版10－１　Ａ区北半部Ⅱ-２-④（中層水田）層完掘状況（南西から）
２　Ａ区Ⅱ-２-④（中層水田）層 SX-121（北西から）
図版11－１　Ａ区 DV ～ DX-41～43区Ⅱ-２-②層下層検出の耕作痕跡（東から）
２　Ａ区 DV ～ DX-41～43区Ⅱ-２-②下層検出の耕作痕跡（西から）
図版12－１　Ａ区 SD-208・209（東から）
図版13－１　Ａ区 SD-208灰ブロック出土状況（DW-44区、東から）
２　Ａ区 SK-201土層断面（東から）
図版14－１　Ａ区Ⅱ-2-⑥（下層水田）層完掘状況（東から）１

図版15－1　A区Ⅱ－2-⑥(下層水田)層完掘状況(東から) 2
2　A区Ⅱ－2-⑥(下層水田)層完掘状況(北東から)
図版16－1　A区Ⅱ－2-⑥（下層水田）層 SD-301・302（東から）
2　A区Ⅱ－2-⑥（下層水田）層 SD-301土層断面（DT-42区、東から）
図版17－1　A区 SR-400およびⅣ層上面出土遺構（東から）
図版18－1　A区 SR-400（東から）
2　A区 SR-400（南東から）
図版19－1　A区微高地上Ⅳ層上面出土の遺構（東から）1
図版20－1　A区微高地上Ⅳ層上面出土の遺構（東から）2
図版21－1　A区 SB-413～416検出状況（東から）
2　A区 SB-413～416完掘状況（南から）
図版22－1　A区 SB-417検出状況（東から）
2　A区 SB-417完掘状況（南西から）
図版23－1　A区 SB-419・420完掘状況（南東から）
2　A区 SB-421完掘状況（南東から）
図版24－1　A区 SB-412・422・423完掘状況（南東から）
2　A区 SK-402土層断面・遺物出土状況（東から）
図版25－1　B区完掘状況全景（北西から）
2　B区東壁土層（北東から）
3　B区東壁土層（南西から）
図版26－1　B区東壁土層（南西から）
2　B区西壁土層（南東から）
3　B区 SD-630・SD-604東壁土層(北西から)
4　B区 SD-601東壁土層（南西から）
図版27－1　B区北半部完掘状況（西から）
2　B区北半部完掘状況（北から）
図版28－1　B区南端 DH・DI-31～33区完掘状況（南から）
2　B区南端 DH・DI-31～33区完掘状況（北から）
図版29－1　B区 SC-670（南から）
2　B区 SK-690（南西から）
図版30－1　B区 SK-697・739（南から）
2　B区 SK-739完掘状況（南から）
図版31－1　B区 SK-705（南から）
2　B区 SK-725（南から）
図版32－1　B区 SX-711炭化物検出状況（東から）
2　B区 SB-740SP-687土層（南から）
3　B区 SB-740SP-688土層（南から）
図版33　A区出土遺物1
図版34　A区出土遺物2
図版35　A区出土遺物3
図版36　A区出土遺物4
図版37　A区出土遺物5
図版38　A区出土遺物6
図版39　A区出土遺物7
図版40　A区出土遺物8
図版41　B区出土遺物1
図版42　B区出土遺物2
図版43　B区出土遺物3
図版44　B区出土遺物4
図版45　B区出土遺物5
図版46　B区出土遺物6
図版47　B区出土遺物7
図版48　B区出土遺物8
図版49　B区出土遺物9
図版50　B区出土遺物10
図版51　B区出土遺物11
図版52　B区出土遺物12
図版53　B区出土遺物13

表　目　次

表1　周辺の既往調査一覧 …… 12～14
表2　文京遺跡18次調査出土主要遺構一覧 …… 21

序　　説

1　調査にいたる経緯と調査体制

（1）　調査にいたる経緯

1998（平成10）年５月、施設部から埋蔵文化財調査室へ、総合情報処理センター（現 総合情報メディアセンター南棟）建物新営工事についての報告があり、６月25日には総合情報処理センター長から発掘調査の依頼があった。しかし、建物新営予定地は、前年の1997（平成９）年７月１日に松山市文化財審議会から愛媛大学に対して要望された遺跡保存範囲内にあり、以後、遺跡の保存問題とかかわって、発掘調査に着手するまで学内外との協議を進めることとなった。保存問題については、すでに2002年に刊行した『愛媛大学埋蔵文化財調査室年報―1997・1998年度―』で記しているが、今回の調査と深くかかわるので、これにもふれながら調査にいたる経緯を報告する。

文京遺跡の保存・保護の要望に対しては、1997年７月９日に開かれた埋蔵文化財調査委員会で既往の調査成果を踏まえた埋蔵文化財の分布状況が報告された。これを受けて、９月10日の全学の将来計画委員会は、城北団地及び山越団地長期計画検討部会に対して、施設整備基本計画の見直しの中で埋蔵文化財に対する本学の方針の検討が諮問された。11月13日に開かれた検討部会では、埋蔵文化財調査室長が遺跡の保存理由について説明し、翌1998年１月７日には埋蔵文化財調査室長名で遺跡の保存理由、保存の範囲について文書で回答した。この検討部会の審議結果は、答申として４月８日の全学の将来計画委員会に報告された。その中には、遺跡は何らかの形で保存する必要があること、埋蔵文化財にかかわる事項は、必要な時点で施設整備委員会及び埋蔵文化財調査委員会などで審議することが含まれていた。

一方、５月13日の全学の施設整備委員会では、1996（平成８）年６月に文部省へ提出した建設計画可能範囲の中で総合情報処理センターの建設が了承された。遺跡の保存・保護についての審議が進められている中での総合情報処理センター建物新営工事の決定であり、前述したように、建設予定地は松山市から要望された遺跡保存範囲内にあり、その後、埋蔵文化財調査室と施設部だけでなく、学長、関係委員会との協議が進められる。

７月８日には、埋蔵文化財調査委員会が開催され、遺跡の保存要請と教育研究棟の設置要求との調和を図りながら、今後の施設整備にあたり、グリーンゾーン的なものも考慮することが確認された。８月24日、埋蔵文化財調査室に大学事務局と松山市教育委員会との協議経緯が報告され、総合情報処理センター建物新営と遺跡保存範囲の関係を具体的に示してもらいたい旨の要望があったことが説明された。これを受けて、９月24日、事務局長を含めて、施設部と埋蔵文化財調査室で、遺跡保存範囲を明確にすること、工事にあたっての工法の変更などの可能性が協議された。さらに、９月30日、鮎川学長、事務局長、施設部、埋蔵文化財調査室で、総合情報処理センター建設について意見が交換され、①旧グラウンドの工学部校舎と総合情報処理センターおよび図書館建設予定地の間の範囲を埋蔵文化財の保存・保護もかねたグリーンゾーンとすることを大学長の責任として決定し、その内容と範囲を学外へ明言すること、②グリーンゾーンを設けるに伴って、総合情報処理センターの建設予定地を北側に４ｍずらすことの２点に沿った検討を進めることの基本方針が確認され、文化財保護法の発掘調査の届け出書類を整え、10月１日に松山市教育委員会へ提出した。10月14日に開かれた全学の施設整備委員会では、委員長である鮎川学長から、城北団地全体のキャンパス構成上からグリーンゾーンとすることが望ましい旨提案され、その範囲が検討され了承された（図１）。その際、グリーンゾーンの将来像について委員から質問があり、委員長からは学生の憩いの場などとして予算の範囲内で整備したいとの発言があった。

以上の文京遺跡の保存・保護についての対応が具体的に決定されたことを踏まえて、埋蔵文化財調査室と施設部は、10月15日と10月20日に協議を行い、総合情報処理センター建設に伴う発掘調査について、①発掘調査の届け出の再確認の必要があること、②建設予定地がグリーンゾーンとして保存される範囲に接するため建設工法を変更すること、③工法変更に伴って調査

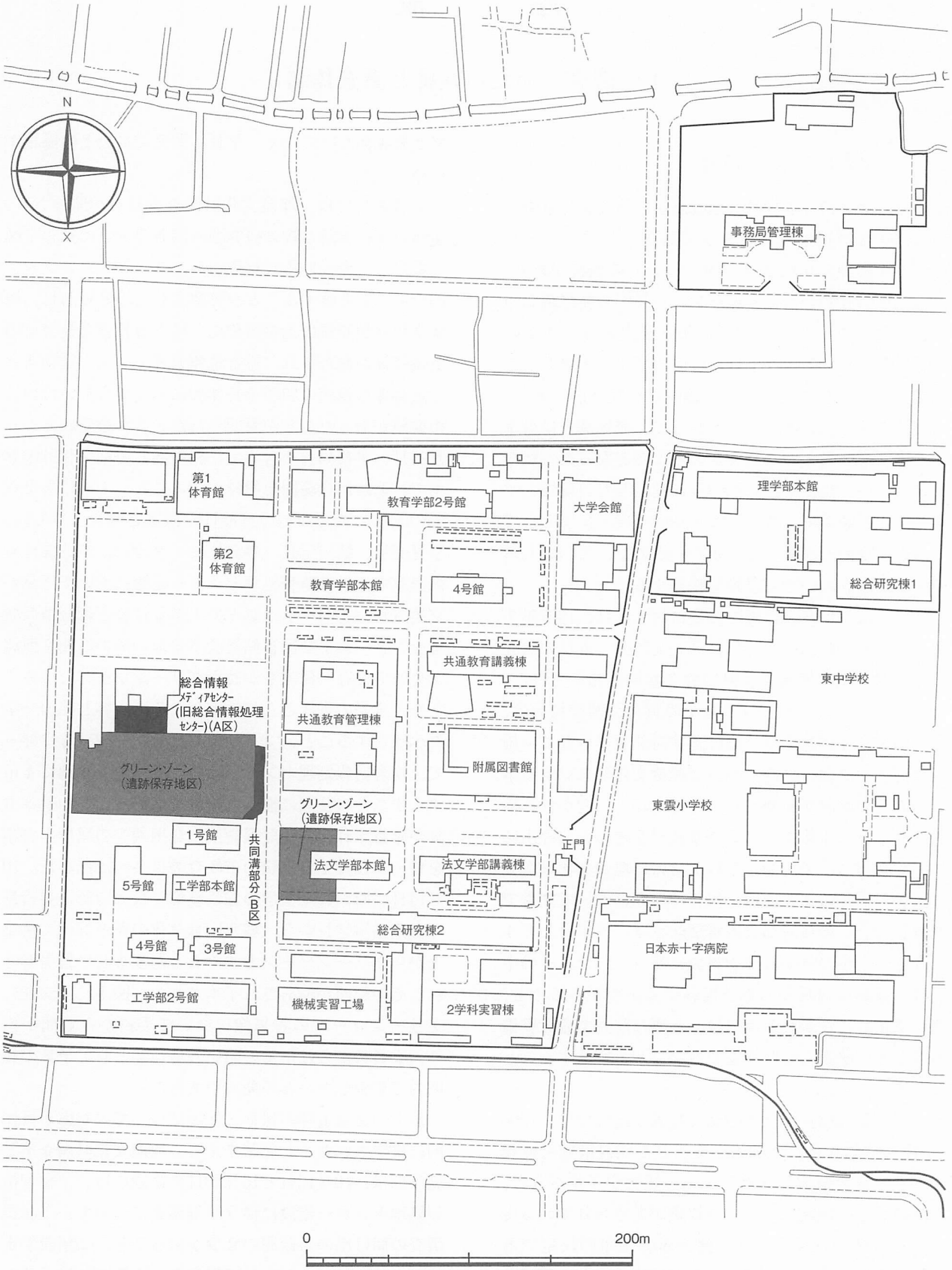


図1　文京遺跡 18 次調査地点とグリーンゾーン（遺跡保存地区）配置図（縮尺 1/3,500）

面積が狭くなることを確認した。10月20日には、埋蔵文化財調査委員会の持ち回り審議で、グリーンゾーンの範囲、文京遺跡の保存要望書への回答、総合情報処理センター建設に伴う発掘調査の着手が了承された。その後、具体的な発掘計画について協議を進め、11月６日に施設部に発掘調査計画書を提出し、11月25日の協議では、①12月11日から発掘調査に着手することと、②調査日程については２月の時点で再協議すること、③今次調査を文京遺跡18次調査とすること、④調査区は総合情報処理センターの建物本体部分と共同溝部分であること、⑤発掘調査は建設を急ぐ建物本体部分から着手することとなった。

（２）発掘調査体制

文京遺跡18次調査の発掘調査にかかわる1998（平成10）年度と1999（平成11）年度の埋蔵文化財調査委員会と埋蔵文化財調査室、施設部を含めた調査体制は、以下の通りである。

〈埋蔵文化財調査委員会〉

（委員長）

学　長　鮎川恭三（1998年度）

副学長　渡部晴行（1999年度）

（委　員）

法文学部長　小松光三（1998年度）
　　藤川研策（1999年度）

法文学部教授　下條信行
　　松原弘宣

教育学部長　向井康雄

教育学部助教授　川岡　勉（1999年度　教授）

理学部長　小松正幸

医学部長　植田規史（1998年度）
　　前田信治（1999年度）

工学部長　有井清益

農学部長　西頭徳三（1998年度）
　　白石雅也（1999年度）

事務局長　田中　勇（1998年度）
　　久保庭伊佐男（1999年度）

庶務部長　久保芳廣

経理部長　深谷英夫（1998年度）
　　野添文男（1999年度）

施設部長　鑄物良雄

〈埋蔵文化財調査室〉

（室長）下條信行（法文学部・教授）、調査の総括

（調査員）　田崎博之（法文学部・助教授）
　　吉田　広（法文学部　講師）
　　三吉秀充（法文学部・助手）

（調査補助）宮崎直栄（施設部事務補佐員）

（庶務担当）鈴木優子（施設部事務補佐員）

（調査補助員）

坂元　恒太（愛媛大学法文学部考古学専攻生学部
　　３年生、現ミュージアム知覧）

丸毛のぞみ（同３年生、現今治市教育委員会）

武田　尊子（同３年生、現松山市教育委員会）

田中久美子（同３年生）

田中いづみ（同２年生、現西条市教育委員会）

〈施設部〉

（部長）鑄物良雄

（総務係長）赤坂宏光

（企画課長）大谷　治

（企画係長）氏原　修

（施設課長）細谷　聖

（第一工営係長）篠崎正敏

（第一工営係主任）城戸芳夫

（３）発掘調査の経過

今次調査の調査区は総合情報処理センターの建物本体部分と共同溝部分に分かれている（図１）。建物本体部分をＡ区、共同溝部分をＢ区とし、Ａ区から発掘調査に着手することとした。当初、1998（平成10）年12月11日から開始する予定であったが、調査計画書の提出など、調査に関わる書類の不備が明らかとなり、実際に調査を開始したのは12月15日であった。その間は、雨水の流入を防ぐため調査区周辺で土嚢積みなどを行い、環境整備に努めた（図版１-１）。

発掘調査は、まず重機で表土の真砂土層を除去した後、Ａ区南東隅で基本層序のⅡ層を掘り下げ、地表下135cmで、後述する15次調査７トレンチのⅡ層を上下に分ける砂礫層に対応する堆積土層を確認した。この砂礫層の上面からは土師器の小片が出土した。そこで、砂礫層より上位のⅡ層をⅡ-１層、砂礫層以下をⅡ-２層とし、Ⅱ-１層の最下面まで重機で掘り下げた。

12月18日には、Ⅱ-１層最下面までの重機による除去が終わったＡ区東半部から、Ⅱ-２層最上部の砂礫層上面まで人力で掘り下げを始める。12月24日には、

構内に設置された基準点から国土座標系を移動し、５m方眼に測量用の杭を打ち始める。年末年始の休業を終わり、１月５日から調査を再開。Ａ区西半部で15次調査８トレンチの位置を確認した。また、塹壕が縦横に掘り込まれており、これらを人力で掘り下げ始める。１月６日には測量用の杭を打ち終わり、以後、文京遺跡全域で設定した調査区割りで遺構の位置確認と遺物の取り上げを始める。また、Ａ区東壁沿いに先行トレンチを設定して、Ⅱ-２層以下の土層の堆積状況を観察した。その結果、調査区南半部で基本層序のⅣ層が落ち込み、北半部に谷状の窪地が形成されていることを確認できた。その谷状の窪地の上部に堆積しているのがⅡ-２層である。Ⅱ-２層は、６層の砂礫層と水田層と考えられる土層から構成されており、最上部の砂礫層をⅡ-２-①層とし、以下Ⅱ-２-⑥層まで分層した。Ⅱ-２-①・③・⑤層は砂礫層、Ⅱ-２-②・④・⑥層は水田層である。なお、調査時には、Ⅱ-２-②層を上層水田、Ⅱ-２-④層を中層水田、Ⅱ-２-⑥層を下層水田と呼称した。

Ⅱ-２層の下層には、上部から砂礫混じりの灰茶色土層、灰白細砂・粗砂層、基底面の拳～人頭大の円礫を主体とする礫層が堆積している。谷状の窪地を流れる自然流路が埋積する過程で堆積した土層である。この自然流路をSR-400とした。

その後、Ａ区東半部からⅡ-２-①層の砂礫層を掘り下げ、Ⅱ-２-②（上層水田）層の畦畔部の上面を検出する。１月22日までに、Ⅱ-２-②（上層水田）層上面で水田区画と溝を検出し終え、１から連番の遺構番号を与えて、遺構ごとの精査を始める（図２）。Ａ区南半部では、Ⅱ-２-②（上層水田）層の上半はⅡ-１層の耕作で削平され、床土にあたる下半部しか残存していない。Ⅱ-２-①層の除去が終わったＡ区東半部から実測作業を開始。２月４・５日で全体写真を撮影した。２月８日からはⅡ-２-②（上層水田）層の掘り下げと精査に着手した。

２月16日、Ａ区南半部の微高地部分では、基本層序のⅣ層があらわれている。このⅣ層上面では、犂跡と考えられる幅が狭い溝群が東西にいく列ものびる。また、弥生時代～古墳時代と考えられる遺構を検出できた。これらの弥生時代～古墳時代と考えられる遺構は、Ａ区北半部にひろがるⅡ-２-③層以下の調査を終了後に進めることとした。

２月12日、施設部に調査の進捗状況を報告するとともに、調査期間を含めて発掘調査計画の見直しを行う。協議の結果、３月下旬までＡ区のⅡ-２-④（中層水田）層に伴う水田・水路の調査、４～５月にⅡ-２-⑥（下層水田）層および微高地上の弥生時代～古墳時代の遺構の調査、６～７月に共同溝部分のＢ区の調査を行うことし、発掘調査期間の変更を施設部に依頼した。また、２月24日には３月以降の調査補助員・作業員の動員計画を協議。２月26日には施設部へ発掘調査計画書を再提出した。

図２　Ａ区Ⅱ-2-②（上層水田）層上面の調査

３月１日、作業員を２グループに分けて、Ａ区西半部ではⅡ-２-②（上層水田）層の下半部（床土層）の精査を進める。東半部ではⅡ-２-③層の砂礫層を掘り下げている。下層のⅡ-２-④（中層水田）層の上面で、水田区画や溝の大略が検出されつつある。測量杭の打ち直しを行い、下層のⅡ-２-④（中層水田）層上面で検出した遺構配置図を作成し、101からの連番の遺構番号を付していく。３月17日、Ⅱ-２-④（中層水田）上面で出土した水田跡・溝の精査と、Ａ区東半部の遺構実測作業を終わり、３月18日には全景写真を撮影した。３月23日、Ａ区西半部の遺構実測作業を再開するとともに、Ⅱ-２-④（中層水田）層の掘り下げ精査を東半部から開始する。３月29日、Ａ区西壁に積み上げていた土嚢が倒壊した。終日かけて土嚢を積み直す。

４月に入り、Ⅱ-２-④（中層水田）層下に堆積した砂礫層であるⅡ-２-⑤層を掘り下げ始める。４月７日にはⅡ-２-⑥（下層水田）層上面での遺構検出作業を開始。４月８日には愛媛大学歴史学研究会、14･21･26日には法文学部学生の遺跡見学がつづく（図３）。４月15日、Ａ区東壁が部分的に倒壊したため、壁の削り直しを行うなど安全確保に努める。

４月20日にはＡ区全域でのⅡ-２-⑥（下層水田）

図３　法文学部考古学概論講義の遺跡見学

層上面の水田や溝の検出作業を終え、各水田面を覆う砂礫層であるⅡ-２-⑤層を掘り下げていった。その過程で、部分的に周辺よりも礫が多く混じる帯状の掘り込みがあることに気がついた。再度、遺構検出面を確認したところ、Ⅱ-２-⑥（下層水田）層の水田区画や溝を切る遺構を検出できた。溝・土壙・小穴があり、Ⅱ-２-⑥（下層水田）層を覆う砂礫層であるⅡ-２-⑤層を切り込んでいることを確認できた。つまり、Ⅱ-２-⑥（下層水田）層の上面で、新旧２時期の遺構を同時に検出したことになる。そこで、Ⅱ-２-⑥（下層水田）層の水田区画や溝に301から、これらを切り込む遺構には201からの連番の遺構番号を付して区分することとした。遺構の精査と実測作業を進め、５月11日、Ⅱ-２-⑥（下層水田）層上面の水田や溝の全景写真を撮影した。その後、Ⅱ-２-⑥（下層水田）層の掘り下げを進める。５月15日、現地説明会を開催し、150名の参加者があった。その後、Ⅱ-２層下層のSR-400を埋積する土層を掘り下げ始める。同時に、Ａ区南半部の微高地上に営まれた掘立柱建物、土壙、小穴の調査を開始する。これらの遺構については、401からの連番の遺構番号を付した。

このSR-400の河道上面まで調査した時点で、表土層から2.8mほどの深さとなっている。これ以上掘り下げを進めると調査壁が倒壊すると判断した。そこで、Ａ区壁際に沿って河道内の砂礫堆（中州）に1.5m幅の深掘りトレンチを設定して掘り下げることとし、下層の調査は断念せざるをえなかった。６月５日、SR-400と微高地上の遺構の実測を終了し、Ａ区北壁の土層断面を作成し、これをもってＡ区の調査を終了した。

６月10日、Ｂ区の発掘調査に着手する。５月に先行してＢ区の表土にあたるⅠ層を掘り下げていたので、Ⅱ層と攪乱部分を重機で除去する。６月12日、測量用の杭打ち。Ｂ区の南半部で東西にのびる溝が２条出土、北端部ではＡ区で出土したSR-400への落ち込みを確認した。また、Ｂ区南半部では、基本層序のⅢ層上面で遺物が点々と出土し始め、これ自体が遺構埋土であることが考えられた。そこで、Ⅲ層を薄く掘り下げながら、その都度遺構の検出作業を繰り返した。その結果、何重にも重複する遺構を検出することができた。これらのＢ区の遺構には、601からの連番の遺構番号を付している。

こうしたＢ区での遺構検出の困難さと、遺構の重複が激しいことから、その精査にはかなりの時間をかけることとなった。そのため、施設部と協議を行い、再度調査期間を変更せざるをえなかった。そのため、Ｂ区の調査を終えることができたのは７月30日であった。８月２日、発掘器材の撤収を行い、18次調査を完全に終了した。

2　整理作業と報告書刊行の体制と経過

発掘調査の終了後、2000（平成12）年度に出土遺物の洗浄・注記作業、遺物の分類・復元作業、2001（平成13）年度には遺構実測図および写真の整理、一部の遺構実測図の浄書を行った。しかし、1999年度以降も大面積の全面調査が引き続き実施されたため、整理作業を中断せざるをえず、出土遺物の実測作業に入ったのは2004（平成16）～2005（平成17）年度となった。また、報告書の刊行は当初、2005（平成17）年度を計画していたが、年度末まで実測作業が終わらず、やむをえず刊行を2006（平成18）年度に繰り越すこととなった。

この間の埋蔵文化財調査委員会、埋蔵文化財調査室の体制は、以下の通りである。

〈埋蔵文化財調査委員会〉

（委員長）

副学長　小松正幸（2000～2001年度）

理事　小林展章（2004年度）

理事　柳澤康信（2005年度）

副学長　林　和男（2006年度）
（委　員）
副学長（総務・施設担当）　亀井　崇（2006年度）
法文学部長　藤川研策（2000～2001年度）
今泉元司（2004年度）
湯浅良雄（2005年度）
森　孝明（2006年度）
法文学部教授　下條信行
松原弘宣
教育学部長　金藤泰伸（2000～2001年度）
渡邊弘純（2004～2005年度）
曲田清維（2006年度）
教育学部教授　川岡　勉
理学部長　真鍋　敬（2000～2001年度）
柳澤康信（2004年度）
野倉嗣紀（2005～2006年度）
医学部長　前田信治（2000年度）
小西正光（2001・2004年度）
橋本公二（2005～2006年度）
工学部長　清水　顯（2000～2001年度）
鈴木幸一（2004～2005年度）
高松雄三（2006年度）
農学部長　白石雅也（2000～2001・2004年度）
泉　英二（2005～2006年度）
事務局長　久保庭伊佐男（2000年度）
塩谷幾雄（2001年度）
田村幸男（2004年度）
門山　勇（2005年度）
庶務部長　久保芳廣（2000年度）
総務部長　大和田和平（2001年度）
経営企画部長　山田勝治（2004～2005年度）
山之内恵一（2006年度）
経理部長　野添文男（2000年度）
高橋伸一（2001年度）
白石薫二（2004年度）
財務部長　八木修一（2005～2006年度）
施設部長　土居昌弘（2000～2001年度）
山地久司（2004年度）
施設基盤部長　山地久司（2005～2006年度）
〈埋蔵文化財調査室〉
（室長）下條信行（法文学部・教授）
（調査員）　田崎博之（法文学部・教授）
吉田　広（法文学部・講師、2002年より助教授）
三吉秀充（法文学部・助手）
（調査補助）　宮崎直栄（施設部事務補佐員、2002年より教務補佐員）
（庶務担当）　鈴木優子（施設部事務補佐員、2000年度）
横本順子（施設部事務補佐員、2001年度）
渡邉かおる（施設部事務補佐員、2004～2006年度）
（整理作業担当）　丸岡美智子（施設部技能補佐員）
井手野文江（施設部技能補佐員）
門田　都（施設部技能補佐員）
松本美和子（施設部技能補佐員）
（遺物実測担当）　西澤昌平（施設部技術補佐員、2005年度）
濱田美加（施設部技術補佐員、2004～2006年度）

3　調査・整理の方法と遺物・記録類の保管

（1）調査区割りの設定と呼称

18次調査で発掘調査の対象となったのは、総合情報処理センター（現 総合情報メディアセンター南棟）建物本体部分と、これに接続する共同溝部分である。距離的にも離れており、文京遺跡の遺構分布も考慮し、建物本体部分をＡ区、共同溝部分をＢ区として調査を進めた（図４）。

Ａ区は、城北団地西部の旧グラウンド北部に位置する南北23m、東西38.5mの調査区である。現在の総合情報メディアセンター建物の南棟部分にあたる。文京遺跡15次調査８トレンチはＡ区の南西部に含まれ、旧グラウンドに設けられた文京遺跡の保存地区（グリーンゾーン）の北側に接している。

Ｂ区は、城北団地のほぼ中央部、Ａ区の南東側に位置し、旧グラウンド東側に沿った南北約40m、東西幅約６mの細長い調査区である。調査区の南端は文京遺跡14次調査区に接し、保存地区（グリーンゾーン）の

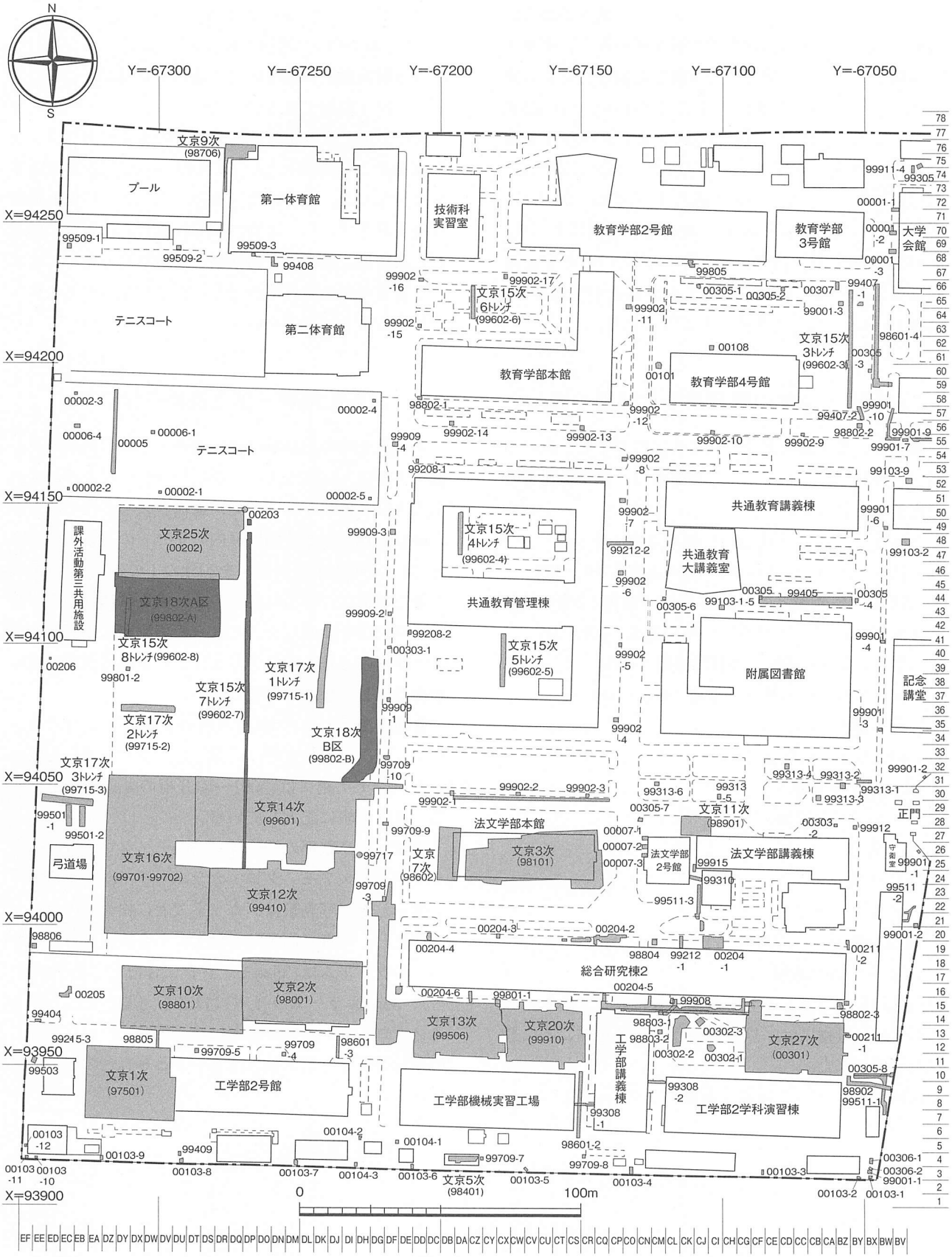


図４　城北キャンパス西半部の調査地点（縮尺　1/2,000）

東側に隣接する。

以上のA・B区の調査区名に加えて、城北団地内に設置されている平面直角座標Ⅳ系基準点から、座標点を移動して、5m方眼の調査区割を設定した。この調査区割は、1998（平成10）年にX=93900、Y=-66800を基点として設定した城北団地全域をカバーする調査区割である。A区はDR～DS-41～45区にあたる。B区はDG～DI-31～40区にあたる（図4）。さらに、必要に応じて、5m方眼を、南東隅から西に1～5、その北側列を6～10と、北西隅の25にいたる1m方眼区画に細分している。この1m方眼を示す場合は、「DR-15-14区」などと呼称することとした。

（2）遺構・遺物の登録番号と種別の表示

調査は、まず建物部分であるA区に着手し、次いでB区の調査を行った。出土した遺構は、以下の連番の遺構番号を付している。

A区Ⅱ-2-②（上層水田）層の遺構：1～42
A区Ⅱ-2-④（中層水田）層の遺構：101～123
A区Ⅱ-2-④層とⅡ-2-⑥層間の遺構：201～214
A区Ⅱ-2-⑥（下層水田）層の遺構：301～317
A区Ⅱ-2層下層出土の自然流路：400
A区南半部の微高地上の遺構：401～600
B区の遺構：601～741

以上の遺構番号に加えて、

SB：掘立柱建物
SC：竪穴式住居跡
SD：溝
SK：土壙
SP：柱穴・杭穴・小穴
SR：自然流路（旧河道）
SX：その他の遺構

の遺構の種別を示す略号を遺構番号に冠している。

出土した遺物には、以下のように、各層準ごとに遺物番号を付した。

A区Ⅱ-2-①・②層出土遺物：R-1～422
A区Ⅱ-2-③・④層出土遺物：R-501～985
A区Ⅱ-2-⑤・⑥層出土遺物：R-1001～1263
A区SR-400出土遺物：R-1301～1437
A区微高地上の遺構群出土遺物：R-1501～2517
B区出土遺物：R-2551～2653

さらに、同じ登録番号をもつ複数の遺物で実測および写真撮影した遺物には、R-3001～4582の遺物登録番号を付与した。遺物には、遺構、出土区・層位と遺物登録番号を注記し、遺物台帳を作成した。本書に掲載した遺物は、巻末の遺物観察表に遺物登録番号・コンテナ番号の項を設けて表記し、報告書から遺物の検索ができるようにしている。

（3）調査記録類・出土遺物の保管

発掘調査時の記録類には、遺構・土層の観察所見記録・実測図・写真がある。遺構の観察所見記録は、埋土の土質・色調やメモ類で、遺構台帳を作成し、個々の観察記録とした。調査区内のすべての遺構の全体図と、調査区壁の土層断面図を20分の1の縮尺で作成し、主要な遺構については20分の1、または10分の1の縮尺で個別図を作成した。これらの実測図には、0001からの4桁の連番の登録番号を付し、遺構実測図台帳に順次登録して整理・保管している。

遺物実測図には、001～3桁の連番の登録番号を与えて、順次、遺物台帳に記録した。また、遺物を収納したコンテナ箱には、001～の3桁の登録番号を付して、遺物台帳に記入している。

調査および整理の際には、35㎜モノクロ・カラースライド、6×7モノクロ・カラースライドによる写真を撮影した。写真類は、カットごとに検索用のカードを作成し、写真登録番号を付して、台帳に記録している。各フィルムは、35㎜モノクロに3桁＋2桁（001-01～）、35㎜カラースライドには3桁（001～）、6×7モノクロ・カラースライドには4桁（0001～）の通しの登録番号を付し、検索用カードと写真台帳に併記している。

Ⅰ　位置と環境

1　文京遺跡の位置と環境

文京遺跡が所在する道後平野（松山平野）は、四国西南部に位置し、重信川や石手川などが造る東西20㎞、南北17㎞の複合扇状地性平野である（図５）。平野の中で弥生時代の遺跡は、丘陵裾の段丘縁辺や扇状地上の微高地ごと、あるいは狭い谷を挟んだ丘陵上に、10グループほどの遺跡群を形成している。中でも、平野北部の石手川が造る標高20～50ｍの扇状地の北半部に展開しているのが道後城北遺跡群である。現在の道後温泉周辺から松山城のある勝山と御幸寺山に挟まれ、北側の祝谷を含め、東西２㎞、南北１～２㎞ほどの広がりをもつ。道後平野の他の遺跡群と比べて、弥生時代前期～終末期の遺跡が数多く確認され、遺跡密度も高く、道後今市遺跡・道後樋又遺跡・祝谷六丁場遺跡・道後公園山麓遺跡では平形銅剣が出土するなど、道後平野の中でも青銅器が集中する中心的な遺跡群である。

こうした道後城北遺跡群が展開する石手川扇状地の北半部は、これまでの発掘調査によって、旧流路である谷状の窪地が網目状に発達すること、窪地間の微高地は窪地からの比高差が２～３ｍと1.5ｍ前後の２つの地形面から構成されていること、集落遺跡は微高地でもより高い地形面を中心として営まれていることが明らかにされてきた（図６）。

この道後城北遺跡群のほぼ中央には、南北200ｍ、東西700ｍの微高地が広がる。遺跡群の中でもっとも広い微高地である。西半部に松山大学構内遺跡や松山北高等学校構内遺跡、東半部に愛媛大学城北キャンパスの文京遺跡や日本赤十字病院遺跡が営まれている。現在、これらの遺跡を総称して「文京遺跡」と呼んでいる。

その文京遺跡でも東半部にあたる愛媛大学城北キャンパスでは、1947年の校舎建設中に弥生土器や石庖丁

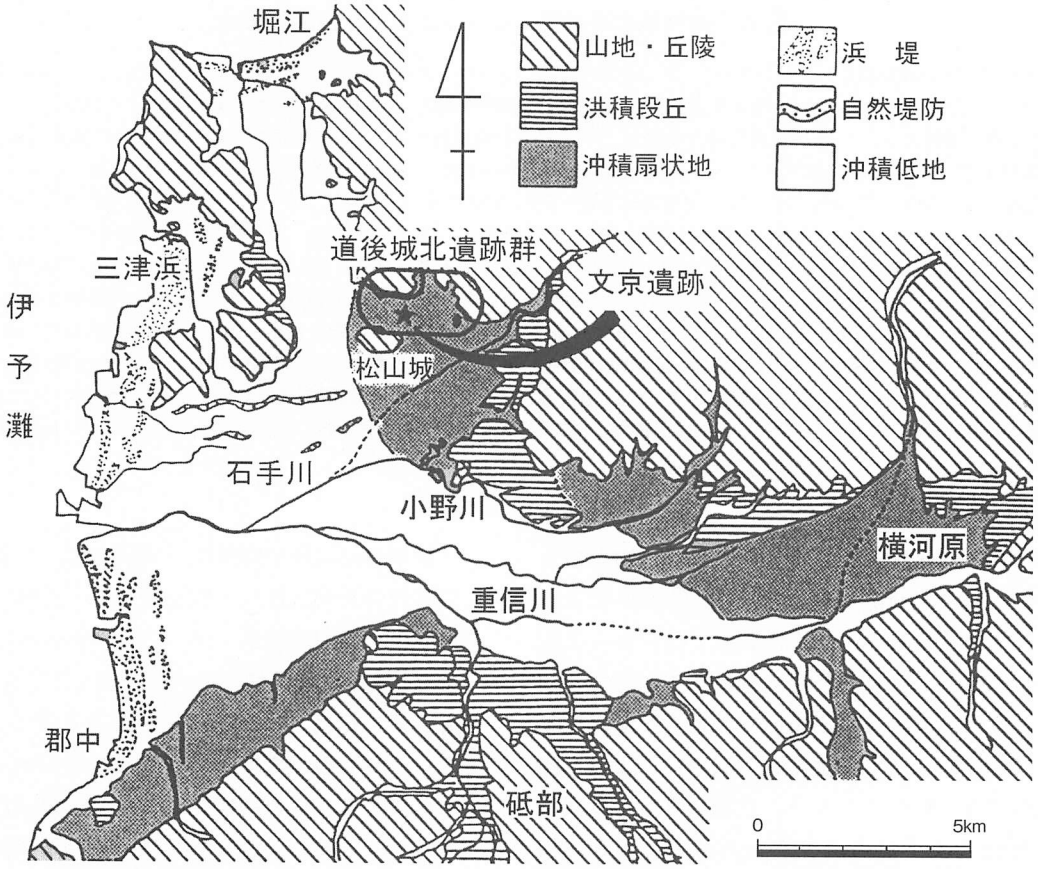


図５　道後平野の地形概要と道後城北遺跡群・文京遺跡の位置（平井1989より作成）

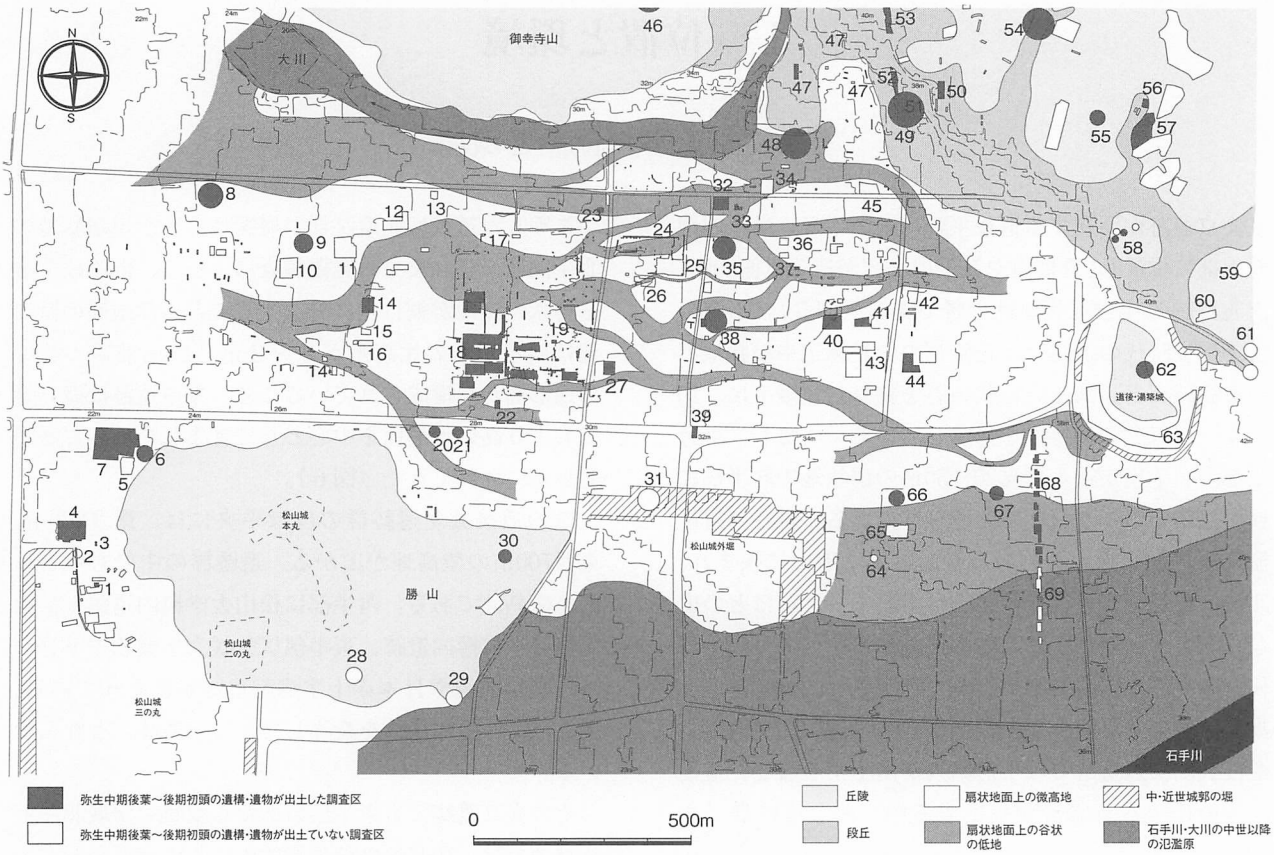


図６　道後城北遺跡群における地形と発掘調査地点

１：松山城跡（旧国立病院四国がんセンター）、２：堀之内遺跡、３：カキツバタ遺跡、４：若草町遺跡2次、５：若草町遺跡３次、６：府中町遺跡、７：若草町遺跡１次、８：勝山中学遺跡、９：松山大学構内遺跡、10：松山大学構内遺跡３次、11：松山大学構内遺跡２次、12：松山大学構内遺跡１次、13：道後城北ＲＮＢ遺跡、14：松山北高遺跡４次、15：松山北高遺跡１次、16：松山北高遺跡２・３次、17：文京遺跡９次、18：文京遺跡１～３・５・７・10・12・14～17次、19：文京遺跡11次、20：通町遺跡、21：水口遺跡、22：平和通り遺跡、23：道後樋又遺跡２次、24：文京遺跡８次、25：文京遺跡21・24次、26：文京遺跡４次、27：日本赤十字病院遺跡、28：城ノ内古墳、29：城山遺跡、30：東雲神社遺跡、31：土器掘遺跡、32：今市遺跡、33：道後今市遺跡９次、34：道後北代遺跡、35：（伝）樋又銅剣出土推定地、36：道後今市遺跡10次、37：道後今市遺跡８次、38：道後今市遺跡・道後今市遺跡６次、39：道後一万遺跡、40：道後今市遺跡２・11次、41：道後今市遺跡１次、42：道後今市遺跡５次、43：道後今市遺跡３次、44：道後今市遺跡4次、45：緑台遺跡、46：山崎遺跡、47：緑台遺跡、48：土居窪遺跡、49：緑台遺跡、50：土居窪遺跡１次、51：土居窪遺跡２次１・２区、52：土居窪遺跡２次３区、53：祝谷畑中遺跡、54：土居の段遺跡、55：田高遺跡、56：道後鷺谷遺跡、57：道後鷺谷遺跡、58：冠山遺跡、59：伊佐爾波神社裏古墳、60：道後姫塚遺跡、61：義安寺遺跡、62：道後公園山麓遺跡、63：道後湯築城跡、64：持田遺跡、65：持田町３丁目遺跡、66：持田遺跡、67：道後南町２丁目遺跡、68：岩崎遺跡５・６区、69：岩崎遺跡３・４区

が採集され、1962年にも弥生時代の大量の遺物が出土したことが西田栄（1967）や名本二六雄（1967）によって報告されている。1975年の１次調査では、竪穴式住居が出土したことで弥生時代の集落遺跡であることが明らかにされ、その後は松山市教育委員会、愛媛大学法文学部考古学研究室や埋蔵文化財調査室によって28次の大規模調査が行われてきた。試掘・立会・確認調査の80ヶ所ほどの小規模調査を含めると、現在、約17,800㎡が調査されている。その結果、縄文時代前期～後期の河川跡や野外炉、晩期終末の土器溜まり、弥生時代の竪穴式住居・掘立柱建物・貯蔵穴・土壙・方形や円形の周溝遺構・溝、古墳前期後半期の竪穴式住居・土壙、古墳後期の竪穴式住居・掘立柱建物・土壙・溝・鍛冶遺構、中世の掘立柱建物・溝などが出土し、さらに今回の調査では、古代後半期の水田跡・溝・貯水遺構・掘立柱建物が発見され、縄文時代から中世にわたって継続して営まれた複合遺跡としての性格が明らかになってきた。

図７　1974（昭和49）年頃の愛媛大学城北キャンパス周辺

２　周辺の既往調査

愛媛大学城北キャンパス南西部は、もともとグラウンドであったが（図７）、1980年以降、南側から旧グラウンドを縮小しながら、工学部３号館（1980年度、２次調査）、４号館（1988年度、10次調査）、本館（1994年度、12次調査）、１号館（1996年度、14次調査）、５号館（1997年度、16次調査）が建設されてきた（図４、表１）。これらの地点では、弥生時代中期後葉～後期の竪穴式住居・掘立柱建物・貯蔵穴・土壙・円形周溝遺構・溝、古墳時代後期の竪穴式住居・掘立柱建物・土壙・溝が、密集した状態で出土している。また、西側の法文学部本館（３・７次調査）周辺では、弥生時代中期後葉～後期前葉の竪穴式住居・掘立柱建物・土壙・方形周溝遺構に加えて、大型掘立柱建物が発見されている。さらに、南西側の無細胞生命科学研究センター（13次調査）やサテライト・ベンチャー・ビジネスラボラトリー（20次調査）では、弥生時代中期後葉～後期前葉の竪穴式住居跡に加えて、古墳時代後期の竪穴式住居・掘立柱建物・溝・鍛冶遺構などが出土している。

こうした城北キャンパス南西部は、前述した文京遺跡が営まれる微高地のほぼ中央部にあたり、弥生時代中期後葉～後期前葉の大規模集落が展開し、古墳時代後期には工学部１号館（1996年度、14次調査）や５号館（1997年度、16次調査）周辺と、無細胞生命科学研究センター（13次調査）やサテライト・ベンチャー・ビジネスラボラトリー（20次調査）の２ヶ所に分かれ

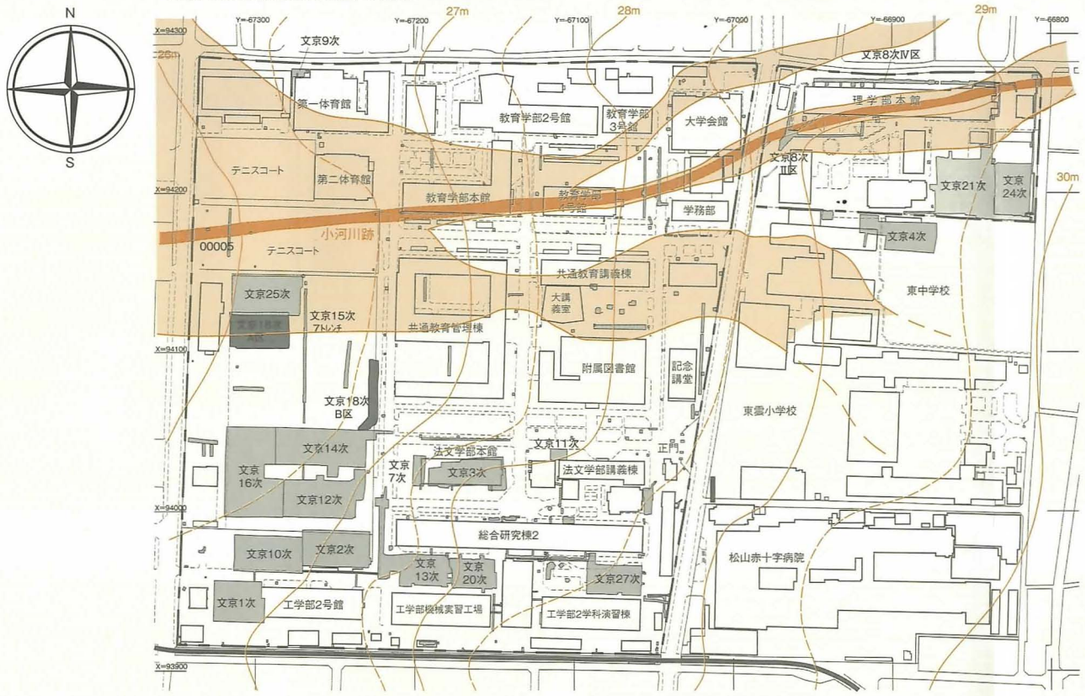
表１　周辺の既往調査一覧

調査番号	調査次数	調査種別	面積（㎡）	調査概要		文献
97501	１次	本格	750	弥生中期後葉～後期初頭の竪穴式住居跡４、土壙などが出土。		松山市報 11
98001	２次	本格	600	弥生中期後葉～後期初頭の竪穴式住居跡９、掘立柱建物５、土壙５、円形周溝遺構１、土器溜り１が出土。		松山市報 28
98101	３次	本格	800	弥生中期後葉～後期初頭の竪穴式住居跡７、方形周溝遺構１、土壙８、大型掘立柱建物の一部が出土。		松山市報 28
98401	５次	本格	18	弥生中期後葉～後期初頭の土壙（？）１、古墳後期の掘立柱建物１が出土。		松山市報 28
98601	６次	本格	99	未報告		未報告
98602	７次	本格	142	弥生中期後葉～後期初頭の竪穴式住居跡、大型掘立柱建物などが出土。		未報告
98706	９次	本格	62	地表下85㎝でⅢ層を確認。層厚５㎝。下位のⅣ層から縄文後期～晩期前葉の土器が出土。		調査室報告Ⅱ
98801	10次	本格	1075	弥生中期後葉～後期前半の竪穴式住居跡４、掘立柱建物２、溝10、円形周溝遺構１、土壙６、土器溜まり12。土器溜まりから中国鏡片・板状鉄器・鉄鏃・ガラス滓が出土。		調査室報告Ⅲ
98802		事前	5	２トレンチ	Ⅲ層を確認。	調査室報告Ⅴ
				３トレンチ	建物余堀りの攪乱部分。	
98803		事前	2	１トレンチ	地表下40㎝でⅢ層を確認。	調査室報告Ⅴ
				２トレンチ	地表下40㎝でⅢ層を確認。	
98804		事前	1	建物余掘り部分で、攪乱を受けていた。		調査室報告Ⅴ
98805		立会	6	北端部で小穴３基を確認。中央部以南は攪乱部分。		調査室報告Ⅴ
98806		立会	3.4	地表下70㎝でⅢ層を確認。Ⅲ層を精査したが、遺物は出土していない。		調査室報告Ⅴ
98901	11次	本格	85	Ⅲ層上面で古墳～中世の溝２が出土。Ⅲ層中位～Ⅳ層上面で弥生中期後葉～後期初頭の溝１・土壙２・小穴を検出、分銅形土製品・板状鉄斧が出土。Ⅳ層中位で縄文後期の野外炉３が出土、縄文土器・石皿・磨石が出土。		調査室報告Ⅱ
98902		立会	2	西半は攪乱で破壊。中央部では地表下50㎝でⅡ層直下にⅣ層があらわれる。東端部では地表下38㎝でⅢ層を確認。層厚７㎝。		調査室報告Ⅴ
99001		事前	3	１トレンチ	地表下50㎝で、Ⅲ層上位面を確認。	調査室報告Ⅴ
				２トレンチ	地表下38㎝で、Ⅲ層上位面を確認。	
				３トレンチ	地表下50㎝で、Ⅲ層上位面を確認。	
99208		立会	2	１トレンチ	地表下75㎝まで攪乱がつづく。	調査室報告Ⅴ
				２トレンチ	地表下75㎝で自然流路堆積層があらわれる。弥生土器もしくは土師器と考えられる土器片が出土。	
99212		立会	12	１トレンチ	地表下60㎝でⅢ層を確認。Ⅳ層上面で円形の竪穴式住居跡の一部が出土。	調査室報告Ⅴ
				２トレンチ	地表下55～98㎝は黄褐色砂礫層が続き、下位のⅣ層上面で土壙１と小穴１を検出。小穴の上面からは縄文晩期末～弥生前期初頭の土器片が出土。	
99215		立会	2	３トレンチ	既設管路上で、攪乱が続く。	調査室報告Ⅴ
99305		立会	2	地表下60㎝でⅡ層があらわれ、厚さ58㎝以上を測る。		調査室報告Ⅴ
99308		立会	8	１トレンチ	地表下70㎝まで攪乱部分。	調査室報告Ⅴ
				２トレンチ	地表下32㎝でⅢ層があらわれる。Ⅲ層は厚さ15㎝、出土遺物なし。	
99310		事前	4	地表下62㎝でⅢ層があらわれる。Ⅲ層の厚さは12㎝前後、Ⅳ層上面で弥生？の遺構を確認。遺物は出土していない。		調査室報告Ⅴ
99313		事前	15	１トレンチ	地表下68㎝でⅢ層があらわれる。Ⅲ層は厚さ25㎝、遺物は出土していない。	調査室報告Ⅴ
				２トレンチ	地表下88㎝でⅢ層があらわれる。Ⅲ層中位から溝が掘り込まれていた。時期は不明。Ⅴ層上面で落ち込みを確認。	
				３トレンチ	地表下70㎝でⅢ層を確認。Ⅲ層からは土器細片が数点出土。	
				４トレンチ	地表下92㎝でⅢ層を確認。Ⅲ層からは遺物は出土していない。表土下120～210㎝にはⅣ層が堆積。Ⅳ層中位から縄文後晩期の土器片が出土。	
				５トレンチ	地表下95㎝でⅢ層があらわれる。Ⅲ層の厚さは20～30㎝。南に向かって次第に厚くなる。遺物は出土していない。Ⅲ層以下にはⅣ層が堆積。	
				６トレンチ	地表下70㎝で、厚さ10㎝ほどのⅢ層を確認。攪乱部分から縄文土器の破片が出土。	
99404		立会	1	地表下54㎝で、厚さ20㎝のⅢ層を確認。Ⅲ層中からは、弥生中期後葉～後期初頭の甕や分銅形土製品が出土。遺構の埋土である可能性あり。		調査室報告Ⅴ
99405		事前	81.3	地表下95㎝まで掘り下げたが、Ⅱ層が続く。		調査室報告Ⅴ
99407		事前	5.9	１トレンチ	地表下60㎝まで配管敷設のための攪乱がつづく。	調査室報告Ⅴ
				２トレンチ	地表下63㎝のⅡ層直下でⅣ層があらわれる。	
99408		事前	3.2	地表下75㎝まで調査したが、攪乱されたⅠ層がつづく。		調査室報告Ⅴ
99409		立会	1	地表下115㎝でⅢ層上面を確認。Ⅲ層上面から弥生土器片が出土。		調査室報告Ⅴ
99410	12次	本格	1183	弥生中期後葉～後期中頃の竪穴式住居跡30、掘立柱建物５以上、貯蔵穴14、溝１、土壙60以上、古墳後期の溝１が出土。弥生中期後葉～後期中頃の遺物には、石庖丁・扁平片刃石斧・打製石鏃・土製紡錘車・大量の炭化米などがある。古墳後期の溝からは馬の歯顎が出土。		調査室報告Ⅴ
99501		立会	48	１トレンチ	地表下60㎝でⅢ層を確認。	調査室報告Ⅶ
				２トレンチ	地表下61㎝でⅢ層を確認。	
				３トレンチ	地表下95㎝でⅡ層があらわれ、120㎝までつづく。	
99503		立会	3	地表下85㎝で、厚さ13㎝のⅢ層を確認。さらに、地表下100㎝でⅣ層があらわれる。		調査室報告Ⅶ
99506	13次	本格	890	弥生中期中葉～後期前葉の竪穴式住居跡11、大型掘立柱建物１、溝６、土壙13、土器溜り２、古墳前期の竪穴式住居跡１、古墳後期の竪穴式住居跡14、掘立柱建物13、杭列３、鍛冶炉１、土壙17、焼土・灰ブロック12、古代～中世の溝２、土壙１などが出土。		調査室報告ⅩⅡ
99509		立会	3	１トレンチ	地表下100㎝で自然流路堆積物があらわれる。層厚50㎝。その直下はⅣ層。	調査室報告Ⅶ
				２トレンチ	地表下60㎝でⅢ層を確認。層厚６㎝。下層のⅣ層への変化は漸移的。	
				３トレンチ	地表下100㎝でⅢ層を確認。層厚６㎝。下層のⅣ層への変化は漸移的。	
99511		立会	34	１トレンチ	トレンチ北半部では、地表下20㎝で、Ⅳ層上面があらわれ、中世～近世の溝１、土壙２が出土。南半部では、地表下25～30㎝で、Ⅲ層があらわれた。Ⅲ層は南に向かって次第に厚くなり南端で60㎝を越える。弥生中期後葉の高坏や脚台付き鉢が出土。	調査室報告Ⅶ
				２トレンチ	地表下63㎝で自然流路堆積物である灰色砂礫層があらわれる。	
				３トレンチ	地表下60㎝で、厚さ23㎝のⅢ層を確認。	

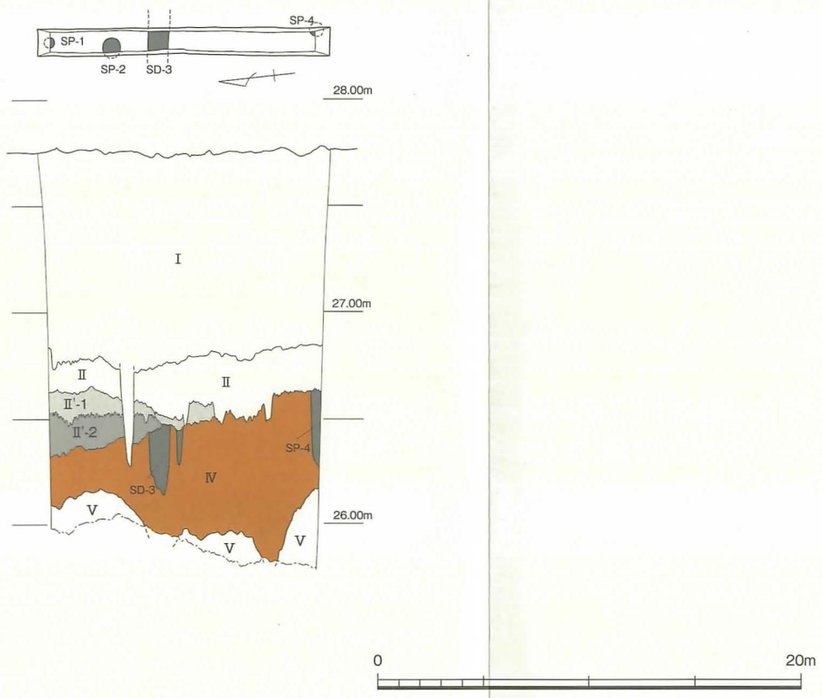
調査番号	調査次数	調査種別	面積(㎡)	調査概要		文献
99601	14次	本格	1349	弥生中期後葉～後期中頃の竪穴式住居跡46・掘立柱建物・溝・土壙が出土。石庖丁・石斧・打製石鏃・土製紡錘車・分銅形土製品が出土。また、古墳後期の竪穴式住居跡が出土。		調査室報告Ⅶ
99602	15次	確認	252.9	3トレンチ	地表下45～75cmでⅢ層を確認。Ⅲ層下面で、一辺5.5mの竪穴式住居跡1、自然流路1などが出土。	調査室報告Ⅶ
				4トレンチ	地表下70cmでⅡ層があらわれる。層厚85cm前後。下部は本報告のⅡ-2層に対応するものと考えられる。	
				5トレンチ	地表下70～95cmでⅣ層があらわれる。Ⅳ層を切り込む自然流路3、溝1を確認。	
				6トレンチ	地表下130cmでⅢ層を確認。層厚12～17cmで、粘性が強く、トレンチ北端では砂礫が多く混じる。	
				7トレンチ	本報告の15頁を参照。	
				8トレンチ	本報告の文京18次A区の範囲内。	
99701	16次	本格	1384	A区	弥生中期後葉～後期中頃の竪穴式住居跡36・溝15・土壙84、古墳後期の竪穴式住居跡2・土壙1・溝3、弥生もしくは古墳後期の掘立柱建物4、古墳後期～中世の柵列1が出土。弥生の遺物には滑石製指輪・南九州系土器がある。	調査室報告Ⅷ
99702	16次	本格	627	B区	弥生中期後葉～後期中頃と古墳後期の竪穴式住居跡35以上、掘立柱建物2以上、土壙18、溝3が出土。	調査室報告Ⅷ
99709		立会	12.2	3トレンチ	地表下110cmで、厚さ25cmのⅢ層部分を部分的に確認。	調査室報告Ⅷ
				4トレンチ	地表下130cmで、Ⅲ層部分を確認。Ⅳ層上面で竪穴式住居跡が部分的に出土。	
				5トレンチ	地表下130cmまで攪乱を受けている。	
				6トレンチ	地表下130cmまで攪乱を受けている。1次調査範囲内。	
				7トレンチ	地表下100cmで、Ⅲ層があらわれ、古墳後期の2基の竪穴式住居跡の重複を確認。	
				8トレンチ	地表下45cmで、Ⅲ層があらわれ、弥生後期終末の土壙ほかを確認。	
				9トレンチ	地表下80cmでⅢ層を確認。	
				10トレンチ	地表下82～98cmまで、層厚55cm前後のⅡ層が堆積。その直下からはⅣ層があらわれた。	
99715	17次	確認	154	1トレンチ	竪穴式住居跡2+@、土壙4、溝2、自然流路1などを確認。	調査室報告Ⅷ
				2トレンチ	竪穴式住居跡10、土壙3、溝1などを確認。	
				3トレンチ	竪穴式住居跡6、土壙1、自然流路1などを確認。	
99717		緊急対応		埋蔵文化財調査室に連絡がないまま工事に着手。Ⅲ層の一部を破壊。地表下55cmでⅢ層を確認。		調査室報告Ⅷ
99801		立会	1	1トレンチ	地表下120cmで、Ⅲ層上面を確認。	調査室報告Ⅷ
				2トレンチ	地表下75cmまでⅡ層がつづく。	
99802	18次	本格	1192	本書で報告。		本報告書
99805		立会	3	既設の配管路上で、地表下100cmまで攪乱されたⅠ層がつづく。		調査室報告Ⅷ
99901	19次Ⅰ区	本格	31	1トレンチ	地表下70cmで、厚さ17cmのⅢ層を確認。遺物は出土していない。	調査室報告Ⅹ
				2トレンチ	地表下45cmで、自然流路を確認。	
				3トレンチ	地表下75cmでⅢ層を確認。層厚30cmで、粘性が強い。	
				4トレンチ	地表下69cmでⅢ層を確認。層厚10cmで、粘質がある。	
				6トレンチ	地表下140cmまでⅡ層が続き、直接Ⅳ層があらわれる。	
				7トレンチ	道路舗装面から45cmでⅢ層を確認。層厚は40cmで、砂礫や小石が多く混じる。	
				9トレンチ	地表下45cmでⅢ層を確認。砂礫や小石が多く混じる。弥生中期後葉～後期の遺物が出土。	
				10トレンチ	地表下40cmでⅢ層を確認。砂礫や小石が多く混じる。弥生中期後葉～後期の遺物が出土。	
99902	19次Ⅱ区	本格	43	1トレンチ	地表下55cmでⅢ層を確認。弥生中期後葉～後期初頭の竪穴式住居跡1が出土。	調査室報告Ⅹ
				2トレンチ	地表下70cmで、Ⅰ層直下でⅣ層があらわれる。Ⅲ層は削平されているものと考えられる。	
				3トレンチ	地表下80cmで、Ⅰ層直下でⅣ層があらわれる。Ⅲ層は削平されているものと考えられる。	
				1-3間トレンチ	地表下40cmでⅢ層を確認。弥生中期後葉～後期初頭の竪穴式住居跡7、土壙9、溝3などが出土。	
				4トレンチ	地表下58cmでⅢ層を確認。層厚22cm。最下面のⅣ層との層界には灰白色の砂礫層が薄く堆積。	
				5トレンチ	地表下約50cmまでⅡ層が続き。Ⅱ層の直下でⅣ層があらわれる。	
				6トレンチ	地表下65cmでⅣ層があらわれ、その上面で断面逆台形の溝を確認。灰黄色や明黄褐色の砂礫土が混じる埋土で、古代～中世の溝と考えられる。	
				7トレンチ	地表下100cmまで掘り下げたが、攪乱層が続く。	
				8トレンチ	地表下100cmで、Ⅱ層の直下にⅣ層があらわれる。	
				9トレンチ	地表下40cmでⅢ層を確認。層厚30cmで、下面で弥生中期後葉の土壙と小穴が出土。	
				10トレンチ	地表下40cmでⅢ層を確認。層厚30～40cmで、下面で弥生中期後葉の土壙もしくは竪穴式住居跡と考えられる落ち込みが出土。	
				11トレンチ	地表下80cmでⅢ層を確認。Ⅲ層には本来混じらないⅣ層の小塊がみられるので、遺構の埋土と判断。弥生土器もしくは土師器と考えられる土器片が出土。	
				12トレンチ	地表下120cmまで掘り下げたが、攪乱層が続く。	
				13トレンチ	地表下80cmで、Ⅰ層の直下でⅣ層があらわれる。Ⅳ層からは縄文中期前半と考えられる土器が出土。	
				14トレンチ	地表下90～170cmまでⅡ層が続く。Ⅱ層の下半部は18次調査A区で出土した古代～中世の水田層に対応するものと考えられる。	
				15トレンチ	地表下140cmでⅢ層を確認できたが、二次堆積の可能性が考えられる。下位のⅣ層からは縄文土器と考えられる土器片が出土。	
				16トレンチ	地表下150cmでⅢ層を確認できたが、二次堆積の可能性が考えられる。	
				17トレンチ	地表下145cmのⅡ層直下でⅣ層があらわれる。Ⅳ層上面で自然流路もしくは溝と考えられる落ち込みを確認。	
99908		立会	8.4	地表下40～50cmでⅢ層を確認。Ⅲ層は10～15cmの厚さを測る。Ⅳ層上面で竪穴式住居跡1、土壙2、小穴などを平面検出。		調査室報告Ⅹ
99909		立会	8	1トレンチ	調査前に地表下80cmまで掘削。	調査室報告Ⅹ
				2トレンチ	調査前に地表下80cmまで掘削。	
				3トレンチ	調査前に地表下80cmまで掘削されていたが、Ⅰ層内におさまる。	
				4トレンチ	調査前に地表下80cmまで掘削。	
99910	20次	本格	588	弥生中期後葉～後期中頃の竪穴式住居跡1、古墳後期の竪穴式住居跡5、中世の溝群が出土。		調査室報告ⅩⅣ
99911		確認	9	4トレンチ	地表下70cmでⅢ層を確認。層厚12～15cmで、粘性が高く、砂礫・小石が混じる。	調査室報告Ⅹ
99912		立会	0.5	地表下62cmで厚さ23cmのⅢ層を確認。Ⅲ層からは遺物は出土していない。		調査室報告Ⅹ

調査番号	調査次数	調査種別	面積(㎡)	調査概要		文献
99915		立会	1	建物余堀りの攪乱部分。		調査室報告Ⅹ
00001		立会	9	1トレンチ	地表下92㎝まで攪乱されたⅠ層がつづく。大学会館建物余掘り範囲内。	調査室報告Ⅹ
				2トレンチ	地表下70㎝でⅢ層を確認。層厚15㎝。	
				3トレンチ	地表下72㎝前後でⅢ層を確認。上部は暗褐色砂質シルトであるが、下部は暗褐色の砂礫層となる。Ⅲ層の二次堆積か？	
00002		事前	2.2	1トレンチ	地表下30㎝まで調査したが、Ⅰ層がつづく。	調査室報告Ⅹ
				2トレンチ	地表下50㎝でⅡ層を確認。95㎝までⅡ層がつづく。	
				3トレンチ	地表下68㎝でⅡ層を確認。104㎝までⅡ層がつづく。	
				4トレンチ	地表下10㎝でⅡ層を確認。80～88㎝までⅡ層がつづき、直下にⅣ層があらわれる。	
				5トレンチ	地表下15㎝でⅡ層を確認。92㎝までⅡ層がつづく。	
00005	22次	確認	33	本書で報告する谷状の窪地の北半部分にあたる。		調査室報告Ⅹ
00006		立会	1	1トレンチ	地表下25㎝でⅡ層を確認。90㎝までⅡ層がつづく。	調査室報告Ⅹ
				4トレンチ	地表下50㎝でⅡ層を確認。95㎝までⅡ層がつづく。	
00007		立会	5	1トレンチ	建物余掘り部分にあたり、攪乱が続く。	調査室報告Ⅹ
				2トレンチ	建物余掘り部分にあたり、攪乱が続く。	
				3トレンチ	建物余掘り部分にあたり、攪乱が続く。	
00101		緊急対応	3	埋蔵文化財調査室に連絡がないまま、地表下70㎝で掘削されていた。Ⅱ層内におさまるものと判断。		調査室報告ⅩⅠ
00103	23次	本格	17.3	1トレンチ	地表下70㎝で、厚さ20㎝のⅢ層を確認。Ⅲ層から弥生土器片が出土。	調査室報告ⅩⅣ
				2トレンチ	地表下70㎝で、厚さ60㎝のⅢ層を確認。Ⅲ層から弥生土器片が出土。	
				3トレンチ	地表下22㎝で、自然流路上面を確認。	
				4トレンチ	地表下62㎝で、土壙を確認。	
				5トレンチ	地表下100㎝で、厚さ6㎝のⅢ層を確認。Ⅲ層下面で小穴が出土。	
				6トレンチ	地表下95～100㎝で、古墳後期の土壙を確認。	
				7トレンチ	地表下75～80㎝でⅢ層があらわれる。Ⅲ層上面で溝を確認。中位からも弥生と古墳の小穴が掘り込まれている。	
				8トレンチ	地表下100～105㎝で、自然流路を確認。	
				9トレンチ	地表下82㎝でⅢ層を確認。Ⅲ層下面で弥生中期後葉の土器溜りや柱穴を確認。	
				10トレンチ	地表下65㎝で、厚さ22㎝のⅢ層を確認。Ⅲ層から遺物は出土していない。	
				11トレンチ	地表下70㎝で、厚さ20㎝のⅢ層を確認。Ⅲ層下部で小穴が出土。	
				12トレンチ	地表下95㎝まで攪乱がつづく。	
00104		立会	1	1トレンチ	地表下65㎝まで攪乱がつづく。	調査室報告ⅩⅠ
				2トレンチ	地表下60㎝で、厚さ15㎝のⅢ層を確認。	
				3トレンチ	地表下65㎝までⅡ層がつづく。	
00202	25次	本格	1022	本報告の文京遺跡18次調査Ａ区の北隣部分。Ⅱ層下部では古代～中世の水田跡、その下層には自然流路が出土。		調査室報告ⅩⅠ
00203		立会		既設の配管路上で、攪乱されたⅠ層がつづく。		調査室報告ⅩⅠ
00204	26次	本格	144.7	1トレンチ	弥生時代中期後葉～後期初等の竪穴式住居跡1，掘立柱建物1、土壙3などが出土。SK-27の床面からは炭化した板材が2枚並んで出土。また、Ⅲ層中から分銅形土製品が出土。	調査室報告ⅩⅠ
				2トレンチ	弥生時代の竪穴式住居跡1、土壙3、溝3などが出土。竪穴式住居跡からは龍を描いたと考えられる絵画土器が出土。	
				3トレンチ	弥生時代の土壙1などが出土。	
				4トレンチ	地表下80㎝でⅢ層上面、120～125㎝でⅣ層上面を確認。遺構・遺物は出土していない。	
				5トレンチ	弥生時代の竪穴式住居跡1、土壙7、溝1などが出土。	
				6トレンチ	弥生時代の土壙1などが出土。	
00205		立会	3	地表下105㎝でⅢ層を確認。Ⅲ層上部は砂礫が多く混じり、下部の砂質シルトへ漸移的に変化。		調査室報告ⅩⅠ
00206		事前	0.5	地表下90㎝で、褐灰色砂礫層を確認。115㎝までつづく。		調査室報告ⅩⅠ
00211		立会	1.9	1トレンチ	共同溝設置に伴う余掘りで破壊。	調査室報告ⅩⅠ
				2トレンチ	地表下40㎝でⅢ層を確認。層厚25㎝で、砂礫が多く混じる。	
00301	27次	本格	703	近世の溝1、性格不明遺構3、中世の掘立柱建物1、溝4、土壙2、弥生時代中期後葉～後期の竪穴式住居跡6、掘立柱建物1、溝1、土壙2、縄文時代の土壙1、性格不明遺構2などが出土。とくにSC-9からは分銅形土製品5、茸形土製品1が出土。		調査室報告ⅩⅢ
00302		立会	39	1トレンチ	地表下32㎝でⅣ層がⅠ層の直下にあらわれる。Ⅳ層直上で中世の遺物が出土。	調査室報告ⅩⅢ
				2トレンチ	地表下40㎝まで調査したが、Ⅰ層がつづく。	
				3トレンチ	地表下40㎝まで調査したが、Ⅰ層がつづく。	
00303		立会	3.1	1トレンチ	地表下70㎝まで調査したが、攪乱部分が続く。	調査室報告ⅩⅢ
				2トレンチ	地表下60～65㎝でⅢ層を確認。	
00305		立会	12	1トレンチ	地表下70㎝でⅢ層を確認。	調査室報告ⅩⅢ
				2トレンチ	地表下80㎝でⅢ層を確認。	
				3トレンチ	地表下54㎝でⅣ層を確認。Ⅳ層上面で竪穴式住居跡と考えられる落ち込みが出土。	
				4トレンチ	地表下95㎝でⅢ層を確認。Ⅲ層は砂礫が多く混じる。	
				5トレンチ	地表下115㎝でしまりのない砂礫混じりのにぶい黄褐色シルト層があらわれる。	
				6トレンチ	地表下105㎝で灰黄褐色粘質土層があらわれる。その下層には、しまりのない砂礫混じりのにぶい黄褐色シルト層がみられる。	
				7トレンチ	地表下55㎝でⅢ層を確認。	
				8トレンチ	西半部～中央部は攪乱で破壊。東半部では地表下45～50㎝でⅢ層を確認。下層のⅣ層最上面から縄文土器の細片が出土。	
00306		立会	1.4	1トレンチ	地表下90㎝でⅢ層を確認。層厚18㎝。下面から弥生中期後葉の土器が出土。	調査室報告ⅩⅢ
				2トレンチ	地表下110㎝でⅢ層を確認。層厚22～40㎝。弥生中期後葉～後期の絵画土器を含む遺物が出土。	
00307		立会	2.6	既設の共同溝余掘り部分にあたる。		調査室報告ⅩⅢ

1：谷状の窪地（埋没旧河道）の復元



3：8トレンチ



2：7トレンチ

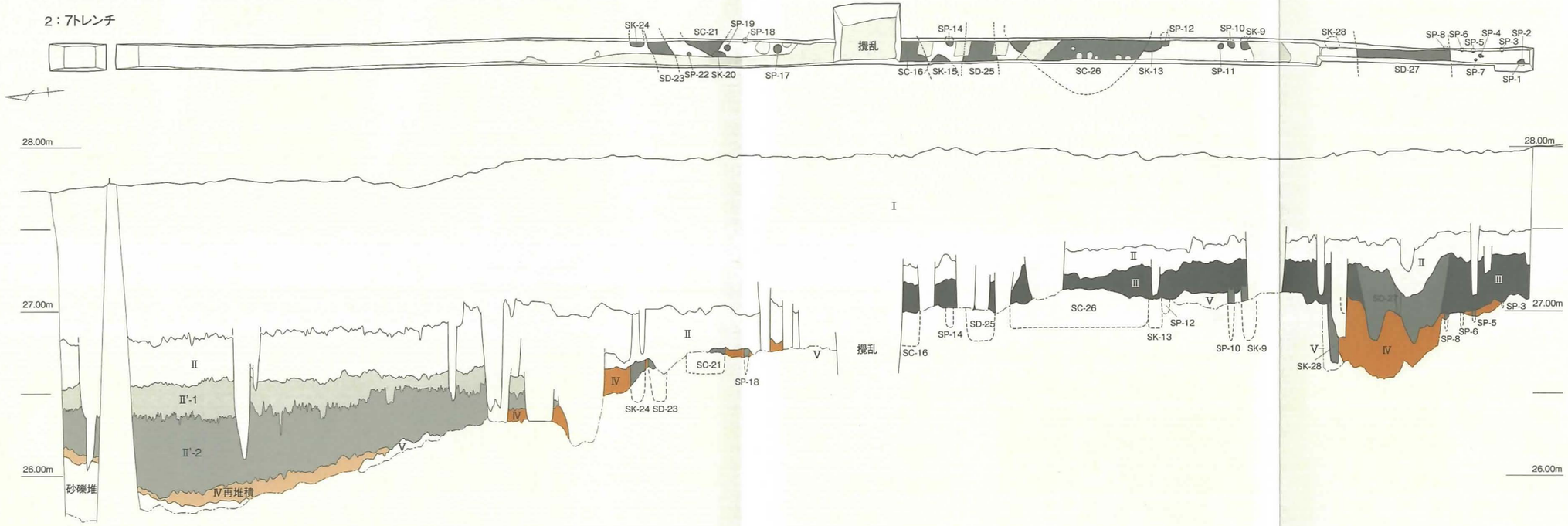


図８　旧地形の復元図（縮尺1/4,000）、文京遺跡15次調査7・8トレンチ実測図（縮尺1/300、1/30）

て集落が展開する。

これに対して、旧グラウンド中央部～北半部、そして北側のテニスコートや体育館が建てられているキャンパス北西部は、調査事例が少なく、遺跡の実態は把握できていなかった。そこで、1996年に15次調査、1997年に17次調査として、遺跡範囲確認調査を実施した。15次調査の７トレンチは、旧グラウンドの中央を南北にのびる散水管路を利用して設定され、南北90mを測る（図８）。７トレンチの南半部は、工学部本館（1994年度、12次調査）、１号館（1996年度、14次調査）、５号館（1997年度、16次調査）から続いて、竪穴式住居跡５棟、溝3条、土壙４基が確認された。また、翌年度の遺跡範囲確認調査である17次調査でも、弥生時代～古墳時代の遺構が重複し密集する状態で確認できた。旧グラウンドの中央部は、微高地がのび、弥生時代と古墳時代の遺構が密集する範囲が広がっていることを確認できた。調査にいたる経緯で述べたように、グリーンゾーンとして遺跡保存が図られている。

一方、７トレンチでも北半部では、基本層序のⅤ層が急激に落ち込んで、谷状の地形をつくる。同じ谷状の地形は、西側の８トレンチや、東側の共通教育管理棟の北側中庭に設定された15次調査４トレンチでも確認されている。この谷状の地形を埋める堆積は、基本層序Ⅱ層に対応するオリーブ褐色砂質シルト層で、そのほぼ中位で、薄い砂礫層を確認できた。砂礫層の下面とⅡ層下部の層界は、小さな凹凸がある不整合面をなし、水路や畦畔と考えられる部分があり、洪水で堆積した砂礫層で水田層が覆われているものと判断した。そこで、調査時にはⅡ層中位の砂礫層をⅡ'-１層、以下の水田層をⅡ'-２層とした。また、砂礫層から土師器や須恵器の坏もしくは高坏の細片が出土したので、Ⅱ'-２層は古墳時代後期～中世の水田層と考えた。Ⅱ'-１層は今回の調査ではⅡ-２-①層、Ⅱ'-２層はⅡ-２-②～⑥層として分層して調査を行った土層である。また、15次調査８トレンチでも、Ⅳ層の谷状の地形への落ち込み際が確認され、同様のⅡ'層の堆積を観察できた。

以上の調査成果から、旧グラウンド北半部には、谷状の窪地が東西にのび、古墳時代～中世の水田が営まれていることが予想された。また、９次調査地点が位置する城北キャンパス北西端付近では、基本層序Ⅳ層が再び高くなっていることから、この谷状の窪地は、南北幅120～140mと考えられる。さらに、キャンパス北東部の理学部構内で実施された８次調査Ⅱ区で確認された自然流路、あるいは大学会館北側でもⅣ層の落ち込みが確認されている。こうした幅の狭い流路や谷状の窪地が、旧グラウンド北半部～テニスコート付近で合流しているものと考えた。

こうした既往の調査成果から、今回の18次調査で発掘調査の対象となった総合情報処理センター（現 総合情報メディアセンター南棟）建物本体部分（Ａ区）は、旧グラウンド北半部の微高地から谷状の窪地への変換点付近に位置し、古墳時代～中世の水田が営まれていることが予想された。また、共同溝部分のＢ区は、旧グラウンド中央部の東端にあたり、14次調査地点（工学部１号館）に隣接するので、弥生時代～古墳時代の遺構が営まれている可能性が高いと考え発掘調査にあたった。

Ⅱ　調査の概要

1　層序の概要

現在、文京遺跡が所在する城北団地では、既往の調査成果から遺跡全体にわたる基本層序を、上位からⅠ～Ⅴ層に区分している。発掘調査にあたっては、個々の調査地点ごとで、基本層序を構成する土層群の細かな特徴や構成を記録している。

基本層序は、以下の通りである。

Ⅰ層：表土層にあたる瓦礫を含む造成土部分。

Ⅱ層：灰色系の砂礫混じりのシルト層からなる水田層

Ⅲ層：弥生時代～古墳時代の遺構・遺物を包含する黒色～黒褐色系の土層。

Ⅳ層：縄文時代前期～後期中頃の遺構と遺物を包含する黄褐色系のシルトおよび砂質シルト層。

Ⅴ層：Ⅳ層下の花崗岩の円礫・亜円礫を主体とする砂礫層ないしは礫層、砂層から構成される。

18次調査Ａ区とＢ区の土層断面の概念図を作成してみた（図９）。Ｂ区中央部でⅤ層が盛り上がり、その南側にあたるＢ区南端ではⅤ層の直上にⅢ層がみられ、Ⅳ層は分布していない。Ⅴ層の盛り上がりの北側であるＢ区北端付近でⅣ層があらわれ、これがＡ区南半で急激に落ち込む。この落ち込みは、前述した城北キャンパス北半部の東西にのびる谷状の窪地にあたる（図版１-２・３）。

この谷状の窪地には、自然流路SR-400が流れる。SR-400の埋積した窪地状の地形を中心としてⅡ層が分布する。このⅡ層は水田層で、17次調査８トレンチのⅡ層中位の砂礫層を鍵層として、Ⅱ-１・２層に分層できる。前述したように、17次調査８トレンチのⅡ層は今次調査のⅡ-１層、中位の砂礫層であるⅡ'-１層はⅡ-２-①層、Ⅱ'-２層はⅡ-２-②～⑥層と対応する。

（1）Ａ区の層序

Ａ区は、城北団地南部の弥生時代～古墳時代の集落遺跡が営まれる微高地が団地北部の東西にのびる谷状の窪地へ落ち込む自然地形の変換点付近に位置する。窪地は、基本層序のⅣ層を切り込む自然流路（SR-400）で形成され、その上位をⅡ層が覆う。

Ⅱ層上部のⅡ-１層では、凹凸のある耕作下底面が上下に連続して認められる。数枚の水田層が連続して営まれている。出土遺物から、近世から城北団地が造成される直前にわたる水田層と判断した。

Ⅱ-２層は、Ⅱ-１層と比べて硬めの土質で、土色もやや暗い。Ⅱ-２-①～Ⅱ-２-⑥層に分層でき、Ⅱ-２-②・④・⑥層は水田層、Ⅱ-２-①・③・⑤層は緩やかな氾濫で形成された砂礫が非常に多く混じる堆積土層である。調査時には、Ⅱ-２-②層を上層水田、Ⅱ-２-④層を中層水田、Ⅱ-２-⑥層を下層水田と呼称した。

Ⅱ-２-①層は、オリーブ褐色砂質シルトで、非常に多くの砂礫が混じり、部分的に細砂が薄いレンズ状ブロックとなって堆積している。

Ⅱ-２-②（上層水田）層は、径１㎜前後の砂礫が混じるオリーブ褐色砂質シルトで、調査区のほぼ全域に広がる。上部に堆積したⅡ-２-①層と比べて、砂礫が少なく、粘性が強く、土壌化が進んでいる。

Ⅱ-２-③層は、黄褐色砂質シルト、オリーブ褐色砂質シルト、灰黄褐色砂質シルトから構成される砂礫が非常に多く混じる堆積土層である。

Ⅱ-２-④（中層水田）層は、褐色シルトないし暗灰黄色砂質土が混じる土層で、径１～２㎜前後の砂礫が多く混じる。

Ⅱ-２-⑤層は、砂礫が多く混じる黄褐色砂質シルトや灰黄色砂質シルト、砂礫混じりの灰黄褐色砂質土で構成される堆積土層である。

Ⅱ-２-⑥（下層水田）層は、暗黄褐色砂質シルトないし黄灰色砂質土の土層で、径１㎜前後の礫が混じる。上半は粘性が強く土壌化が進んでいる。

調査区北半部では、Ⅱ-２層の下層には自然流路（SR-400）を埋積する土層がみられる。最上層の砂礫混じりの灰茶色系の土層である①層、灰白色の細砂・粗砂層を主体とする②層、拳～人頭大の円礫を主体とする砂礫層である③層に大別できる。

調査区の南半部では、Ⅱ-２層直下でⅣ層があらわれる。基本層序のⅢ層にあたる土層は、Ⅱ-２-②・

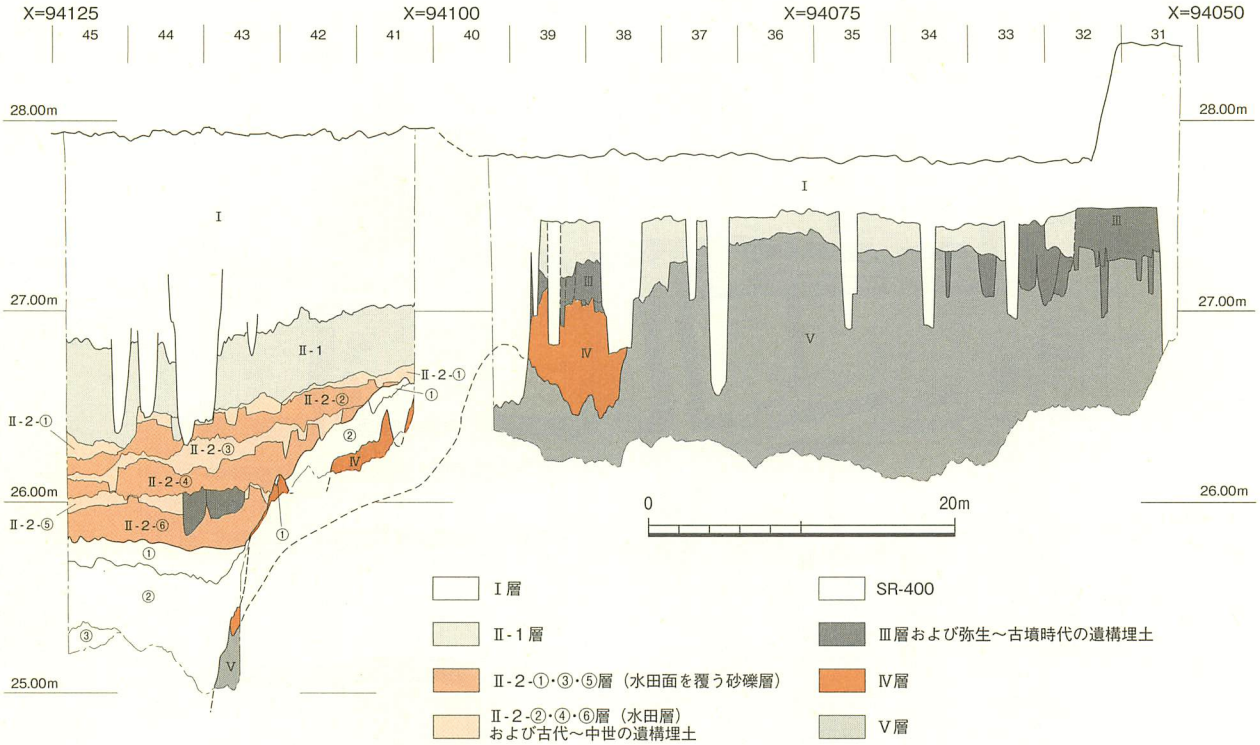


図９　文京遺跡18次調査の基本土層概念図（縮尺1/500、1/40）

④層の水田耕作で削平されているものと考えられる。

基本層序Ⅳ層にあたる土層は、黄灰色の細砂混じりのシルト層で、南半部の微高地部分にしか分布していない。城北団地南半部に位置する12・14・16次調査地点のⅣ層でも下位にみられる堆積土層に対応する。Ａ区北半部のⅣ層は、上半部を自然流路（SR-400）で削られているものと考えられる。

Ⅳ層の下層には灰色の粗砂層が堆積している。基本層序Ⅴ層である。

（２）Ｂ区の層序

Ｂ区は、団地南部にひろがる微高地の北半にあたる地点に設定された調査区である。基本層序のⅠ～Ⅴ層を確認できた。

造成土にあたるⅠ層の下層には、灰色系の砂礫混じりのシルト層が堆積する。基本層序のⅡ層で、Ａ区のⅡ－１層に対応する。

Ｂ区南端付近では、Ⅱ層の下層に基本層序のⅢ層にあたる黒色～暗褐色系の土層が堆積する。弥生時代～古墳時代の遺構・遺物を包含し、上面で掘り形ラインを検出できなかったが、炭化物や土器片を多く含んでいるので、遺構埋土である可能性が高い。

Ⅳ層は、黄褐色系のシルトおよび砂質シルト層で構成され、下部には礫が混じる。Ｂ区北端付近でⅤ層上面に形成された窪地に部分的に堆積している。

Ⅴ層にあたる土層は、花崗岩を主体とする砂礫あるいは礫層から構成され、Ｂ区全域に広がる。

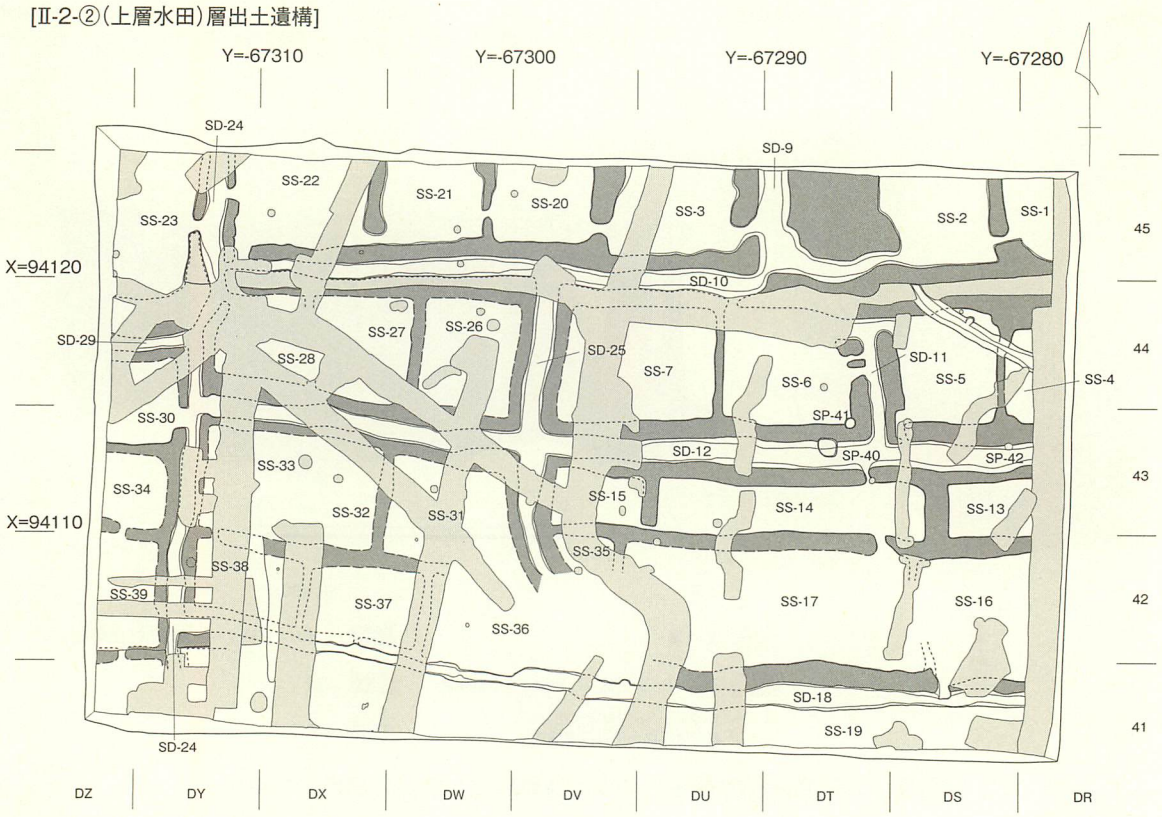
２　遺構の概要

Ａ区では、後述するように、第２次世界大戦中の塹壕が縦横に掘り込まれていた。また、Ｂ区では、北端から南端まで幅約2.5ｍの撹乱溝が南北にのび、全域にわたって南北あるいは東西方向に網目状に幅約0.5ｍの撹乱溝が掘り込まれていた。運動場の排水溝および水抜きのための暗渠の掘り形である。

（１）Ａ区

Ａ区で出土した遺構は、Ⅱ－２層の水田層およびそ

[Ⅱ-2-②(上層水田)層出土遺構]



0 20m

[Ⅱ-2-④(中層水田)層出土遺構]

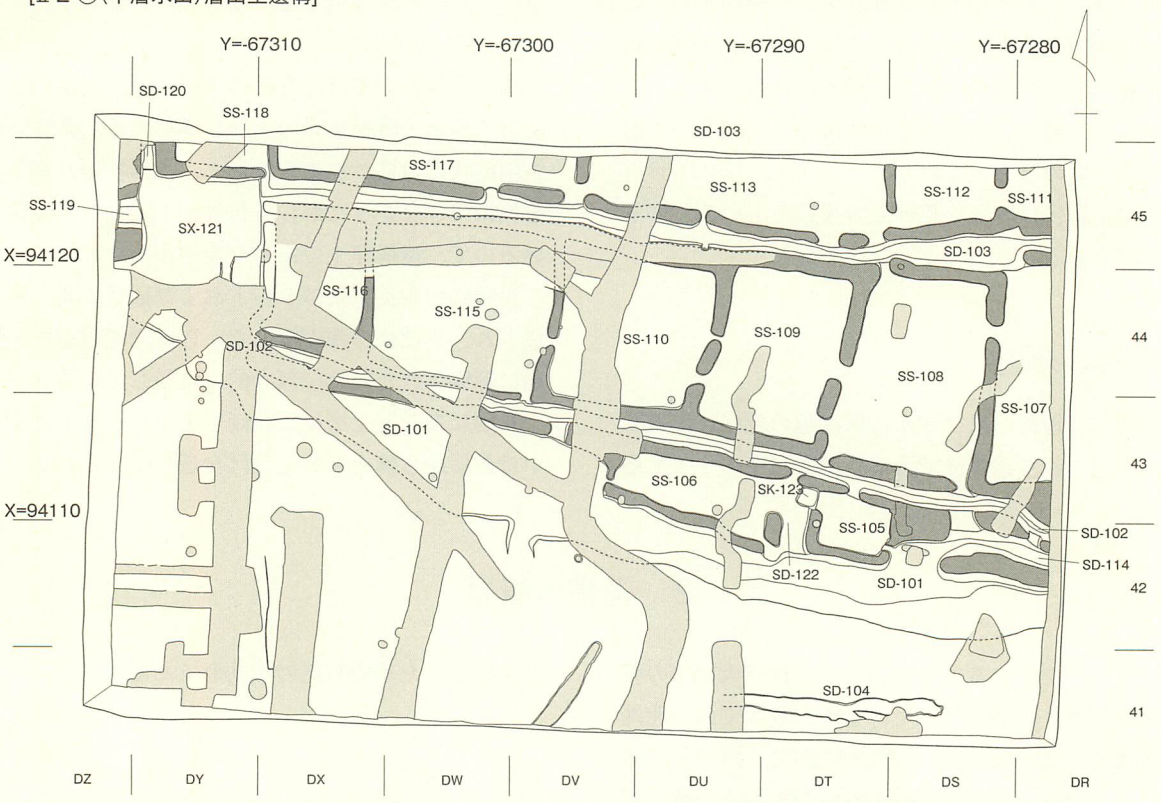
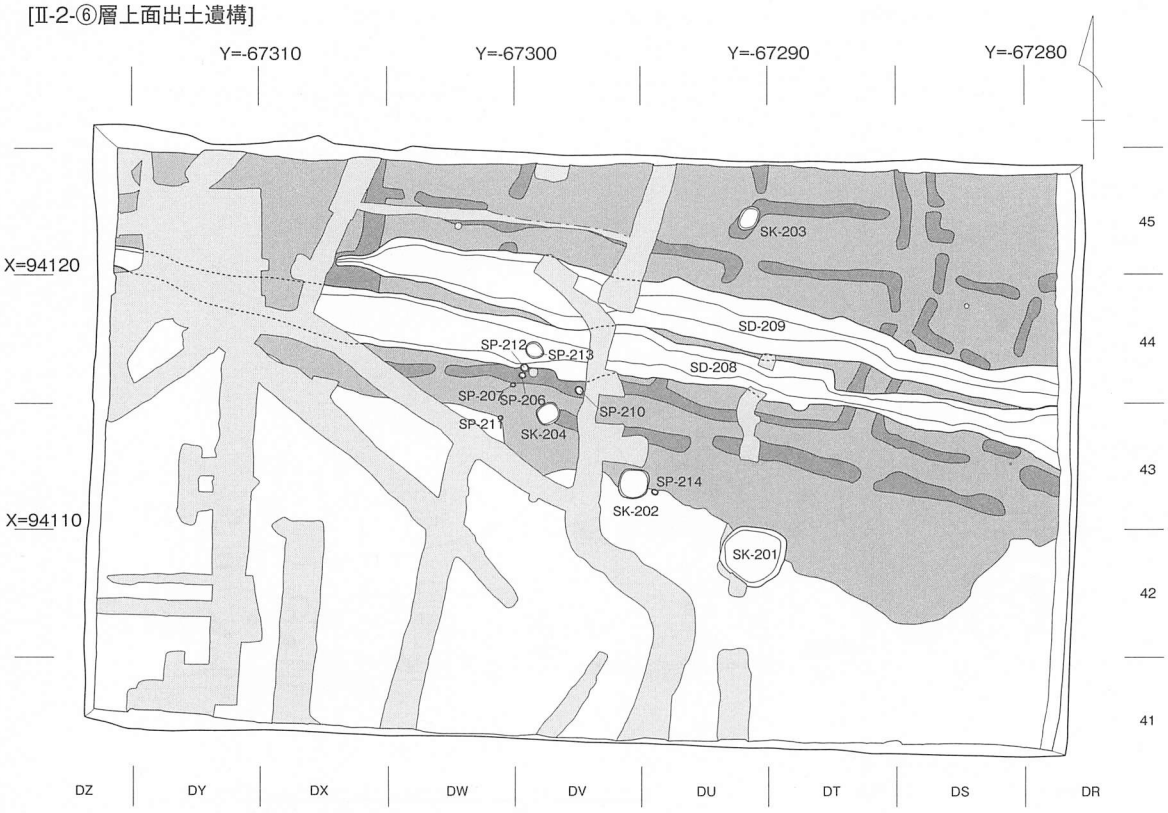


図10　文京遺跡18次調査Ａ区の出土遺構配置図1（縮尺1/300）

[Ⅱ-2-⑥層上面出土遺構]



0　　20m

[Ⅱ-2-⑥(下層水田)層出土遺構]

図11　文京遺跡18次調査Ａ区の出土遺構配置図2（縮尺1/300）

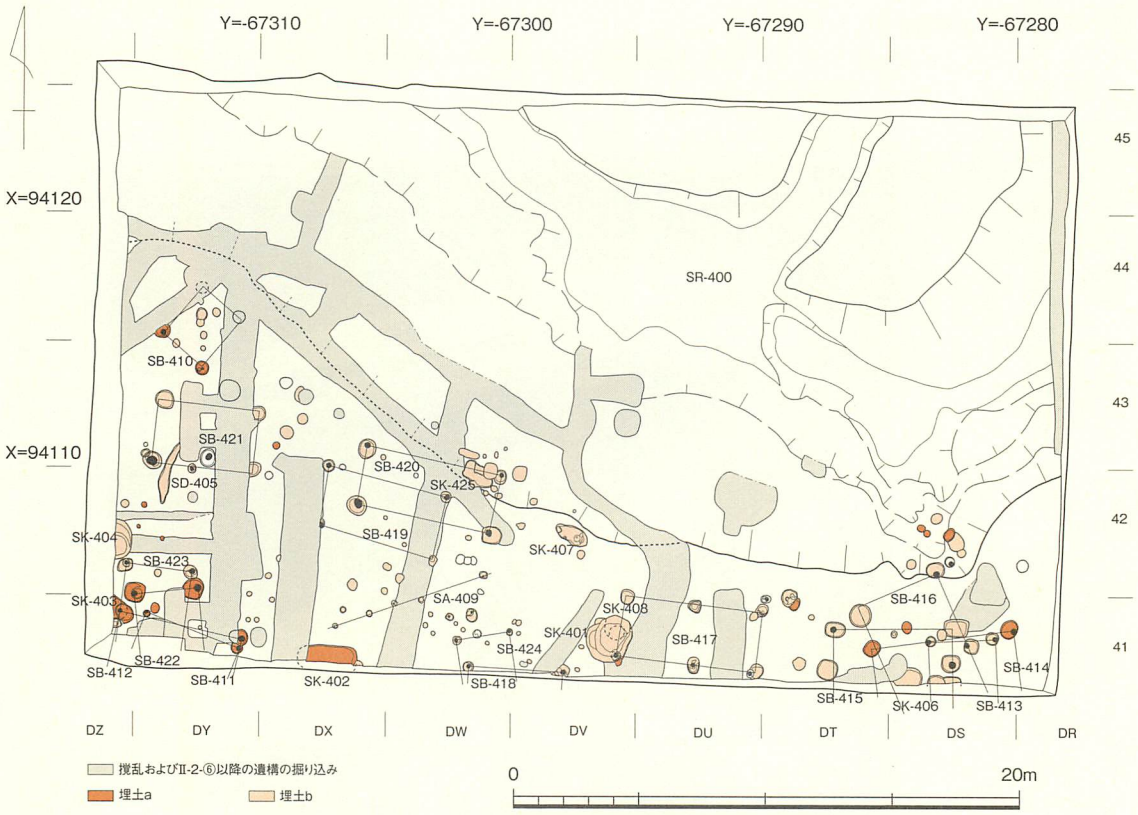


図12　文京遺跡18次調査Ａ区の出土遺構配置図3（縮尺1/300）

の下層の谷状の窪地を流れる自然流路と、南半部の微高地上の遺構に大別できる。

1）Ⅱ-２層の水田層と自然流路

Ⅱ-２層の水田層で、Ⅱ-２-②（上層水田）層は調査区全域に広がるが、Ⅱ-２-④･⑥（中層･下層水田）層は調査区北半部の谷状の窪地内に営まれている。

Ⅱ-２-②（上層水田）層上面では、畦畔で区画された水田面が出土した（図10上段、図版３・４）。

水田：32面（SS-１～７・13～17・19～23・26～28・30～40）

溝：９条（SD-８～12・18・24・25・29）

この他、SP-40～42の３基の小穴が出土したが、Ⅱ-２-②層に伴うものではない。

Ⅱ-２-④（中層水田）層上面で検出した遺構は、

水田：13面（SS-105～113・115～118）

溝：８条（SD-101～104・114・119・120・122）

土壙：１基（SK-123）

その他の遺構：１基（SX-121）

である（図10下段、図版８・９）。また、調査区南西部のDV・DW-41・42区、DX～DZ-41～44区の微高地上には、Ⅱ-２-④層が部分的に残存し、犂によると考えられる耕作痕跡を検出できた。Ⅱ-２-④層に対応する層序の遺構と判断した。

Ⅱ-２-⑤層を掘り下げてⅡ-２-⑥（下層水田）層の上面で、Ⅱ-２-⑥層を切り込む以下の遺構を検出した（図11上段、図版12・14）。

溝：２条（SD-208・209）

土壙：４基（SK-201～204）

小穴：６基（SP-205・207・210～214）

調査区東壁を再確認し、SD-208・209はⅡ-２-⑤層上面から掘り込まれていることを確認できた。他の土壙・小穴も共通した特徴の埋土をもつので、同様と考えられる。

Ⅱ-２-⑥（下層水田）層上面で出土した遺構は以下の通りである（図11下段、図版14・15）。

水田：12面（SS-303～306・308～312・314・316・317）

溝：３条（SD-301・302・307）

以上のⅡ-２層出土の水田は、遺物の出土状況と種別から古代～中世のものである。

Ⅱ-２層の下層にはSR-400の自然流路が埋没してい

た（図版17・18）。

最上層の砂礫混じりの灰茶色系の土層である①層、灰白色の細砂・粗砂層を主体とする②層、拳～人頭大の円礫を主体とする砂礫層である③層に大別できる。出土遺物には弥生時代～古墳時代後期のものが含まれるが、古代の須恵器や土師器が少量混じる。古代前期に埋没したものと考える。

2）微高地上の遺構

A区調査区内でも南半部の微高地上では、部分的に残るⅡ-2-④（中層水田）層で埋まる犂によると考えられる耕作痕跡が出土した。Ⅱ-2-④層の中層水田に伴う畠跡と考えた。

これを除去した後にⅣ層上面で以下の遺構を検出できた（図12、図版17・19）。

掘立柱建物：15棟（SB-410～424）
土壙：８基（SK-401～404・406～408・425）
溝：１条（SD-405）
柵列：１条（SA-409）
その他：柱痕跡や杭痕跡が確認できた柱穴・杭穴を含む小穴

これらの遺構の埋土を観察すると、埋土ａ・ｂ・ｃに大別できる。埋土ａは黒褐色系の砂質シルト。埋土ｂは、黒褐色系の砂質シルトを主体とし、黄灰色・暗黄灰色砂質土・灰黄色等の砂質土や砂質シルトが若干混じる。埋土ｃは、黄灰色砂質土・黄灰色砂質シルト・暗黄灰色砂質土・暗黄灰色シルト・灰黄色砂質土などの灰色みをおびた堆積土を埋土の主体としたり、塊が混じったりする。埋土ａの遺構は弥生時代～古墳時代、埋土ｂの遺構は古代、埋土ｃの遺構は古代後半～中世の遺構である。以上の出土遺構の時代区分については表２を参照されたい。

（2）B区

B区では、Ⅳ層あるいはⅤ層上面で、弥生時代から近世の集落関連の遺構を検出した。遺構は、調査区の北端と南端に集中する。

出土した遺構は以下の通りである（図13、図版25-1）。

竪穴式住居跡：13棟
（SC-605・606・670・689・729・730・738・741・747・748・750・751・752）
掘立柱建物：５棟
（SB-740・743・744・746・749）
溝：６条（SD-601～604・610・627）
土壙：18基
（SK-647・663・666・675・684・690・693・695・697・705・710・711・713・725・732・733・735・739）
土器溜り：１基（SX-669）
その他：柱痕跡や杭痕跡が確認できた柱穴・杭穴を含む小穴

B区の遺構は、A区と対応させると、埋土ａ・ｃがある。埋土ａの遺構は、弥生時代～古墳時代の遺構で、弥生時代の遺構は砂礫がほとんど混じらないが、古墳時代の遺構は砂礫が比較的多く混じるものが多い。埋土ｃは古代～近世の遺構である。時代ごとの出土遺構は表２を参照されたい。

表２　文京遺跡18次調査出土主要遺構一覧

				水田		溝		掘立柱建物		竪穴式住居跡		土壙		柵列		その他の遺構		自然流路	
A区	谷状の窪地	古代	Ⅱ-2-②層（上層水田）	32	SS-1～7・13～17・19～23・26～28・30～40	9	SD-8～12・18・24・25・29												
			Ⅱ-2-④層（中層水田）	13	SS-105～113・115～118	8	SD-101～104・114・119・120・122					1	SK-123			1	SX-121（水溜遺構）		
			Ⅱ-2-⑤層から掘り込まれた遺構			2	SD-208・209					4	SK-201～204						
			Ⅱ-2-⑥層（下層水田）	12	SS-303～306・308～312・314・316・317	3	SD-301・302・307												
			谷状の窪地															1	SR-400
	微高地上	古代						10	SB-413・415～421・423・424			6	SK-401・404・406・407・408・425	1	SA-409		犂耕作痕跡		
		弥生時代						5	SB-410～412・414・422			2	SK-402・403						
B区	古代以降					4	SD-601・602・604・627	1	SB-743										
	古墳時代					2	SD-603・610	3	SB-740・744・746	5	SC-605・606・741・747・748	4	SK-647・662・693・697						
	弥生時代							1	SB-749	8	SC-670・689・729・730・738・750・751・752	15	SK-663・666・675・684・690・695・705・710・711・713・725・732・733・735・739			1	SX-669（土器溜り）		

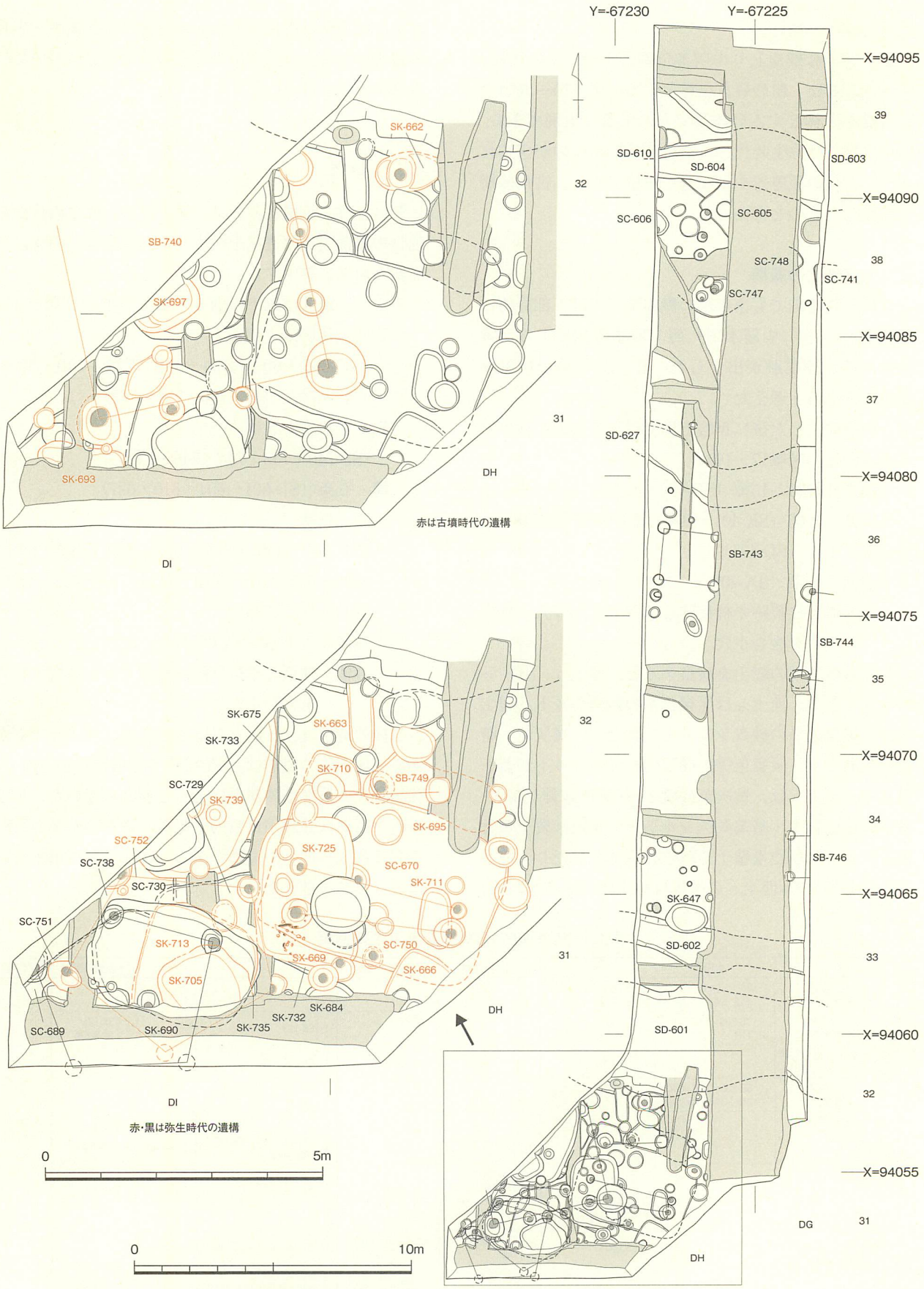


図13　文京遺跡18次調査Ｂ区の出土遺構配置図（縮尺1/100、1/200）

Ⅲ　A区の遺構・遺物の記録（その１）

－Ⅱ－２層（水田層）と自然流路（SR-400）の調査－

１　層序

表土の真砂土層を除去した後、A区南東隅で基本層序のⅡ層を掘り下げ、地表下135cmで、15次調査７トレンチのⅡ層を上下に分ける砂礫層に対応する堆積を確認した。基本層序で述べたように、この砂礫層より上位のⅡ層をⅡ－１層、砂礫層以下をⅡ－２層とし、Ⅱ－１層の最下面まで重機で掘り下げた。その時点で、縦横に掘り込まれている塹壕を確認できた。

塹壕からは、弥生時代～中世の遺物に混じり、青銅製の銃弾・薬莢、ベルト金具と考えられるものが出土している（図14－１～４）。１（図版40-⑧・⑫）は、青銅製の銃弾である。長さ31㎜。先端は丸みをおび、基部で径７㎜、先端部付近で径６㎜を測る。重量は9.2ｇ。基部には孔がみられるが、深さは不明。２・３（図版40-⑨～⑪）は青銅製の薬莢である。ともに、径10㎜の短い円盤に薄い銅板を巻いてつくる。基部には、幅１㎜の細い溝を刻み、基部底面には0.5㎜の孔をあける。先端部は欠損する。２は、残存長5.05㎜、先端部の径6.8㎜、基部の径12㎜、重量9.2ｇを測る。３は２片が接合し、残存長5.15㎜、先端部の径7.3㎜、基部の径12㎜、残存重量7.8ｇを測る。４は、薄い鉄板の上方に青銅板を重ね、青銅板の縁辺を折り曲げて接合する。ベルト金具の破片と考えた。残存重量1.2ｇ。この他、攪乱からサヌカイト製の打製石鏃（図14－５、図版38-②）が出土している。平基式で、残存重量2.7ｇを測る。

調査では、塹壕を掘り上げるとともに、A区東壁沿いに深掘りトレンチを設定して、Ⅱ－２層以下の土層の堆積状況を観察した。その結果、調査区南半部で基本層序のⅣ層が落ち込み、北半部に谷状の窪地が形成されていることを確認できた。その谷状の窪地の上部に堆積しているのがⅡ－２層である。また、Ⅱ－２層下層の谷状の窪地を埋める堆積土層は、自然流路SR-400の埋積過程で堆積した土層群である（図15）。

Ⅱ－２層は、Ⅱ－２-①～⑥層に分層できる。個々の土層の特徴は以下の通りである。

Ⅱ－２-①層は、オリーブ褐色砂質シルトで、非常に多くの砂礫が混じり、部分的に細砂が薄いレンズ状ブロックとなって堆積している。調査区中央部から北半部にかけての範囲に広がる。調査区北半部では、下部のⅡ－２-②（上層水田）層が段差をもって深くなり、Ⅱ－２-①層は急に厚くなる。

Ⅱ－２-②（上層水田）層は、径１㎜前後の砂礫が混じるオリーブ褐色砂質シルトで、A区のほぼ全域に広がる。上部に堆積したⅡ－２-①層と比べて、砂礫が少なく、粘性が強く、土壌化が進んでいる。薄い砂礫のレンズ状堆積もみられず、上半を中心として攪拌されているものと判断した。さらに、上面で水田区画の畦畔や溝を検出できたことから、水田層と判断した。

Ⅱ－２-③層は、黄褐色砂質シルト、オリーブ褐色砂質シルト、灰黄褐色砂質シルトから構成される砂礫

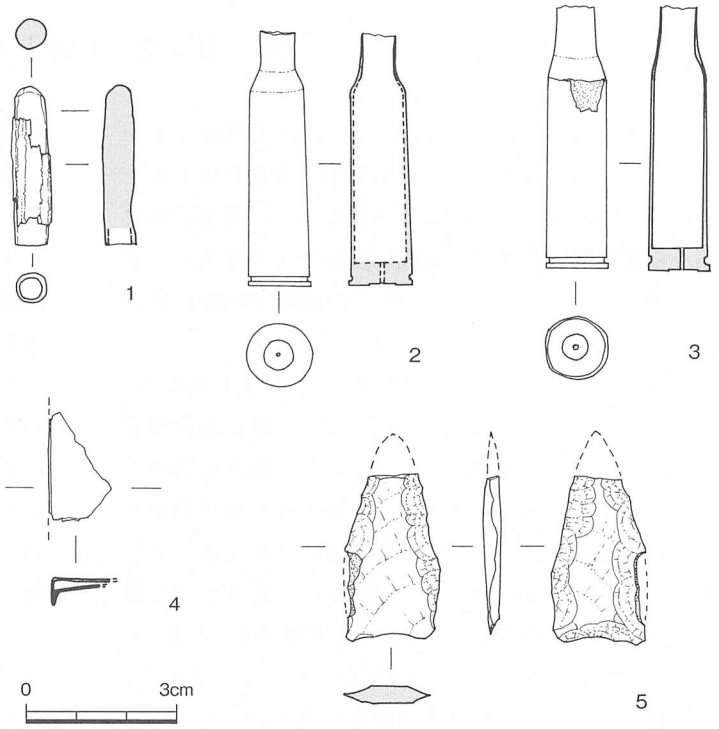


図14　塹壕出土遺物実測図（縮尺2/3）

が非常に多く混じる堆積土層である。調査区東半～中央ではDR～DV-42区以北、西半ではDW～DX-43区以北、DY～DZ-44区以北に分布する。部分的に細砂・粗砂・小礫のラミナを確認できる。

Ⅱ-2-④（中層水田）層は、褐色シルトないし暗灰黄色砂質土が混じる土層で、径1～2㎜前後の砂礫が多く混じる。DR～DV-42区以北、西半では、DW～DX-43区以北、DY～DZ-44区以北の調査区北東のやや低くなった部分を中心として広がる。上半は粘性が強く土壌化が進むこと、上面で水田区画の畦畔や溝を検出できたことから、水田層と判断した。

Ⅱ-2-⑤層は、砂礫が多く混じる黄褐色砂質シルトや灰黄色砂質シルト、砂礫混じりの灰黄褐色砂質土で構成される堆積土で、上下のⅡ-2-④層やⅡ-2-⑥層と比べて、砂礫が非常に多く混じる点が特徴である。DS・DT-42区にやや張り出しを持ちながら、調査区北半部を中心として広がる。Ⅱ-2-③層と同じく、部分的に細砂・粗砂・小礫の薄いレンズ状ブロックがみられ、河川氾濫に伴う比較的緩やかな増水によって堆積したものと判断した。

Ⅱ-2-⑥層（下層水田）は、暗黄褐色砂質シルトないし黄灰色砂質土の土層で、径1㎜前後の砂礫が混じる。上半は粘性が強く土壌化が進んでいる。調査区北東の低くほぼ平坦な部分を中心として広がる。上部に堆積する砂礫が多く混じるⅡ-2-⑤層とは比較的容易に区分できた。上半部は粘性が強く、土壌化も進んでいることと、上面で水田区画の畦畔や溝を検出できたことから、水田層と判断した。

Ⅱ-2層の下層には、調査区北半部では自然流路（SR-400）を埋積する土層がみられ、南半部ではⅡ-2層直下でⅣ層があらわれる。基本層序Ⅲ層にあたる土層は、Ⅱ-2-②・④層の水田耕作で削平されているものと考えられる。

このように、Ⅱ-2-②・④・⑥層は水田層、Ⅱ-2-①・③・⑤層は緩やかな氾濫で形成された砂礫が非常に多く混じる堆積土層である。

Ⅱ-2層の下部には、谷状の窪地を埋積する土層群がみられる。最上層の砂礫混じりの灰茶色系の土層である①層、灰白色の細砂・粗砂層を主体とする②層、拳～人頭大の円礫を主体とする砂礫層である③層に大別できる。これらの土層群は、谷状の窪地を流れるSR-400が埋没していく過程で堆積したものである。①～③層の堆積過程を示す細分層については、SR-400の項で報告する。

2　Ⅱ-2-①層と出土遺物

Ⅱ-2-①層は調査区東壁沿いに設けた深掘りトレンチ断面では南端部までみられるが、深掘りトレンチから西へ数m離れると確認できなくなる。調査区中央部から北半部にかけての範囲に広がるものである。下部のⅡ-2-②（上層水田）層との層界は明確に区分できる。

調査区北半部では、下部のⅡ-2-②（上層水田）層が段差をもって深くなり、Ⅱ-2-①層は急に厚くなる。そのため、最初にⅡ-2-①層の精査を始めた調査区東半部では、上部のⅡ-1層を掘り残す結果となった。また、DS-41・42区では攪乱部を見逃してしまった。そのため、Ⅱ-2-①層として取り上げた遺物には近世以降の遺物が含まれる。下層のⅡ-2-②（上層水田）層の時期比定の問題とかかわってくるので、遺物整理の段階で出土地点の確認を進めた。

これらのⅡ-2-①層として取り上げた近世以降の遺物には、DS-45区出土の砥部焼染め付け4点（写真図版33-①-2・3）、調査区北東部出土の施釉陶器壺（図16-40）・砥部焼染め付け碗1点・白磁の口縁部破片1点、調査区南東部出土の砥部焼染め付け碗（写真図版33-①-1）がある。DR・DS-45区とDX-45区の段落ち部からは、白磁1点、近代の施釉陶器の胴部破片2点が出土している。また、Ⅱ-2-②（上層水田）層の水田面を検出する際にも、DS-41・42区で施釉陶器蓋（図16-41）、DT-43区で砥部焼染め付け、DW-44区で近代陶器の胴部破片1点、SS-17やSS-22・30上面で近代の施釉陶器の胴部破片1点、砥部焼染め付け碗、白磁1点が出土している。以上の近世以降の遺物の出土地点は、調査区東半部のⅡ-1層の掘り残し部分と、北半部のⅡ-2-①・②層が落ち込む部分にあたり、本来はⅡ-1層に伴う遺物と考える。

近世以降の遺物を除いて、Ⅱ-2-①層から出土し

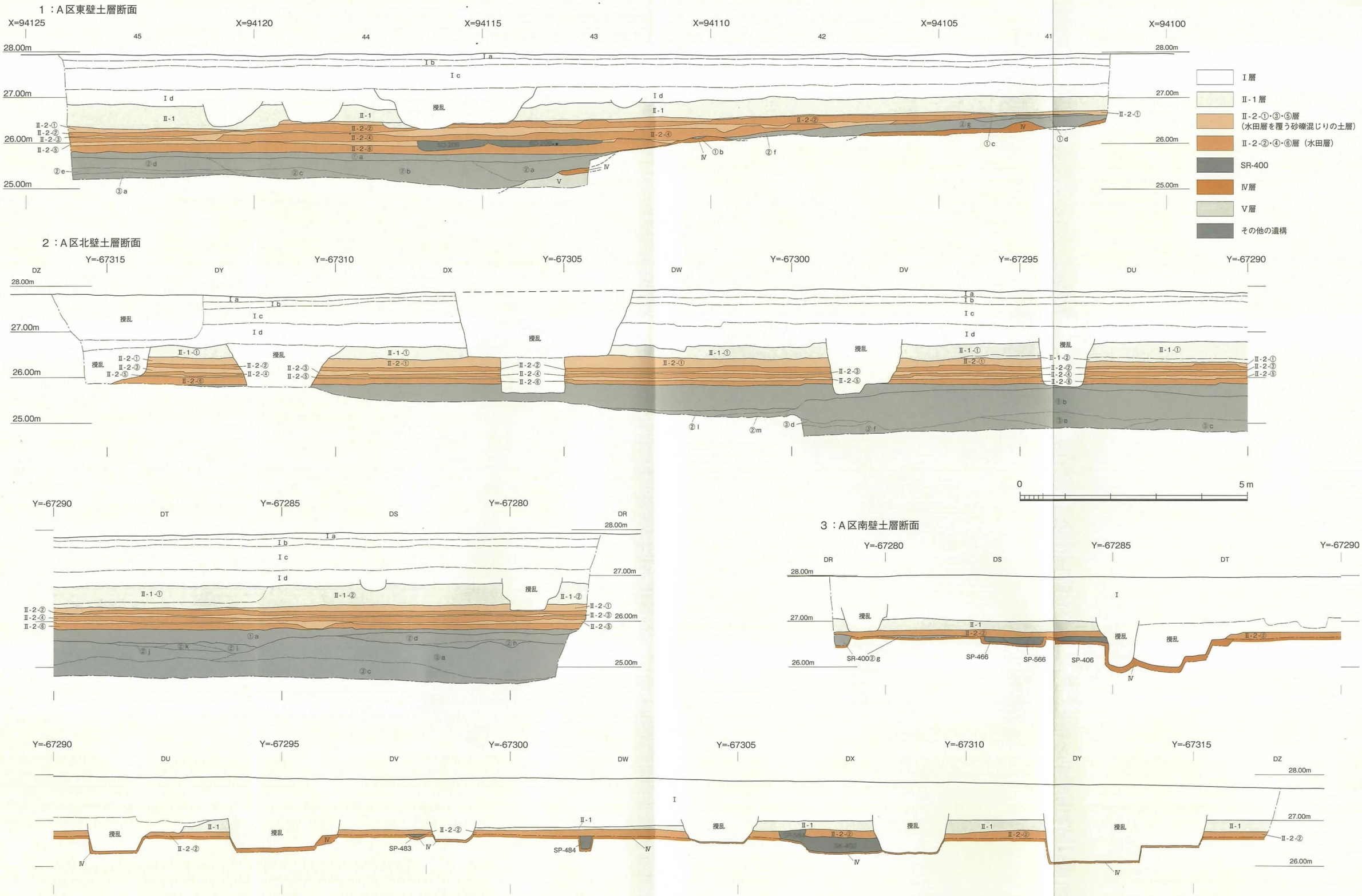


図15　A区土層断面図（縮尺1/80）

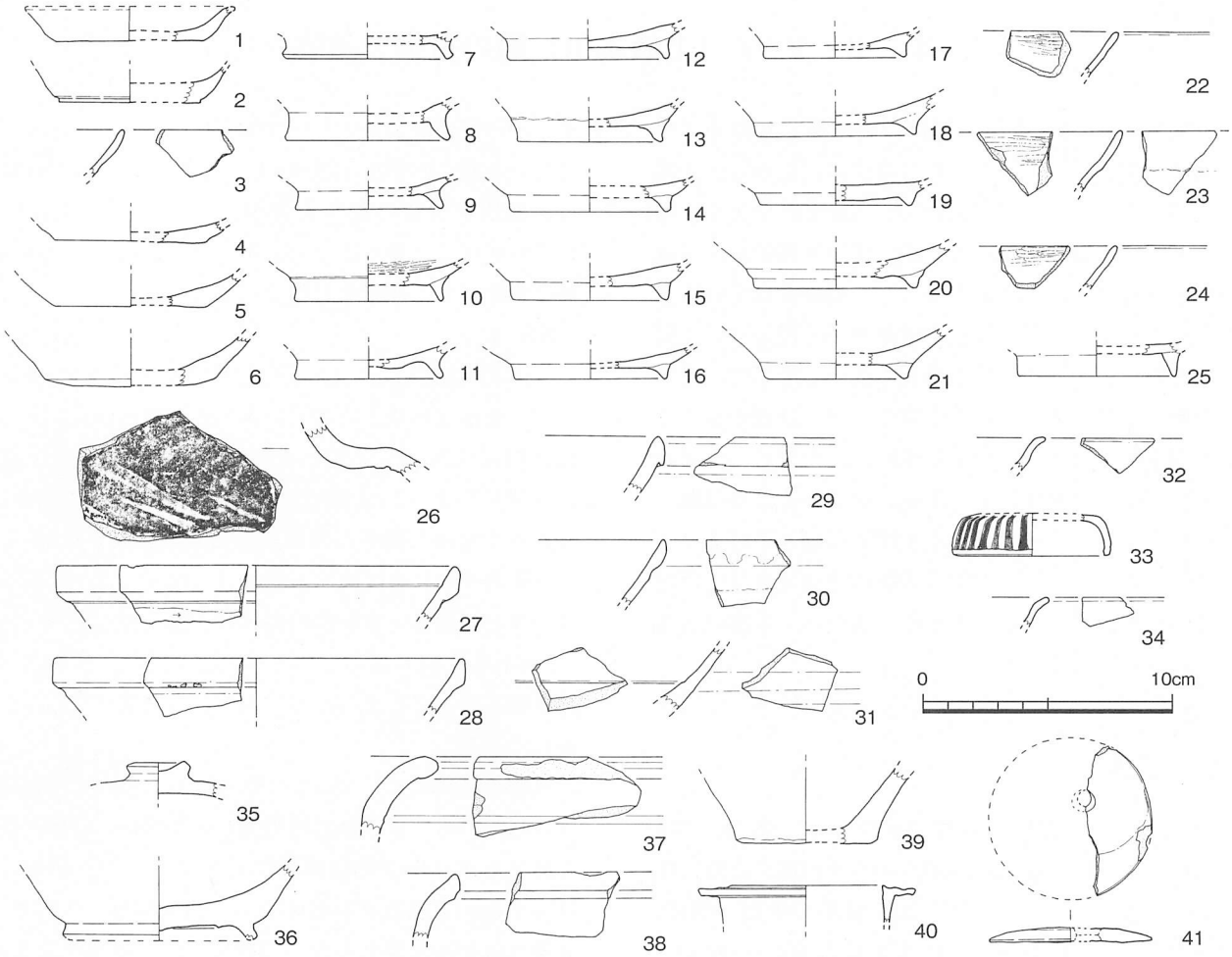


図16　A区Ⅱ-2-①層出土遺物実測図（縮尺1/3）

た遺物には、土師器（図16-１～21）・黒色土器（22～25）・須恵質土器（26）・白磁（27～32）・青白磁（33・34）の中世の遺物と、古墳時代後期～奈良時代の須恵器（35～38）、弥生土器（39）などがある。

土師器の中で、１・２は皿、３は埦もしくは坏の口縁部破片、４～６は坏の底部破片、７～21は高台付き埦の高台部破片である。１・２の皿の外底面には回転糸切り離し痕が残る。他は、外底面はナデ仕上げもしくは、器面の荒れが進み、切り離し方法は不明である。１・８・14・17は器壁の芯部に黒化層が残り、11は焼成不良のために内外ともに黒変部が残存する。また、接合しないが、11と同一個体と考えられる破片がDT-45区SD-８埋土からも出土している。もっとも多く出土している高台部破片をみると、高台部が長く外方に広がる７～11、先端がやや細くなり直立気味の12～15、低い断面三角形の16～21に分類できる。

黒色土器の22～24は両黒土器の埦口縁部、25は内黒土器の高台部の破片。26は須恵質土器の壺の肩部破片で、内面に当て具痕と考えられる幅４㎜の幅広の平行条線の圧痕が残る。27～30の白磁は玉縁口縁をもつ埦であるが、27～29は玉縁口縁が厚めで大きい。32は埦もしくは皿で、二次的な火熱を受けているためか、釉色がくすむ。33は合子の蓋、34は皿か。35は奈良時代の坏蓋の摘み部破片。36は高台部が外方に「ハ」字形に広がる。器壁の厚さから壺と考えた。39は弥生時代中期後葉の甕の平底破片である。

以上の図示した遺物の他、SS-35水田面直上のⅡ-2-①層から中国白磁碗の胴部破片が１点出土している。

3　Ⅱ-2-②（上層水田）層の遺構と遺物

Ⅱ-2-②（上層水田）層は、砂礫混じりのオリーブ褐色砂質シルトで、A区のほぼ全域に広がる。上部に堆積したⅡ-2-①層と比べて、砂礫が少なく、粘性が強く、土壌化が進んでいる。薄い砂礫のレンズ状堆積もみられず、上半を中心として攪拌されているものと判断した。下半にはやや砂礫が多く混じり、土質もしまり、上半と比べて土壌化も弱い。そこで、上半のシルトで構成される部分を耕作土層、砂礫が混じる下半部を床土層として調査を進めた。ただし、上半から下半へ変化は漸移的で、明確に分層することは難しかった。そこで、上半部をやや深めに掘り下げることとした。そのために、上半部の耕作土層で取り上げた遺物の一部には、本来は床土層にあたる下半部に包含されたものが含まれる。

（1）遺構

Ⅱ-2-②層上面では、畦畔で区画されたSS-1～7・13～17・19～23・26～28・30～40の水田面、これに伴うSD-8～12・18・24・25・29を検出できた（図17、図版3～5）。ただし、A区南半部のDR～DZ-41・42区では、Ⅱ-2-②層上半のシルト層（耕作土層）はみられず、下半の砂礫が多く混じるシルト層（床土層）が残存するのみであった。とは言っても、土質と土色がわずかに違う部分が帯状にのびるので、疑似畦畔と考え水田区画を推定した。また、A区北半部のDR～DZ-44区周辺では、上部に堆積するⅡ-2-①層を明確に区分できず掘り下げてしまい、一部Ⅱ-2-②層上半を削り取ってしまったため、下半の疑似畦畔で水田区画を復元している。

1）水田

出土した水田面は、北東に向かって緩やかに傾斜するが、東西に走るDR～DZ-43区のSD-12と、DR～DZ-44・45区のSD-10を境として15～25cmほどの段差が設けられている。水田を区画する基軸となる畦畔は、南北方向に走るSD-10・12・18の両側に設けられた畦畔で、南北方向にのびるSD-11・24・25の両側の畦畔を造り出し、さらに幅が40cm前後の畦畔で小区画の水田を造成している。基軸となる畦畔は、Ⅱ-2-②層下半の砂礫が混じるオリーブ褐色砂質シルトを削り出しているが、水田を小区画に分ける幅40cm前後の畦畔は、砂礫が少なくシルト質が強いⅡ-2-②層上半、つまり耕作土を盛り土したものである。以下、各水田面を単位として報告を行う。

SS-1

A区北東端のDR・DS-45区に位置する。南北3.28m以上、東西2m以上の方形の水田面を検出した。水田面の標高は26.17～26.21mを測る。水田面には、上部に堆積したⅡ-2-①層で埋まった凹凸がみられたが、耕起痕や足跡と確実に判断できるものはない。SS-1と西隣のSS-2を区画する畦畔は、幅60～78cm、高さ4cmほどである。南側の畦畔は幅2.6mと広く、Ⅱ-2-②層下半を削り出している（図版7-3）。畦畔北半部を削り取ってしまったが、本来は22cmほどの段差を復元できる。

西側の畦畔には、SS-2へ配水するための水口が設けられている。水口部の埋土上半の①層は、砂礫が多く混じるオリーブ褐色砂質シルトで、Ⅱ-2-①層に対応する。下部の②層はオリーブ褐色粘質シルトで、砂礫はほとんど混じらない（図18-1）。後述するSS-2とはほとんど標高差がないので、水配りの際でも、強い水流は考えられない。水口部埋土②層から、土師器埦の高台部破片（図21-25）と、獣骨片が出土している。

SS-2

A区北東端のDS・DT-45区、SS-1の西側で出土した。水田面は調査区北側にのび、南北3.45m以上、3.5～4.2mの不整方形を呈する。水田面の標高は26.17～26.21mを測る。水田面に残る凹凸は多い。3ヶ所で人間の足跡と考えられる窪みを確認できたが、歩行の方向性は認められない。

SS-2を区画する南側畦畔は、SS-1と同じく、幅2.6mと広く、Ⅱ-2-②層下半を削り出している。西側では3.6～3.9m、高さ7cmほどの広がりを持つⅡ-2-②層下半を検出し、西側を区画する畦畔を考えた。その南端を切って、SD-8が西に向かってのびる（図版7-3）。SS-2からの流出部の埋土を土層断面で観察した。上部の①層は暗灰黄色粘質土と黄褐色粘質シルトが混じりあう堆積土で、下部の②層は砂礫が非常に

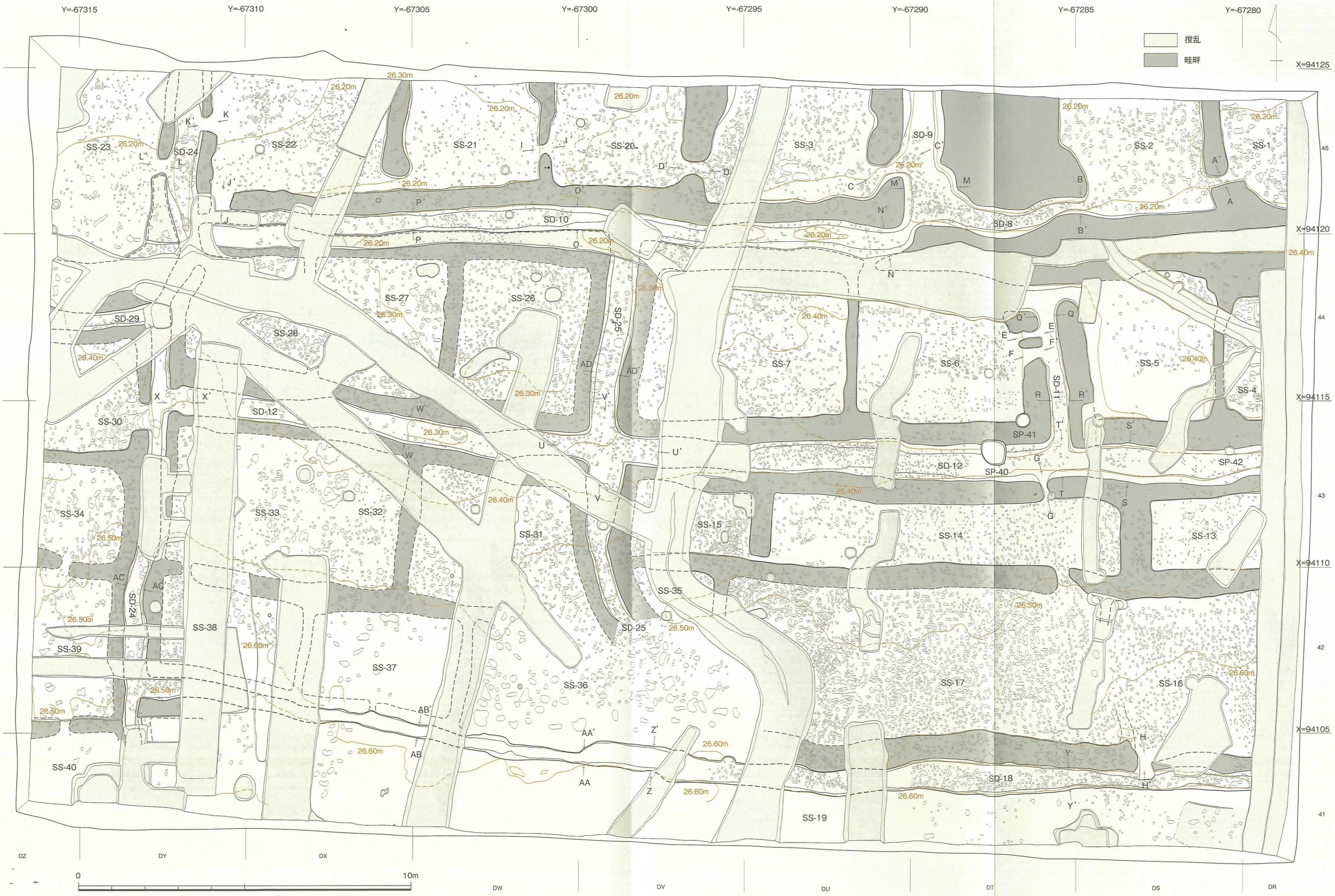


図17　A区Ⅱ-2-②（上層水田）層遺構配置図（縮尺1/100）

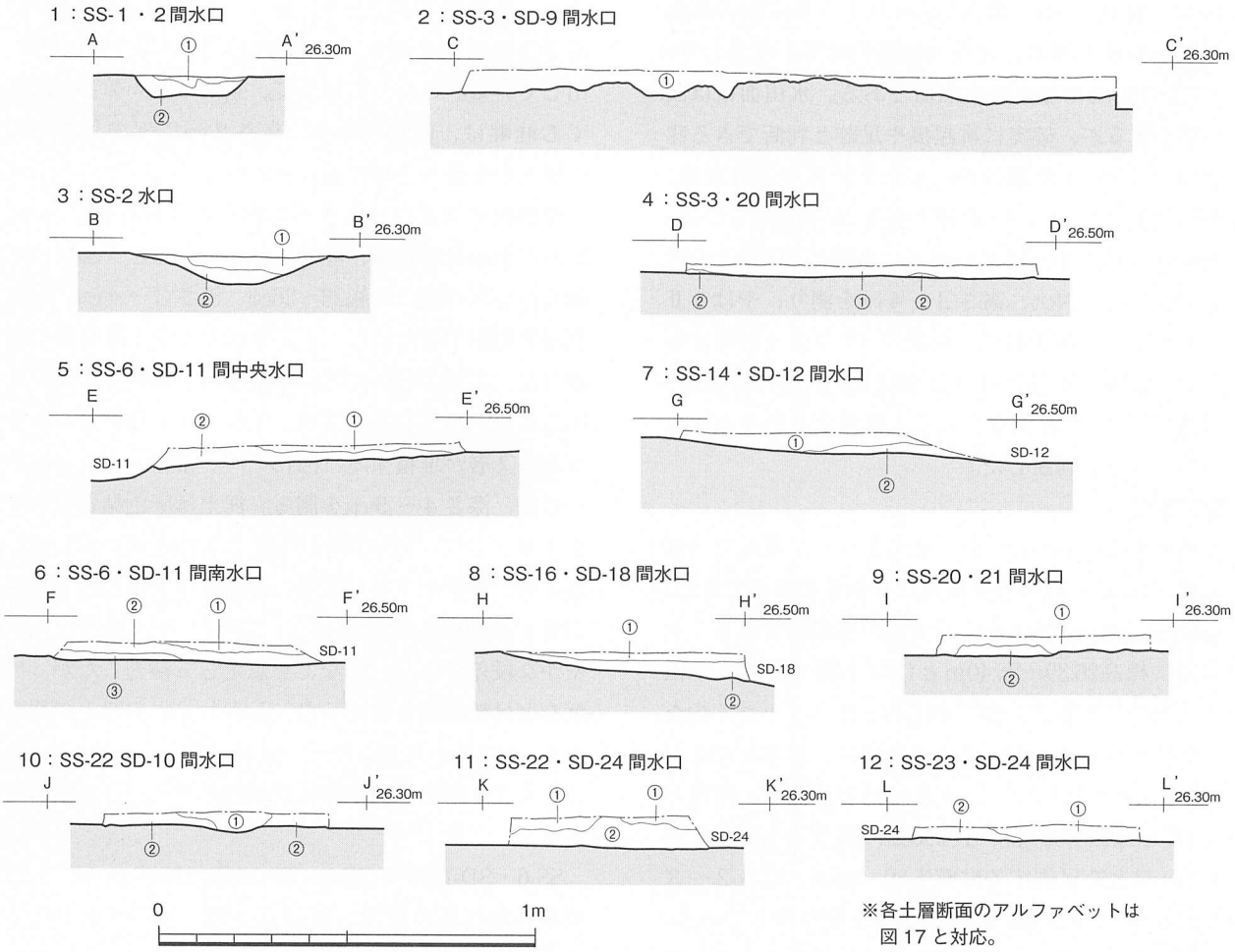


図18　A区Ⅱ-2-②（上層水田）層に伴う水口部分の土層断面図（縮尺1/20）

多く混じる暗灰黄色砂質土である（図18-３）。②層の観察から、前述したSS-１・２間の水口埋土と比べて、旺盛な流水があったと考えられる。

SS-２耕作土層（Ⅱ-２-②層上半）から、須恵器の口縁部片（図22-31）などが出土している。

SS-３

Ａ区北端中央よりのDU・DV-45区で出土した。水田面は調査区北側にのび、南北3.45m以上、東西4.0～5.3mの不整方形を呈する。水田面の標高は26.20～26.23mを測る。水田面には凹凸が多く残り、人間や牛の足跡と考えられる窪みもあるが判然としない。東側のSD-９とを区画する畦畔は、幅1.0～1.28m、高さ５cm前後。南側のSD-10とを区画する畦畔は、幅0.71～0.97m、高さ５～６cm。西側のSS-20とを区画する畦畔は、幅0.9～1.54m、高さ２～６cmを測る。これらの畦畔は、いずれもⅡ-２-②層下半を削り出している。

東西の畦畔を切って設けられた水口を検出した。配水の方向を確認するために、水口を縦断する土層断面を観察した。SS-３・SD-９間の水口部は、SD-９溝底と比べて２～４cm高い。埋土は、暗灰黄色粘質シルトで、灰白色細砂のレンズ状ブロックがみられる。SD-９から取水するための水口と判断した（図18-２）。ただし、取水するための堰と考えられる杭痕跡は検出できなかった。SS-３・20間の水口部は、ほとんど高低差がない。埋土は、細砂混じりのオリーブ褐色砂質シルトの①層を主体とし、下底面に貼りつくようにSS-20に向かって灰白色細砂のレンズ状ブロックの②層が堆積する（図18-４）。SS-３からSS-20への配水が考えられる。

SS-３・20間の畦畔部から、龍泉窯系青磁碗の破片（図23-30）などが出土している。

SS-４

Ａ区東端中央よりのDR・DS-43・44区に位置する。水田面は調査区東側にのび、不整方形の水田面と考え

られる。南北3.68m、東西1.08m以上、水田面の標高は26.40m前後を測る。北側の幅広の畦畔を境として、SS-１より20cmほど高い水田面である。水田面には凹凸が多く残るが、確実に耕起痕や足跡と判断できる窪みはない。SS-４北側のSS-１とを区画する畦畔は、幅2.6mと広く、Ⅱ-２-②層下半を削り出している。水田面から高さ３cmほどを測る。南側のSD-12とを区画する畦畔は、94cm、高さ３～４cmを測り、やはりⅡ-２-①層下半を削り出す。西側のSS-５とを区画する畦畔は、幅35～50cm、高さ２cm前後。畦畔本体はⅡ-２-②層上半と共通する土層で、耕作土を盛り上げて造られていると判断した。

SS-５

A区北東部のDS-43・44区で出土した。攪乱で一部を破壊されているが、水田面のほぼ全体を検出できた。南北4.5m、東西3.75mを測る方形の水田面である。水田面は、標高26.39～26.40mとほぼ平坦である。水田面には凹凸が残るが、他の水田面と比べて小さく少ない。北隣のSS-２とを区画する畦畔は、前述したように２.5m前後の幅広で、高さ２cmほどを測る。南側のSD-12とを区画する畦畔も幅90cm、高さ４cm前後。西側のSD-11とを区画する畦畔も80～90cm、高さ２～３cmを測る。いずれもⅡ-２-②層下半を削り出している。

西側畦畔の北端には水口が設けられる。埋土は上部に堆積するⅡ-２-①層と共通して砂礫が多く混じる。水口底面がわずかに窪み、SS-５水田面と比べてSD-11溝底が低いことから、排水のための水口と考えた。この畦畔の南端は、実測図では窪むように表示されているが、これは上層の攪乱部によって破壊された部分である。

耕作土層（Ⅱ-２-②層上半）から白磁破片（図22-23)、SD-12とを区画する畦畔部から土師器埦の高台部の破片（図23-21）などが出土している。

SS-６

A区北東部のDT・DU-43・44区に位置する。北側が攪乱で破壊されているが、方形の水田面と考えられる。東西5mを測り、南北は4.2mほどと推定される。水田面の標高は26.42m前後で、東側のSS-５と比べてわずかに高い。水田面には凹凸が多く残る。北西部で人間の足跡の可能性を持つ窪みがいくつかあるが、全体に小さな窪み状のものが多い。北側のSD-10とを区画する畦畔は、攪乱で破壊され、詳細は不明。西側のSD-11とを区画する畦畔は、幅72～88cm、高さ２～４cm。南側のSD-12とを区画する畦畔は幅85～92cm、高さ３cm前後を測る。ともにⅡ-２-②層下半を削り出している。これらに対して、東隣のSS-７とを区画する畦畔は、幅33～39cm、高さ２cm以下で、Ⅱ-２-②層上半を盛り上げて造られている。

東側畦畔北部には３ヶ所の水口が設けられていた。北側の水口は幅72cm、畦畔上面からの深さ５cm前後を測る。中央の水口は幅23～26cm、深さ３～４cm。配水状況を把握するために、水口を縦断する土層断面を観察した。上部のSD-11側には細砂・小礫が多く混じる灰色粘質シルトである①層、下部には灰色粘質シルトである②層が堆積する（図18-５)。南側の水口は幅33～47cm、深さ４～５cmを測る。埋土は灰色粘質シルトを主体として、SD-11側から最上部の砂礫が多く混じる①層、砂礫が少ない②層、砂礫をほとんど含まない③層が堆積する（図18-６)。SD-11とは４cmほどの緩やかな段差があり、堰などを想定して精査したが、杭痕などは確認できなかった。しかし、水口埋土の観察から、SD-11からSS-６への給水が考えられる。なお、これら３ヶ所の水口が同時に機能していたかは不明である。

SS-6・SD-10間とSS-6・SD-12間の畦畔から、土師器埦の高台部の破片（図23-16・17）などが出土している。

SS-７

A区北部中央よりのDU・DV-43・44区で出土した。北辺部は攪乱で破壊されている。東西5.8～6.2m、南北は4.3m前後と考えられ、やや台形に近い水田面と推定される。水田面の標高は26.39～26.42mで、東隣のSS-６とほぼ同じである。水田面には凹凸が多く残り、人間や牛の足跡と考えられる窪みもあるが判然としない。東隣のSS-６とを区画する畦畔は、前述したように幅33～39cmのⅡ-２-②層上半を盛り上げて造られている。南側のSD-12とを区画する畦畔は、幅83～95cm、高さ２cm前後を測る。西側のSD-25とを区画する畦畔は、平面検出に失敗して高まりを確認できていない。ただし、床土にあたるⅡ-２-②層下半の広がりから幅50cm前後の畦畔を復元できる。

SS-７の耕作土層（Ⅱ-２-②層上半）から須恵質土器の壺底部片（図22-29)、SS-７・SD-12間畦畔から土師器埦の高台部破片（図23-22）などが出土している。

SS-13

A区東端の中央DR・DS-42・43区で出土した長方

形の水田面である。東側は調査区外にのびる。南北2.1～2.24mを測る。水田面は標高26.43～26.47mで、北側のSS-４・５と比べて数cm高い。水田面には凹凸が多いが、他の水田面と比べて凹凸は小さく少ない。北側のSD-12とを区画する畦畔は、58～77cm、高さ２～４cm。南隣のSS-16とを区画する畦畔は、62～88cm、高さ４～６cm。西隣のSS-14とを区画する畦畔は、幅95～97cm、高さ２cm前後を測る。いずれもⅡ-２-②層下半を削り出している。

耕作土層（Ⅱ-２-②層上半）から土師器坏の底部破片（図22-４）などが出土している。

SS-14

A区中央の東よりのDS～DU-43区で出土した東西に細長い長方形の水田面である。南北1.75～2.18m、東西10.5mを測る。水田面の標高は26.41～26.46mで、ごくわずかに北西側に低くなっていく。水田面の標高差が５cm以内におさまることから１枚の水田面と考えたが、西隣のSS-15と比べて広く、西半部で水田面の傾斜が若干変化するので、中央のDT-43区西半に、耕作土（Ⅱ-２-②層上半）を盛り上げた畦畔を想定することも可能である。しかし、調査時には確定できなかった。水田面には凹凸が多く残されているが、耕起痕や足跡と判断できるものは見あたらず、しかも小さな窪みが多い。東隣のSS-13とを区画する畦畔は、前述したようにⅡ-２-②層下半を削り出した幅95～97cmで、高さ２～４cm前後を測る。北側のSD-12とを区画する畦畔は、幅75～86cm、高さ１～２cm。南隣のSS-17とを区画する畦畔は、幅56～80cm、高さ１～２cmを測るが、畦畔南側のSS-17とは、検出時に上面を削りすぎて、高まりをほとんど検出できていない。西隣のSS-15とを区画する畦畔は、幅62～67cm、高さ１cm前後。これらの畦畔もⅡ-２-②層下半を削り出している。

SS-14を区画する畦畔では３ヶ所で水口を確認できた。北東部のSD-12とをつなぐ水口（図18-７）は、幅20cm、深さ５cm前後で、上半にⅡ-２-①層と考えられる砂礫が非常に多く混じる灰褐色～オリーブ褐色の砂質シルトである①層、下面にSD-12に向かってレンズ状に細砂が堆積する灰褐色砂質シルトの②層を観察できた。SD-12への排水を目的とした水口である。SS-17とを区画する畦畔の東端近くに設けられた水口は、幅40cm前後、畦畔検出面からの深さ４cmほど。西隣のSS-15とを区画する畦畔に設けられた水口は、幅15cm、深さ４cmを測る。ともに、Ⅱ-２-①層と考えられる砂礫が非常に多く混じるシルトで埋まっている。埋土の状況と水田面の標高差から、SS-17からSS-14、そしてSS-15への配水が考えられる。

耕作土層（Ⅱ-２-②層上半）から土師器埦の高台部破片（図22-14・16）、SS-14・17間畦畔部から土師器坏の底部片（図23-１・３）、土師器埦の高台部破片（図23-８～10）、SS-14・SD-12間畦畔から白磁碗の破片（図23-28）、SD-12とをつなぐ水口埋土から須恵器壺の底部破片（図21-13）などが出土している。13は丸底で、胴部との境に細い沈線を１条巡らす。

SS-15

A区のほぼ中央のDU・DV-43区で出土した長方形の水田面である。南北1.8～1.85m、東西3.53～3.56mを測る。水田面の標高は26.43～26.49mで、ごくわずかに北側に向かって低くなる。水田面の南東部に凹凸が集中するが、耕起痕や足跡と判断できるものは見あたらない。北側・東側・南側を区画する畦畔は、いずれも幅50cm前後、高さ１～２cmを測り、Ⅱ-２-②層下半を削り出している。西側のSD-25とを区画する畦畔は検出に失敗したが、帯状にⅡ-２-②層下半がのびることから、幅45～65cmの畦畔を復元した。

耕作土層（Ⅱ-２-②層上半）から須恵器坏身の破片（図22-30）、SS-15・SD-12間畦畔部から土師器埦の高台部破片（図23-20）などが出土している。

SS-16

A区の南東部のDR・DS-41・42区に位置する水田面である。北辺で耕作土層にあたるⅡ-２-②層上半がわずかに残るが、他は削平され、床土層にあたる下半を検出したのみである。検出面は標高26.51～26.62mで、北に向かって低くなり、多くの凹凸を検出した。北隣のSD-13と南側のSD-18とを区画する畦畔としてⅡ-２-②層下半の高まりを確認できたが、１cm以下しかなく、判然としない。西側を区画する畦畔は検出できなかった。しかし、残されたⅡ-２-②層上半の上面の傾斜から、DS-42区の攪乱部周辺に南北方向の畦畔を想定しておきたい。

北側のSD-18とを区画する畦畔に水口が設けられている。幅42～60cmで、SD-18に向かって次第に深くなる。縦断面の埋土堆積を観察すると、上層にはⅡ-２-①層に対応する砂礫が多く混じる暗灰黄色砂質シルトがたまり、下底面にはSD-18から流れ込むように暗灰黄色砂質シルトと細砂の互層堆積する②層がみられ

る（図18- 8）。SD-18からSS-16へ給水するための水口と考えられる。

SS-16では、床土層にあたるⅡ-2-②層下半から土師器埦の高台部破片（図24- 2・5）などが出土している。

SS-17

A区南東部のDS～DV-41・42区に位置する水田面である。SS-16と同様に、北辺に耕作土層にあたるⅡ-2-②層上半がわずかに残るが、ほとんど削平され、床土層にあたる下半を検出したのみである。検出面は標高26.45～26.58mで、DT・DU-42北半に向かって緩やかに低くなる。検出面では多くの凹凸を検出したが、確実に耕起痕や足跡と判断できる窪みはない。前述したように東側のSS-16とを区画する畦畔は不明であるが、北側のSS-14、南側のSD-18とを区画する南北の畦畔痕跡を確認できた。北側の畦畔は幅55～75cm、南側は幅80～109と推定される。また、西側の畦畔は、DV-42区北東部で南側に向かってのびる幅45cmの畦畔痕跡を検出できた。しかし、DV-42区南半部では確認できなかった。以上の畦畔痕跡から、南北4.3～4.7m、東西11m前後の水田面を復元した。ただし、他の水田面と比べて面積が広いので、さらに小さく区画されている可能性が高い。

わずかに残る耕作土層（Ⅱ-2-②層上半）～床土層（Ⅱ-2-②層下半）から、土師器の埦の破片（図22- 1、図24- 4）、須恵器瓶の頸部片（図22-26）などが出土。また、SS-17・SD-18間畦畔部からは、土師器坏の底部片（図23- 2）や須恵器甕の口縁部破片（図23-31）などが出土している。

SS-19

A区東壁沿いに設けた深掘りトレンチ断面では、調査区南端のSD-18以南にもⅡ-2-②層下半が残存していることを確認できた。また、調査区南壁に沿ってDS～DY区でもⅡ-2-②層下半を確認できた。しかし、北側のSD-18とを区画する畦畔は検出できておらず、水田面の規模は不明である。数枚の水田面が含まれると考えられるが、SS-19として報告しておく。検出面の標高は26.59～26.67mである。

耕作土層（Ⅱ-2-②層上半）から土師器の柱状高台土器（図22-20）などが出土した。

SS-20

A区北端中央部のDV・DW-45区に位置する。水田面は調査区北側にのび、南北3.0～3.05m以上、東西3.85～3.95mの不整方形を呈する。水田面の標高は26.20m前後で、東隣のSS- 3と比べてわずかに低い。水田面には凹凸が多く残り、人間や牛の足跡と考えられる窪みもあるが、規則的な配列は認められない。東側のSD- 3とを区画する畦畔は、Ⅱ-2-②層下半を削り出した幅0.9～1.54mで、高さ3cm前後。南側のSD-10とを区画する畦畔は、幅73～100cm、高さ1～2cm。Ⅱ-2-②層下半を削り出す。西側のSS-21とを区画する畦畔は、幅35～95cmで、南半を幅狭に造って、水口を設けている。高さ3cm前後。

東西の畦畔の南端に水口が設けられている。東側の水口についてはSS- 3で報告した。西側の水口は、縦断する土層断面を観察すると、上部に砂礫が多く混じる黄褐色砂質シルトである①層が堆積し、底面にはSS-21に向かって灰黄色砂質シルトの小塊が混じる黄褐色砂質シルトのレンズ状ブロックの②層が堆積する（図18- 9）。水田面の標高差からも、SS- 3からSS-20へ、SS-20からSS-21への配水が考えられる。

耕作土層（Ⅱ-2-②層上半）からは、土師器埦の破片（図22- 2・9・15）や、黒色土器埦の高台部破片（図46-20）が出土。図46-20は内黒土器で、下層のSD-209から出土した破片と接合する。また、SS-20・21間畦畔部からの遺物として土師器埦の破片（図23-15）がある。

SS-21

A区北端中央よりのDW・DX-45区に位置する。水田面は調査区北側にのび、南北3.25m以上、東西3.44～3.95mの不整方形を呈する。水田面の標高は26.20m前後で、東隣のSS-20とほぼ同じである。水田面には凹凸が残るが、他の水田面と比べて少ない。東側のSS-22とを区画する畦畔は、前述したようにⅡ-2-②層下半を削り出したもので、高さ3cm前後。南側のSD-10とを区画する畦畔は幅77～86cm、高さ3cmで、西側のSS-22とを区画する畦畔は幅61～95cm、高さ6～8cmで、ともにⅡ-2-②層下半を削り出す。

東側畦畔の水口についてはSS-20で報告した。西側のSD-22とを区画する畦畔の南端で、水口と考えられる畦畔部の途切れを平面的に検出できた。しかし、縦断する土層断面を確認したが、Ⅱ-2-②層下半と同じ砂礫が多く混じるシルト層で、確実に水口が切られているのかは確定できなかった。

耕作土層（Ⅱ-2-②層上半）から白磁Ⅲ（図22-24・25）や須恵器甕（図22-32）、SS-21・SD-10間畦

畔からは土師器埦（図23-19）や土師質土器片（図23-32）などが出土している。

SS-22

A区北西部のDX・DY-44・45区で出土した。水田面は調査区北側にのび、南北3.5m以上、東西4.95～5.3mを測る方形を呈する。水田面の標高は26.18～26.22mを測る。水田面には比較的多くの凹凸が残るが、耕起痕や足跡と考えられる窪みはない。東側のSS-21とを区画する畦畔はSS-21で報告した。南側のSD-10とを区画する畦畔は、幅59～76cm、高さ３～４cm。西側のSD-24とを区画する畦畔は、幅46～64cm、高さ４～６cmを測る。ともにⅡ-２-②層下半を削り出している。

SD-10とを区画する南側畦畔の西端と、SD-24とを区画する西側畦畔の２ヶ所で水口を確認した。おのおの配水状況を確認するために、SD-10との水口を縦断する土層断面を観察した。南側畦畔に設けられたSD-10との水口では、上部に砂礫が少量混じる黄褐色シルトの①層が、下部には細砂のレンズ状ブロックが混じる黄褐色シルトが堆積する（図18-10）。西側のSD-24との水口でも、上部に砂礫が少量混じる黄褐色シルトの①層が、下部には細砂のレンズ状ブロックが混じる黄褐色シルトが堆積する（図18-11）。ともに、下部に細砂のレンズ状ブロックがみられることから、SD-10・24への排水を目的とする水口と判断した。

耕作土層（Ⅱ-２-②層上半）からは、黒色土器埦（図22-21）や須恵質土器壺（図22-27）、耕作土層下部～床土層からは土師器坏（図22-３）や埦（図22-６）、床土層（Ⅱ-２-②層下半）からは土師器埦（図24-７）や白磁碗などが出土している。この中で、白磁碗は、耕作土層出土の破片と接合する。また、SS-22・SD-10間畦畔からは土師器埦（図23-６・11）や内黒の黒色土器埦（図23-26）などが出土。図示していないが、SS-22・SD-24間畦畔から出土した須恵器破片は、中層水田上を覆う砂礫層であるⅡ-２-③層出土の破片と接合する。

SS-23

A区北西隅のDY・DZ-44・45区に位置する。水田面は、調査区の北側と西側にのびる。ただし、南側のSD-29とを区画する畦畔は、ごく一部しか確認できていない。検出した水田面は、南北３m以上、東西６m以上、標高は26.17～26.21mを測る。水田面には多くの凹凸が残るが、耕起痕や足跡と確実に判断できる窪みはみられない。東側のSD-24とを区画する畦畔の南半部は上部を部分的に削平されている。残存状態がよい北半部では、幅47～60cm、高さ３cm前後を測る。南側のSD-29とを区画する畦畔は、DY-44区のSD-29沿いで部分的に確認できただけである。ともにⅡ-２-②層下半を削り出している。

東側のSD-24とを区画する畦畔には、幅40cmほどの水口が切られていた。水口を縦断する土層断面を観察すると、SD-24からSS-23水田面に向かって細砂のレンズ状ブロックが混じる黄褐色砂質シルトである②層がみられ、その上部にSS-23から砂礫がまばらに混じる黄褐色砂質シルトの①層が堆積する（図18-12）。SS-23水田面はSD-24溝底よりも４cmほど高いが、埋土の堆積状況からSD-24からSS-23への給水を目的とする水口と考えた。

SS-23の耕作土層（Ⅱ-２-②層上半）下部～床土層（Ⅱ-２-②層下半）から土師器埦の高台部破片（図22-10・13・17）、皿の底部破片（図22-18）、須恵質土器壺（図22-28）、弥生土器（図22-33）、東側畦畔に設けられた水口の埋土下部から土師器埦の高台部破片（図21-26）などが出土している。

SS-26

A区中央の北西よりのDV・DW-43・44に位置する。検出時に畦畔を削りすぎてしまったが、帯状に残るⅡ-２-②層下半を検出して畦畔を復元した。推定できた水田面は、南北4.43m、東西3.33～3.65mを測る方形を呈する。水田面の標高は26.29～26.34m。水田面には比較的多くの凹凸が残されている。人間や牛の足跡と考えられる窪みもあるが判然としない。畦畔は、前述したように検出時に削りすぎたために、高さは不明。幅は48～60cmを測る。

耕作土層（Ⅱ-２-②層上半）から土師器埦（図22-12・19）が出土。12は輪高台、19は厚い円盤高台のもの。SS-26東側のSD-25とを区画する畦畔から土師器の柱状高台土器（図23-５）、SS-26・27間畦畔からは両黒の黒色土器埦（図23-25）などの破片が出土。

SS-27・28

A区北西部のDW～DY-43・44区で、南北3.5～4.15m、東西7.6～7.7mの範囲が、畦畔と考えられる帯状に残るⅡ-２-②層下半で区画されている。水田面と考えた。水田面は西側に向かって緩やかに高くなり、東北端では標高26.29m、西南端では26.42mと10cm以上の比高差がある。耕作土層にあたるⅡ-２-②層上半を盛り上げた畦畔を想定して、東半部のSS-27と西

半部のSS-28の２枚の水田面を復元した。水田面には、比較的多くの凹凸が残るが、耕起痕や足跡と考えられる窪みは確認できていない。

SS-27耕作土層下部～床土層から土師器埦（図22-８）、SS-27・SD-12間畦畔からも土師器埦の高台部破片（図23-14）が出土している。

SS-30

Ａ区東端中央のDY・DZ-43・44区に位置する。水田面は調査区西側にのび、南北3.2m、2.7m以上の方形である。上部にⅡ-２-①層がごく薄くしか堆積しておらず、北側のSD-29と東側のSD-24とを区画する畦畔を削りすぎてしまい、帯状に残るⅡ-２-②層下半で畦畔を復元した。北側の畦畔幅は44～55cm、東側は40～55cmと推定される。南隣のSS-34とを区画する畦畔は、SS-30側では２cm前後の高まりを検出したが、SS-34側では畦畔上部を削ってしまい帯状に残るⅡ-２-②層下半で畦畔を復元している。水田面の標高は26.38～26.48m。水田面には多くの凹凸がみられるが、耕起痕や足跡と考えられる窪みは確認できなかった。東側のSD-24とを区画する畦畔には幅80cmの水口が設けられ、砂礫が多く混じる黄褐色砂質シルトで埋まっている。

床土層（Ⅱ-２-②層下半）から白磁碗（図24-11）、SS-30・34間畦畔から土師器埦（図23-18）、SS-30・SD-29間畦畔から土師器埦（図23-７）や白磁碗（図23-27）などが出土している。

SS-31

Ａ区中央部のやや西よりのDV～DX-42・43に位置する不整台形状の水田面である。ただし、上部にⅡ-２-①層がごく薄くしか堆積しておらず、水田面の検出時に削りすぎてしまい、SS-31を区画する畦畔は、いずれも帯状に残るⅡ-２-②層下半で復元した。また、南東側の畦畔は確認できなかった。検出面は、南北3.9m、東西4.5～5.6m、標高26.40～26.52mを測る。畦畔の幅は43～60cm。Ⅱ-２-②層上半の検出面には凹凸が多く残るが、耕起痕や足跡と考えられる窪みは確認できなかった。

床土層（Ⅱ-２-②層下半）から土師器埦の高台部破片（図24-１）、SS-31・32・SD-12間畦畔から両黒の黒色土器Ⅲの口縁部破片（図23-24）などが出土している。

SS-32・33

Ａ区中央から西よりのDX・DY-42・43区では、上部にⅡ-２-①層がごくわずかしか堆積しておらず、水田面の検出時に削りすぎ、畦畔と考えられる帯状に残るⅡ-２-②層下半に囲まれたⅡ-２-②層上半の広がりを検出できた。確認できた畦畔の幅は45～95cm。Ⅱ-２-②層上半の標高は26.38～26.58mで、20cmもの比高差があることと、水田面の規模から考えて、ほぼ中央に南北方向の耕作土層のⅡ-２-②層上半を盛り上げて造る畦畔を想定し、東半部をSS-32、西半部をSS-33として２枚の水田面を復元した。Ⅱ-２-②層上半の検出面には凹凸が多く残る。しかし、耕起痕や足跡と考えられる窪みは確認できなかった。

SS-32・33の耕作土層（Ⅱ-２-②層上半）～床土層（Ⅱ-２-②層下半）から土師器埦の高台部破片（図22-７・11）や両黒の黒色土器埦の口縁部破片（図22-22）などが出土している。

SS-34

Ａ区西辺のほぼ中央のDY・DZ-42・43区で出土した方形の水田面である。上部にⅡ-２-①層がほとんど堆積しておらず、畦畔と考えられる帯状に残るⅡ-２-②層下半に囲まれたⅡ-２-②層上半の広がりから復元した。水田面は、調査区西側にのび、南北2.9m、東西2.5m以上と考えられ、Ⅱ-２-②層上半の検出面標高は26.50m前後である。畦畔の幅は45～60cmと推定される。検出面には足跡と考えられる凹凸が多く残るが、確実に足跡と判断できるものはない。

南隣のSS-39とを区画する畦畔が幅26cmほど途切れる部分があり、水口と考えた。埋土は耕作土層であるⅡ-２-②層上半と共通する。

床土層（Ⅱ-２-②層下半）から土師器埦（図24-９）などが出土している。

SS-35

Ａ区のほぼ中央のDV-42・43区に位置する。上部にⅡ-２-①層が部分的にしか堆積しておらず、DV-42北東部で北東隅周辺の畦畔を検出できた。西側の畦畔は帯状に残るⅡ-２-②層下半で復元できたが、南側を区画する畦畔はⅡ-２-②層上半が残存していないため不明である。しかし、西側が緩やかにカーブしてのびるSD-25に沿う三角形の水田面と推定され、北辺2.45m、南西辺３m、東辺2.5m前後の規模が考えられる。検出面の標高は26.48～26.50mを測る。西隣のSS-17とを区画する畦畔は幅42cm前後、北隣のSS-15とを区画する畦畔は幅55cm、東側のSD-25とを区画する畦畔は幅58～62cmである。検出面には耕起痕や足跡と考えら

れる凹凸が残るが、判然としない。

SS-35床土層（Ⅱ-２-②層下半）から土師器埦（図24-３）、SS-34・SD-25間畦畔から土師器埦（図23-23）の高台部破片などが出土している。

SS-36

A区中央南よりのDV・DW-41・42区にあたるSD-18とSS-31・35、SS-17とSS-37に挟まれた部分では、Ⅱ-２-①層やⅡ-２-②層上半が残存しておらず、Ⅱ-１層直下からⅡ-２-②層下半があらわれた。明確に畦畔に区画された水田面を確認できなかったが、床土層にあたるⅡ-２-②層下半が残ることから、もともと水田面が造成されていたものと考え、SS-36とした。検出面には耕起痕や足跡の可能性をもつ凹凸もあるが、確定できなかった。

SS-37・38

A区南西部のDW・DY-42区で推定した水田面である。この地点では、Ⅱ-２-①層やⅡ-２-②層上半が残存しておらず、Ⅱ-１層直下からⅡ-２-②層下半があらわれた。北隣のSS-31・32・33、西側のSD-24とを区画する畦畔と考えられる帯状に残るⅡ-２-②層下半を確認できたが、南側のSD-18とを区画する畦畔は検出できなかった。検出面は標高26.52～26.58mで、南西から北東に向かって緩やかに傾斜する。推定される水田面の規模は、南北3.1m、東西９m前後であるが、この範囲を１枚の水田面とするには面積が広すぎるので、DX-42区の南北にのびる攪乱溝を挟んで、東半部をSS-37、西半部をSS-38とする２枚の水田面を復元した。検出面では、SS-38東端部を中心として、耕起痕や足跡と考えられる凹凸が残る。しかし確実に足跡などと判断できるものはない。

SS-37床土層（Ⅱ-２-②層下半）から土師器坏底部破片（図24-６）などが出土している。

SS-39

A区南西端のDY・DZ-42区に位置する。この地点では、Ⅱ-２-①層は残存しておらず、Ⅱ-１層を除去後に精査して、畦畔と考えられる帯状にのびるⅡ-２-②層下半に囲まれたⅡ-２-②層上半の広がりを検出できた。推定される水田面は、調査区西側にのび、南北4.15～4.4m、東西2.25m以上の方形を呈する。標高は26.50m前後。検出面では、耕起痕や足跡と考えられる凹凸も残るが、確実に足跡などと判断できるものは検出できなかった。北隣のSS-34とを区画する畦畔は幅47～56cm、南隣のSS-40とを区画する畦畔は幅45～50cmを測る。南北の畦畔には途切れる箇所があり、水口と考えた。埋土はいずれも耕作土層であるⅡ-２-②層上半と共通する。SS-39・SD24間畦畔から同安窯系青磁の破片（図23-29）などが出土している。

SS-40

A区南西端のDY・DZ-41・42区に位置する。周辺ではⅡ-２-①層は残存しておらず、Ⅱ-１層直下でⅡ-２-②層があらわれた。北隣のSS-39と東側のSD-24の一部で畦畔と考えられる帯状にのびるⅡ-２-②層下半の変色部を検出でき、調査区西側と南側にのびる方形の水田面を推定した。Ⅱ-２-②層の検出面の標高は26.55～26.59mで、水田面は南北２m以上、東西2.5m以上である。検出面では、いくつかの不整形の凹凸を検出したが、耕起痕や足跡と考えられるものはない。北隣のSS-39とを区画する畦畔には、水口と考えられる途切れ部がある。

２）溝

Ⅱ-２-②層上面では、SD-８～12・18・24・25・29の９条の溝が出土した。いずれも水田面に伴う水路で、東西にのびるSD-８・10・12・18・29を基幹とし、これらを繋ぐように、北から南へ向かってのびるSD-９・24・25を配置する。さらに、補助的にSD-11などを設けている。

SD-８

A区北東部のDT-45区で、SS-２から西へ向かってのびる水路で、SD-9・10が分岐する地点までをSD-８とした。SS-２からの流出部で幅50cm、深さ５cm、SD-9・10が分岐する地点で幅1.2m、深さ６cmを測る。SS-２側がSD-9・10分岐点よりも２～４cmほど高い。SS-２で報告したように、埋土下部に砂礫が非常に多く混じる暗灰黄色砂質土が堆積し（図18-１）、SS-２からの流水があったことを確認できた。土師器埦の高台部破片（図21-１）などが出土している。

SD-９

A区北東部のDT-45区でSD-８から分岐して北側へ向かって流れる水路である。SD-10と分岐する付近で、溝底の標高は26.15～26.18mで、北へ向かってわずかに低くなる。

SD-８から分岐する地点の埋土を観察すると、上半部に径１～1.5mmの砂礫が多く混じる暗灰黄色シルトの①層、下半部に砂礫が少なくやや粘性をおびる暗灰黄色シルトの②層、溝底に親指先大の小円礫が少量混

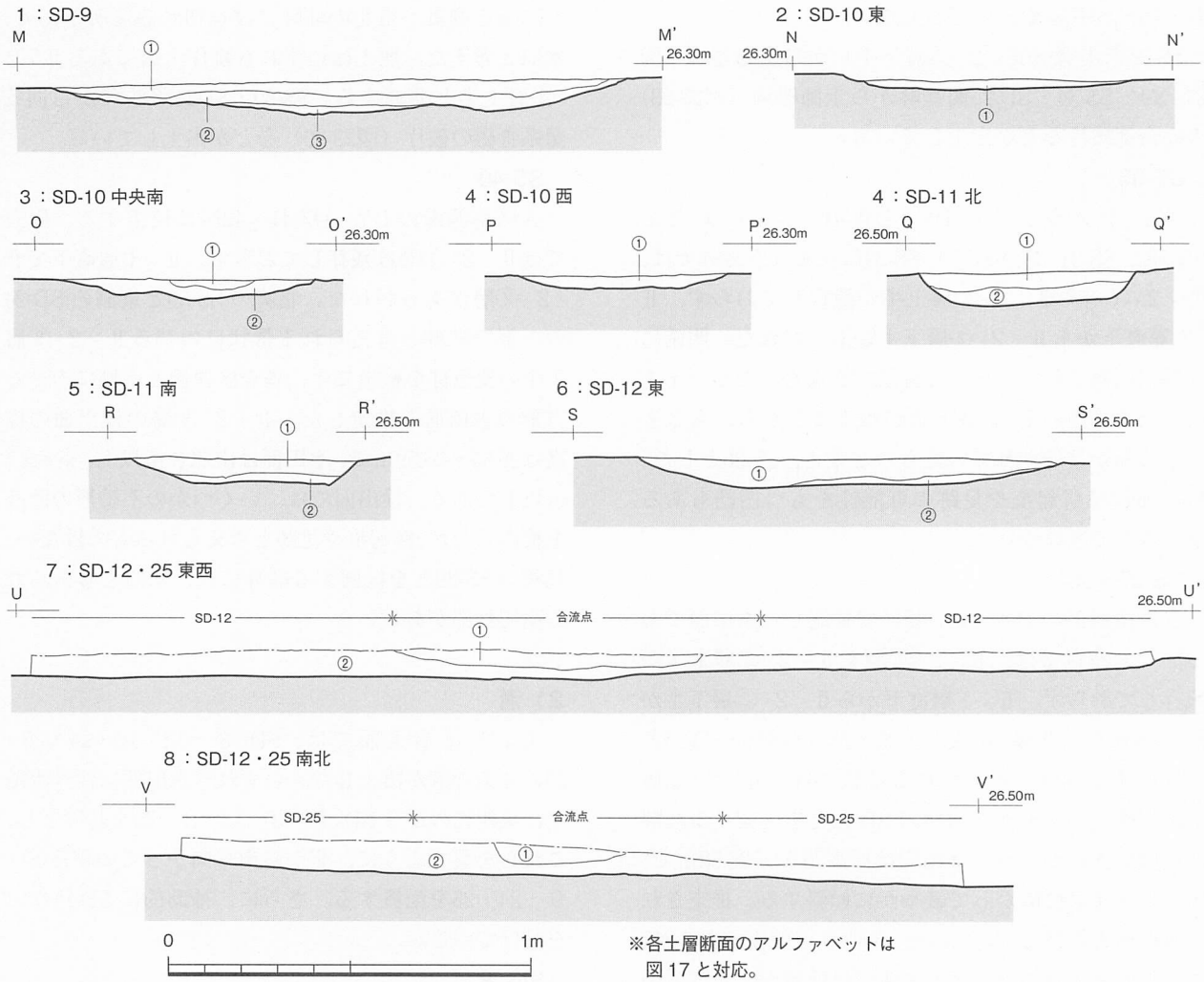


図19　A区Ⅱ-2-②（上層水田）層に伴う溝の土層断面図1（縮尺1/20）

じる暗灰黄色砂質土の③層が堆積する（図19-１）。また、①層には、北に向かって流れるように、灰黄色砂質土のレンズ状ブロックがみられる。

埋土①層から小指先大の不定形の炭化物片が少量、②層から両黒の黒色土器椀の口縁部破片（図21-２）などが出土している。

SD-10

A区東北部のDT-45区南西端で、SD-８・９から分岐して西へのび、DY-45区南東端付近でSD-24と合流する水路である（図版６-１）。総延長21.5mほどを測る。溝底にはこまかな凹凸があるが、標高26.14～26.20mとほぼ平坦である。東端のSD-８からの分岐点では溝幅47cm、深さ５～６cm、その西側のDU-45区では溝幅82～93cm、深さ６cm、中央部のDW-45区では溝幅60～80cm、深さ３～６cm、東端のDX-45区では幅43cm前後、深さ４cmを測る。

SD-８からの分岐点近く、DV・DW区の境界部、DW・DX区の境界部の計３ヶ所で、埋土の堆積状況を観察した。SD-８からの分岐点近くの埋土は、小円礫が少量混じるオリーブ褐色砂質シルトの①層で、灰白色細砂のレンズ状ブロックがみられる（図19-２）。DV・DW区の境界部では、最上部に径１mmほどの礫が少量混じる暗灰黄色粘質シルトの①層、中位～溝底には砂質が強い灰黄色砂質シルトの②層が堆積し、②層では細砂のレンズ状ブロックがみられる（図19-３）。DW・DX区の境界部は、砂礫混じりの灰黄褐色シルトの①層で埋まっていた（図19-４）。埋土下半～溝底近くで、細砂のレンズ状ブロックがみられることから、溝底に凹凸があるとしても、東から西へ向かって流水があったことを把握できる。

埋土中から土師器椀（図21-３・４）の高台部破片、炭化物小片が少量出土している。４は溝底から出土。

３は内面が黒色を呈するが、器壁の厚さなどから土師器と判断した。この他、DV-45区西端では、溝底から土師器小片や獣歯などが出土している(図版７-４)。

SD-11

A区東半部のDT-43・44区に位置する。DT-43区北東端でSD-12から北に向かって分岐する水路である。北端はSS-５・６とSD-10を区画する畦畔で途切れている。総延長５m、溝幅56～63cm、深さ６～８cmを測る。溝底は、SD-12との分岐点近くで26.38m、北端部で26.34mと、ごくわずかであるが北に向かって低くなる。

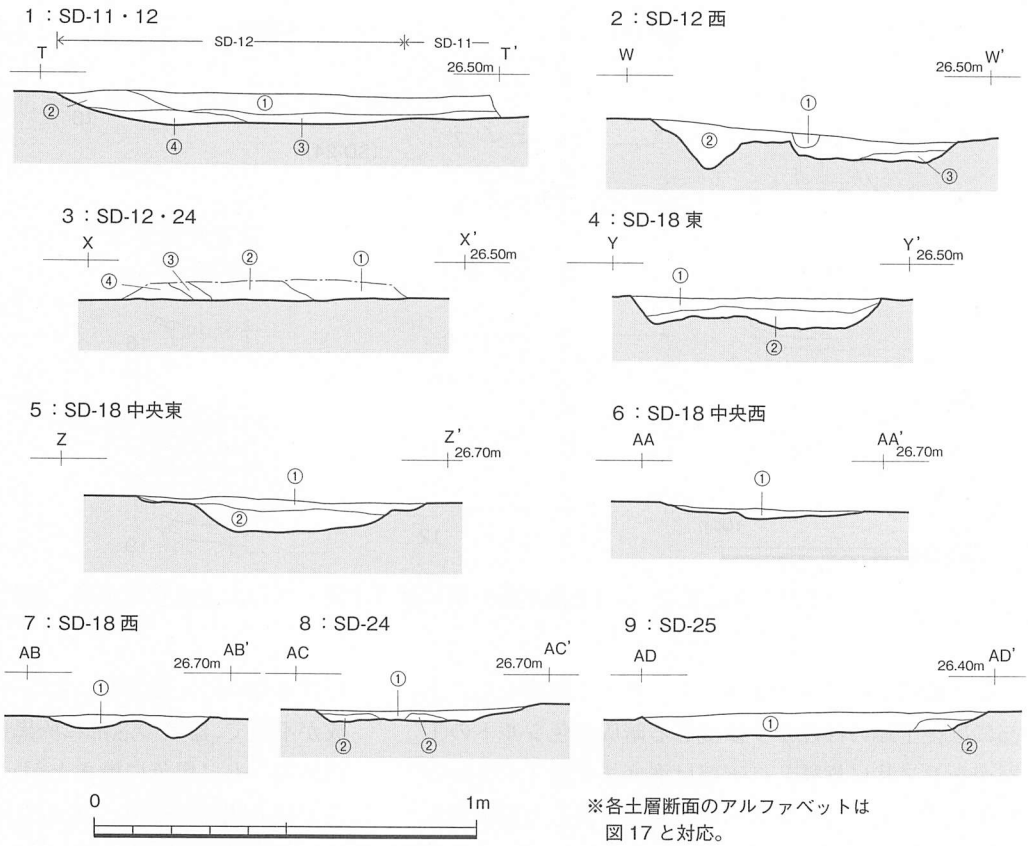


図20　A区Ⅱ-2-②（上層水田）層に伴う溝の土層断面図2（縮尺1/20）

南北２ヶ所で土層観察用ベルトを設定し、堆積土層を観察した。北側の土層観察用ベルトでは、上部に径１～２㎜の礫が多く混じる灰色粘質土の①層、下部に灰色粘質土に細砂の薄いレンズ状ブロックが互層状態で縞状に堆積する②層を確認した（図19-４)。南側の土層観察用ベルトでは、上部～中部に径１～２㎜の角礫が多く混じる灰色粘質シルトの①層、溝底には灰褐色粘質土に細砂・微細砂の薄いレンズ状ブロックが縞状にみられる②層が堆積する（図19-５)。溝底の高低と埋土から、SD-11はSS-６・７に給水を行うための補助的水路と考えた。

埋土から土師器皿の底部破片（図21-５）や、炭化物小片などが出土している。５の外底面には回転糸切り離し痕が残る。

SD-12

A区のほぼ中央DR-43区からDY-42・43区へ向かって東西にのびる水路である（図版６-２)。東側は調査区外へのび、西端は南北方向にはしるSD-24と合流する。西側がわずかに北にカーブするが、総延長34m以上を確認できた。溝幅は、東端のDS-43区では85～115cm、東半部のDU・DV-43区では95～105cm、西半部のDW・DX-43区では68～80cm、西端のDY-43・44区では67cm前後を測る。溝底は凹凸が多く、東端で標高26.36m、中央部で26.28m、西端で26.34mと、部分的に低く窪む部分もある

SD-12では、６ヶ所に土層観察用ベルトを残して埋土の堆積状況を確認した。東端近くのDS-43区西半部では、上部～中部に小礫が非常に多く混じる灰褐色砂質シルトの①層、溝底近くに灰褐色シルトと細砂・微細砂の薄いレンズ状ブロックが縞状に互層堆積する②層を確認できた（図19-６)。DS・DT-43区境界部のSD-11との分岐点では、上部に、径１～２㎜の角礫や細砂が多く混じる灰褐色砂質シルト①層と、細砂が非常に多く混じる灰褐色砂質シルトである②層がみられる。下部には、細砂および微細砂の薄いレンズ状ブロックを縞状に互層状態で含む灰褐色シルトの③層、灰褐色粘質シルトを主体とする④層が堆積する(図20-１)。

調査区中央のDV-43区のSD-25との合流点では、十

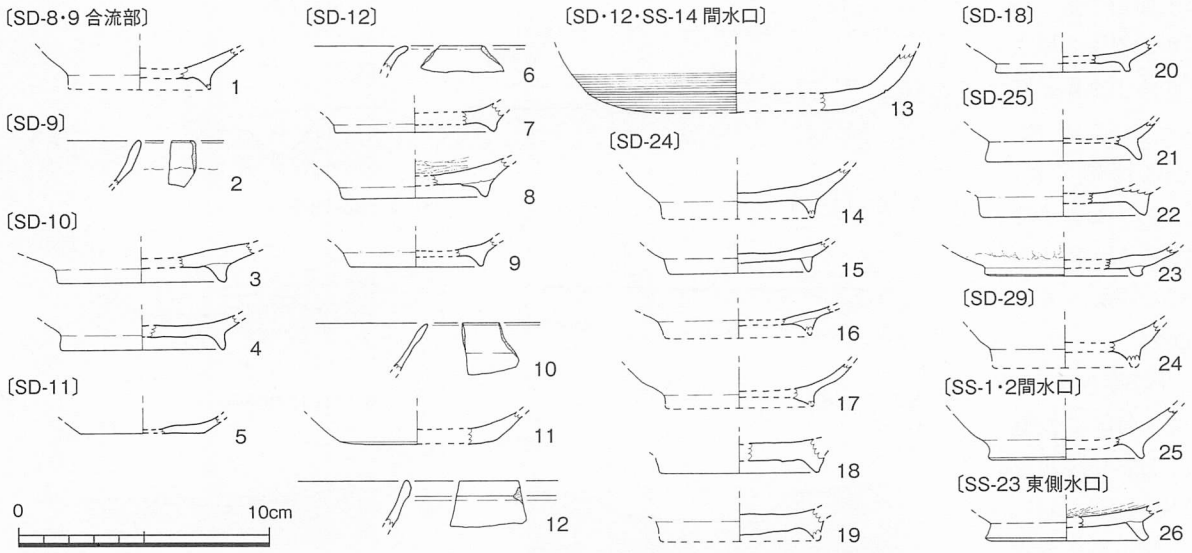


図21　A区Ⅱ-2-②（上層水田）層に伴う水路・水口出土遺物実測図（縮尺1/3）

字に土層観察用ベルトを残して、埋土を観察した。上部には径１㎜の砂礫が少量混じる暗灰黄色シルトの①層がレンズ状に堆積し、下部は溝底まで径１～２㎜の砂礫や小指先～親指先大の円礫が多く混じる暗灰黄色砂質土で埋まる（図19-７・８）。

DW・DX-43区境界部に設定した土層観察用ベルトでは、最上部ににぶい黄褐色粘質シルトブロックの①層、上部～中部に灰白色砂や小指先大の円礫、明黄褐色シルト小塊が混じり合うにぶい黄褐色砂質シルトの②層、溝底の一部に貼り付くように径0.5㎜の砂礫が多く混じる暗灰黄色砂質土がレンズ状に堆積する（図20-２）。西端のDY-43・44区のSD-24との合流地点では、溝底の標高がほとんど同じなので、配水の方向を確認するため、溝方向に平行する土層観察用ベルトを設定した。その結果、SD-12からSD-24へ向かって押し出されるように、明黄褐色シルト小塊が混じる黄褐色シルトの①層、径１㎜～小指先大の砂礫が多く混じる黄褐色砂質シルトの②層、砂礫が多く混じるが粘性がある黄褐色砂質シルトの③層、径１㎜～小指先大の砂礫が多く混じる黄褐色砂質シルトの④層が堆積している状況を観察できた（図20-３）。以上のSD-12を埋積する土層から、SD-12は東から西に向かって給水を行うことを主目的とする水路と考えた。

SD-12埋土からは土師器の椀（図21-６～９）などが出土している。また、SD-12・25の合流地点では土師器坏の底部片（図21-11）、土師器椀（図21-10）や白磁碗（図21-12）などが出土した。８は、高台を貼り付けるために、接合部に幅広の沈線を１条巡らす。焼成が不良で、器壁の芯部に灰黒色の黒化が残る。９は、内外面ともに黒色に焼き上がっているが、芯部から黒色が染み出しており、焼成不良の土師器と判断した。11の坏の外底面には、回転糸切り離し痕が残る。12は、小さな玉縁口縁の白磁碗で、内外面とも全面施釉。細かな貫入がみられる。13はSD-12・SS-14間水口から出土した底部破片。

SD-18

A区南部のDR-41～DX-42区で東西にのびる水路である（図版６-３）。DX-42区以西では検出できなかった。しかし、DY-42区南西部のSS-38の南側で、畦畔と考えられる東西に帯状に残るⅡ-２-②層下半と、その北側の窪みを確認できたので、この地点でSD-24と合流すると考えられる。また、DV-41区東端では、北側に小さく張り出す部分がある。この地点は、北からのびるSD-25の延長線上にあり、SD-18・25の分岐点である可能性が高い。このように総延長は34m以上となる。溝底の標高は26.52～26.58mであるが、かなりの凹凸があり、一定していない。溝幅は、DS-41区で55～65㎝、DT・DU-41区で65～106㎝、DV-41区では74㎝前後を測る。ただし、DW-41・42区では30～60㎝と細く浅くなる。SS-18が位置する付近は、水田面の報告でもふれたように、Ⅱ-２-①層がみられず、Ⅱ-１層の直下でⅡ-２-②層上半もしくは下半があらわれる。そのため、溝の上部はⅡ-１層の耕作によって削られているものと考えられる。

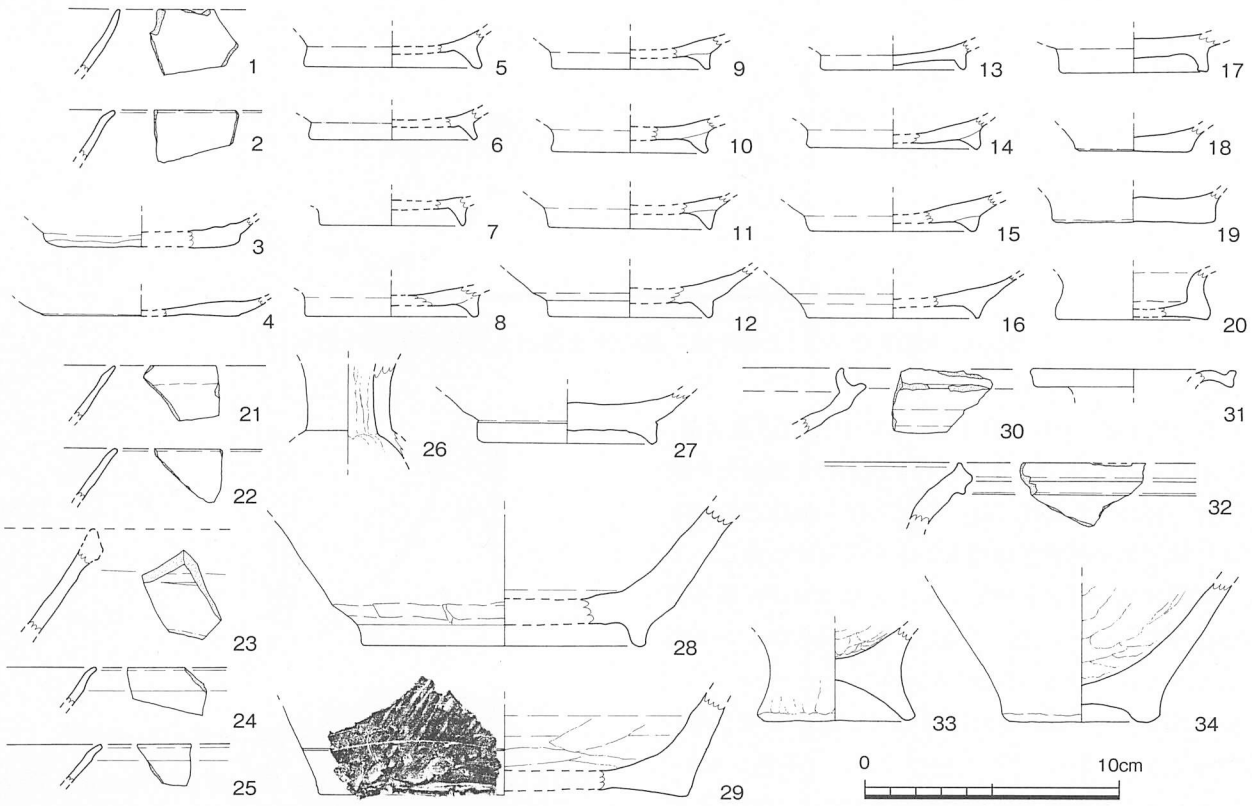


図22　A区Ⅱ-2-②（上層水田）層の耕作土出土遺物実測図（縮尺1/3）

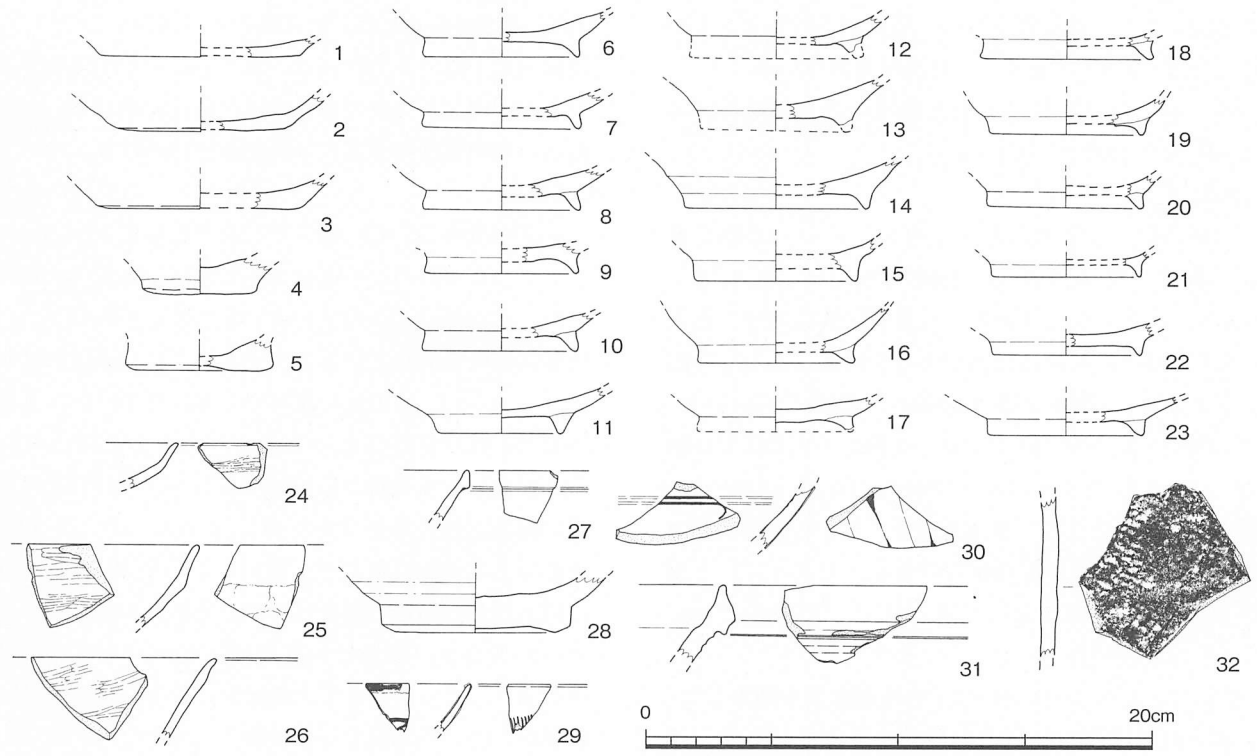


図23　A区Ⅱ-2-②（上層水田）層の畦畔部出土遺物実測図1（縮尺1/3）

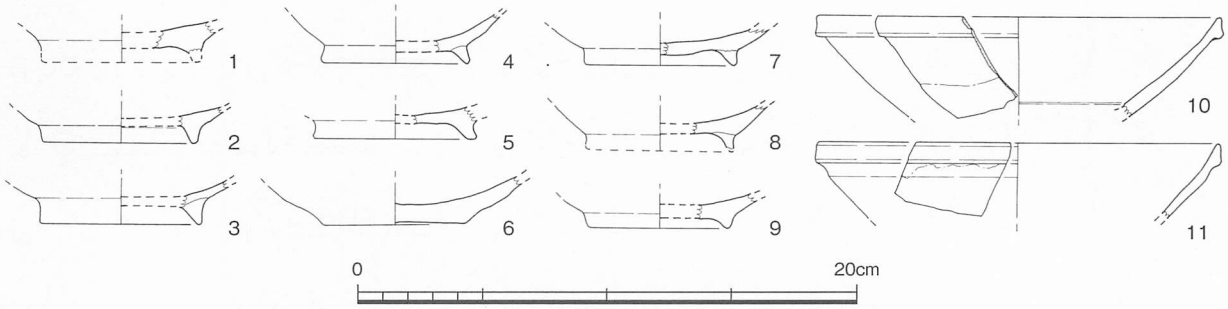


図24　A区Ⅱ-2-②（上層水田）層の床土層出土遺物実測図（縮尺1/3）

DT-41区東端、DV-41区中央、DV･DW-41区境界部、DW-41・42区西端部の計４ヶ所で埋土の土層断面を観察した。DT-41区東端では、上部に径１㎜ほどの砂礫が多く混じる暗灰黄色砂質シルトの①層が堆積し、下部の②層には暗灰黄色砂質シルトと基本層序Ⅳ層の明黄褐色砂質シルトが混じり合い、灰色細砂がレンズ状ブロックでみられる（図20- 4）。

DV-41区中央では、上部はオリーブ褐色シルトの①層で埋まり、中部～下部の②層はオリーブ褐色シルト・黄灰色シルト・明黄褐色砂質シルトが混じり合うとともに、径１㎜前後の砂礫のレンズ状ブロックがみられる（図20- 5）。DV・DW-41区境界部は黄灰色砂質シルトの①層（図20- 6）、DW-41・42区西端部はオリーブ褐色シルト・黄灰色シルト・明黄褐色砂質シルトが混じり合う①層（図20- 7）で埋積されている。

埋土中からは両黒の黒色土器埦の高台部破片（図21-20）などが出土している。

SD-24

Ａ区西部のDY-41～45区で南北にのびる水路である。前述したようにDY-45区でSD-10、DY-42区でSD-18と合流する。南北端とも調査区外にのび、出土したSD-24の総延長は19mである。溝底はかなりの凹凸があるが、南端で標高26.49m、北端で26.14mと、北に向かって次第に低くなる。北端のDY-45区では幅83～91㎝、深さ８～10㎝、中央のDW-43・44区では幅52～58㎝、深さ６～８㎝を測る。しかし、南半部のDY-42区では、水田面の報告でも述べたように、上面がⅡ-１層の耕作によって削られて、溝幅60～77㎝、深さ８㎝しか残存していない。

DY-42区北端でSD-24の埋土の堆積状況を観察した。上部～中部は径0.1㎜ほどの砂粒が多く混じり砂っぽい黄褐色砂質シルトの①層で埋まり、溝底には黄灰色砂質土がレンズ状に堆積する。流水の痕跡である（図20- 8）。

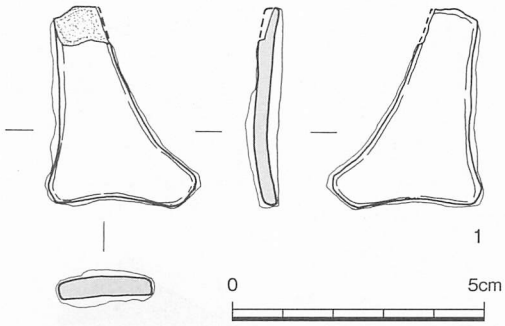


図25　A区Ⅱ-2-②（上層水田）層の畦畔部出土遺物実測図2（縮尺2/3）

埋土中からは、土師器埦（図21-14～17）や黒色土器埦（図21-18･19）の高台部破片などが出土している。18は内黒土器である。19は、黒色土器としてはかなり厚いが、内面が黒色であり内黒土器に分類した。土師器埦の15の器壁の芯部には灰色の黒化が残る。

SD-25

Ａ区中央のDV-42～44区で、南半部が緩やかに東にカーブしながらのびる南北方向の水路である（図版６- ４）。北端部はSD-10と合流すると考えられるが、合流部は攪乱で削れている。南端部のDV-42区以南は途切れているが、水田面の報告でもふれたように、上部のⅡ-１層の耕作によって削られたものと考えられる。ただし、延長線上に位置するSD-18のDV-41区東端で確認された小さな張り出し部分は、SD-25との合流点である可能性が高い。検出できたSD-24の総延長は11mほどである。溝底は、他の水路と同様に多くの凹凸があるが、南端での標高は26.46m、北端で26.24mを測り、北に向かって次第に低くなる。比較的遺存状態がよいDV-43区では、溝幅77～109㎝、深さ５㎝、DV-44区では幅89～97㎝、深さ６～７㎝を測る。

DV-43区のSD-12との合流点と、DV-44区南半部で

埋土を確認した。前者はSD-10で報告している（図19-７・８）。DV-44区南半部では、砂礫が多く混じる暗灰黄色砂質シルトの①層が堆積し、溝底に粘性が強い暗灰黄色砂質シルトの②層がレンズ状に堆積する。他の水路の埋土と比べて、それほど旺盛な流水は考えられない（図20-９）。

埋土下部から土師器埦（図21-21）や瓦器埦（図21-23）、溝底から土師器埦（図21-22）などが出土している。

SD-29

A区北西部のDY-44区で部分的に1.9mほど検出できた東西方向にのびる水路である。溝底の標高は26.32m前後で、溝幅50～57㎝、深さ７㎝前後が遺存する。埋土の特徴は、調査時に観察を怠ってしまった。

溝底から土師器の埦の高台部破片（図21-24）などが出土している。

３）小穴

この他、Ⅱ-２-②層上面では、砂礫混じりの灰黄褐色砂質シルトを埋土とする小穴SP-40～42を確認した。これらの埋土はⅡ-１層と共通するので、Ⅱ-２-②（上層水田）層に伴うものではない。巻末の遺構一覧表を参照されたい。

（２）水田耕作土・畦畔・床土出土の遺物

Ⅱ-２-②（上層水田）層から出土した遺物を報告するが、その中には、SS-４の耕作土層から砥部焼染め付け碗・白磁の口縁部破片が各１点、SS-38の床土層から近代の施釉陶器の胴部破片１点が含まれている。このことに遺物整理作業中に気がつき、出土位置などを再確認した。まず、SS-４は調査区東端の壁際近くに位置し、調査区壁からの落ち込みが考えられる。また、SS-38の遺物は床土層として取り上げていたが、この部分は本来耕作土層・床土層はなく、Ⅳ層上面に残された疑似畦畔で復元した水田区画であり、Ⅱ-１層の掘り残し部分からの出土である可能性が高い。以上から、上層水田の耕作土・床土層には近世～近代の遺物は包含されていないものと考える。

１）耕作土層出土の遺物

Ⅱ-２-②（上層水田）層の調査では、耕作土と床土部分を面的に区分できず、耕作土層～床土層として取り上げた遺物が含まれる（図22-１～34）。１～20は土師器。１・２は埦の口縁部片。３・４は坏の底部片で、３の外底面には回転糸切り離し痕が部分的に残る。５～17は埦の輪高台周辺の破片。７・13の底部の芯部には灰黒色ないし灰色の黒化層が部分的に残る。18は皿か。19は厚めの円盤高台をもつ埦で、外底面の切り離しは回転糸切りと考えられるが、判然としない。20は柱状高台土器である。21・22は両黒の黒色土器埦。23～25は白磁。23は碗の胴部破片で、玉縁口縁をもつと考えられる。胴部下半は露胎のまま。また、SS-14・17・20の耕作土層からも、白磁碗の胴部破片が各１点出土している。24・25は、傾きと器壁の薄さから、皿と考えた。26は須恵器の瓶の頸部～肩部の破片。27～29は須恵質土器の壺の底部片。29の外底面には、回転糸切り離し痕らしき痕跡がみられるが、判然としない。30～32は古墳後期の須恵器で、30は坏身、31は長頸壺、32は甕の口縁部片である。33・34は弥生土器の甕の底部片。34の器壁の芯部には、黒灰色の厚い黒化層が残る。30～34は混入品である。

２）畦畔部出土の遺物

土師器・黒色土器・白磁・青磁・須恵器・土師質土器・鉄器がある（図23・25）。図23-１～４は土師器坏。１の外底面には板状圧痕の痕跡がわずかに残り、４の外底面は回転糸切り離し。５は柱状高台土器の底部片。６～23は輪高台の埦の破片。15の内面は黒色であるが、黒変がそのまま残った土師器と判断。12・22の外底面には回転糸切り離し痕がみられる。20の内面は、二次的な火熱を受けて赤変。６の底部の芯部には淡い明灰色、22の器壁の芯部には黒色の黒化層が残る。

24は両黒の黒色土器皿、25は両黒、26は内黒の黒色土器埦である。27・28は白磁碗。図示した以外に、この他、SS-14・17間、SS-16・SD-18、SD-29・SS-30間の畦畔部から、白磁碗の胴部片が各１点出土。29は、同安窯系青磁の埦で、内外に黄緑色の釉を施すが、口縁部内面は重ね焼きのため、釉が一部剥げたり釉溜まりができている。胴部外面には櫛歯文、内面には沈線が一部残る。30は、龍泉窯系青磁の埦で、内外面にともにやや黄色みを帯びる緑色の釉を施す。外面には連弁文を削り出す。内面には１条の沈線文と、草花文の一部と考えられる文様をヘラ描きで施文する。31は、須恵器の甕の口縁部片で、混入品。32は、土師質土器の胴部片で、外面に格子文のタタキ目が残る。

図25-１は、3.9×2.9cmの三角形の鉄片で。厚さ４㎜を測り、片面がわずかにくぼむ。鉄器素材あるいは鉄器製作残滓の可能性を考えた。残存重量11.0ｇを測る。

３）床土層出土の遺物

出土した遺物は少ない（図24-１～11）。１～９は土師器埦。１の内面は黒変。６は底部側面に幅８㎜ほどの灰色の黒化層が輪状に巡る。高台部が接合面で剥がれたものである。７は高台部を接合する際に沈線を２条巡らし、接合しやすいように工夫している。底部には淡灰色の黒化層が部分的に残る。８も、胴部の器壁の一部に灰色の黒化層が残る。10･11は白磁碗である。10は、内面と外面胴部上半までは施釉。胴部下半外面は露胎のまま。11の玉縁口縁部には釉垂れがみられる。

４　Ⅱ-２-③層と出土遺物

Ⅱ-２-③層は、部分的に黄褐色砂質シルト、オリーブ褐色砂質シルト、灰黄褐色砂質シルトとなるが、砂礫が非常に多く混じる堆積土層である。A区東半～中央ではDR～DV-42区以北、西半ではDW～DX-43区以北、DY～DZ-44区以北に堆積し、検出面は調査区北東部に向かって緩やかに低くなる。SS-110の覆土部分などでは、粗砂や小礫からなる薄いラミナ層がみられる。しかし、こうしたラミナ層が多く見られるのは、SD-102沿いの南半部で、中央部や北半部へ向かうほどラミナの発達はみられない。また、SS-105の覆土は小石や礫・砂がとくに多く混じる。一旦SD-101から流水が流れ込んだ後、水田域全体に比較的緩やかに増水した結果、Ⅱ-２-③層が堆積したものと考える。上部のⅡ-２-②層下半（上層水田の床土層部分）と漸移的な部分があり、区分が曖昧になったとこともあるが、下部のⅡ-２-④（中層水田）層との層界は明確に区分できた。

Ⅱ-２-③層からは比較的多くの遺物が出土している。鉄器（図26-１・２）、土師器（図27-１～72）・黒色土器（図27-73～88）・白磁（図28-１～９）・緑釉陶器（図28-10）・須恵質土器（図28-11～16）・丸瓦（図28-22）の古代後半～中世の遺物と、古墳後期～奈良時代の須恵器（図28-17～21）、弥生土器（図28-23・24）、石器（図40-１）などがある。奈良時代以前の遺物は混入品である。

図26-１は、鉄刀子の破片。背関が部分的に残る。残存長3.2cm、幅1.3cm、厚さ３㎜を測る。刃部の断面は細長い二等辺三角形である。残存重量3.2ｇを測る。２は、先端部を欠くが、残存長4.8cmの鉄釘である。上端を0.7cmほど直角に折り曲げて釘頭とする。体部の断面は長方形で、最大幅1.2cm、最大厚５㎜を測る。先端に向けて幅が次第に狭く細くなる。残存重量9.9ｇを測る。

図27-１は土師器の皿、２～５も底径から皿と考えた。１の器壁の芯部には淡黒色の黒化層が残り、外底面は黒変したままである。２・３の外底面には回転糸切り離し痕が残る。６～18は埦の口縁部片。８は砂粒を含まない精選粘土を用い、内面に黒斑が生じている。９・11・12は、胎土は砂礫がほとんど混じらない精選粘土を用いている。９は比較的厚でのつくりであるが、11・12は薄でのつくりである。11の内面には、明赤褐色の肌理の細かい化粧土が部分的に残る。15は、内外面とも二次的な火熱を受けて赤変する。19～26は底径から坏の底部片と考えた。21の外底面には回転糸切り離し痕が残る。23・24は、外底面を糸切り離ししていると考えられるが、判然としない。26の底部の芯部には淡黒色の黒化層が残る。27～65は輪高台をもつ埦の破片である。50は、SS-109・110間北側水口の埋土か

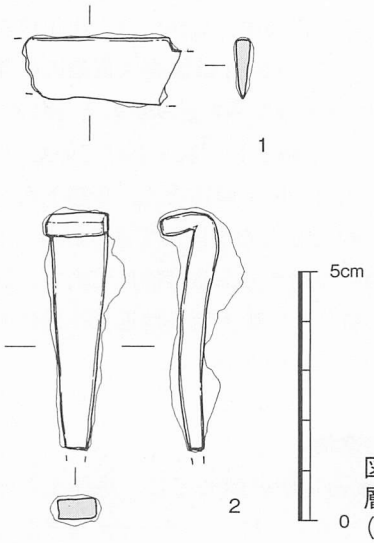


図26　A区Ⅱ-2-③層出土遺物実測図1（縮尺2/3）

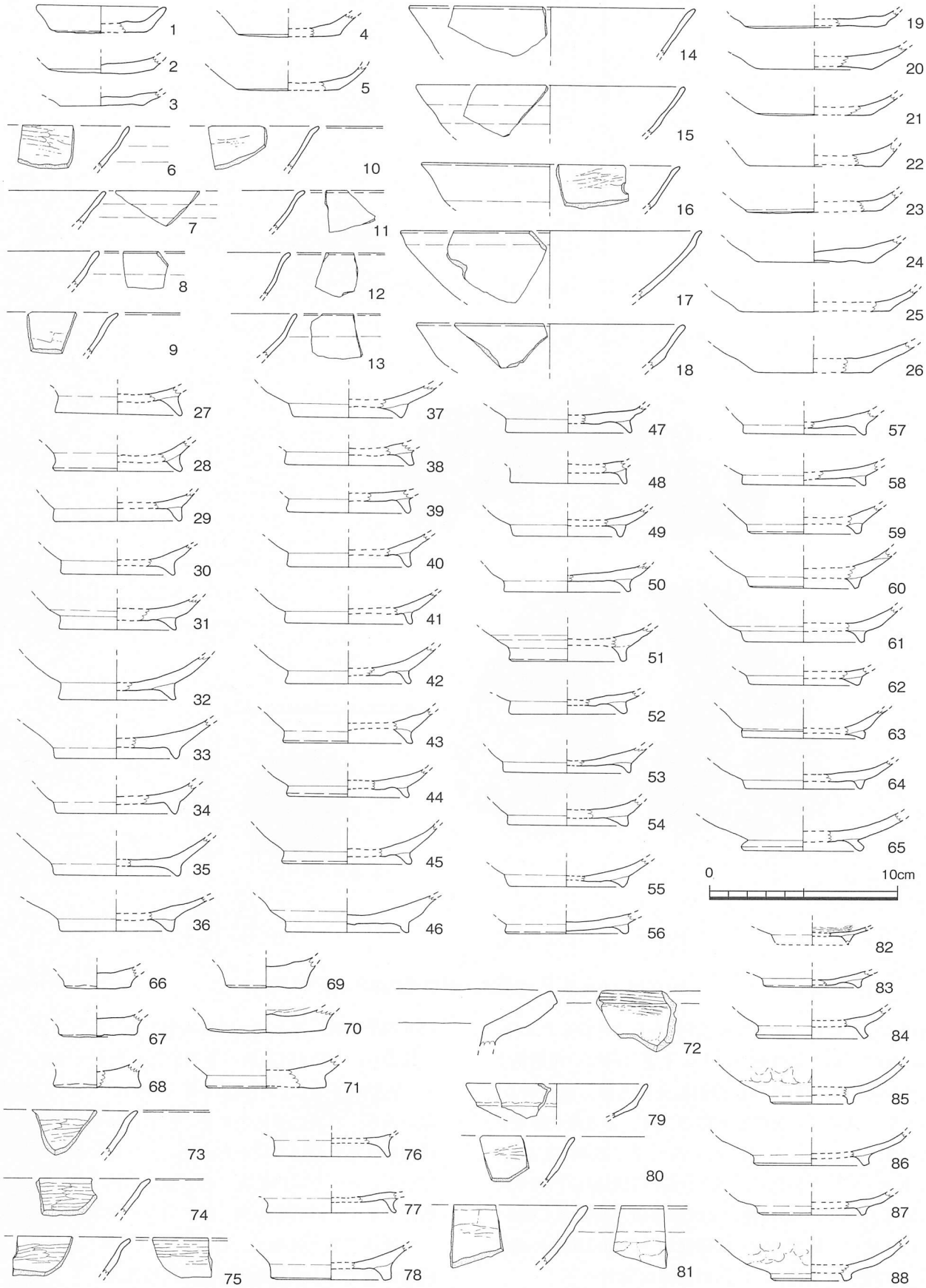


図27　A区Ⅱ-2-③層出土遺物実測図2（縮尺1/3）

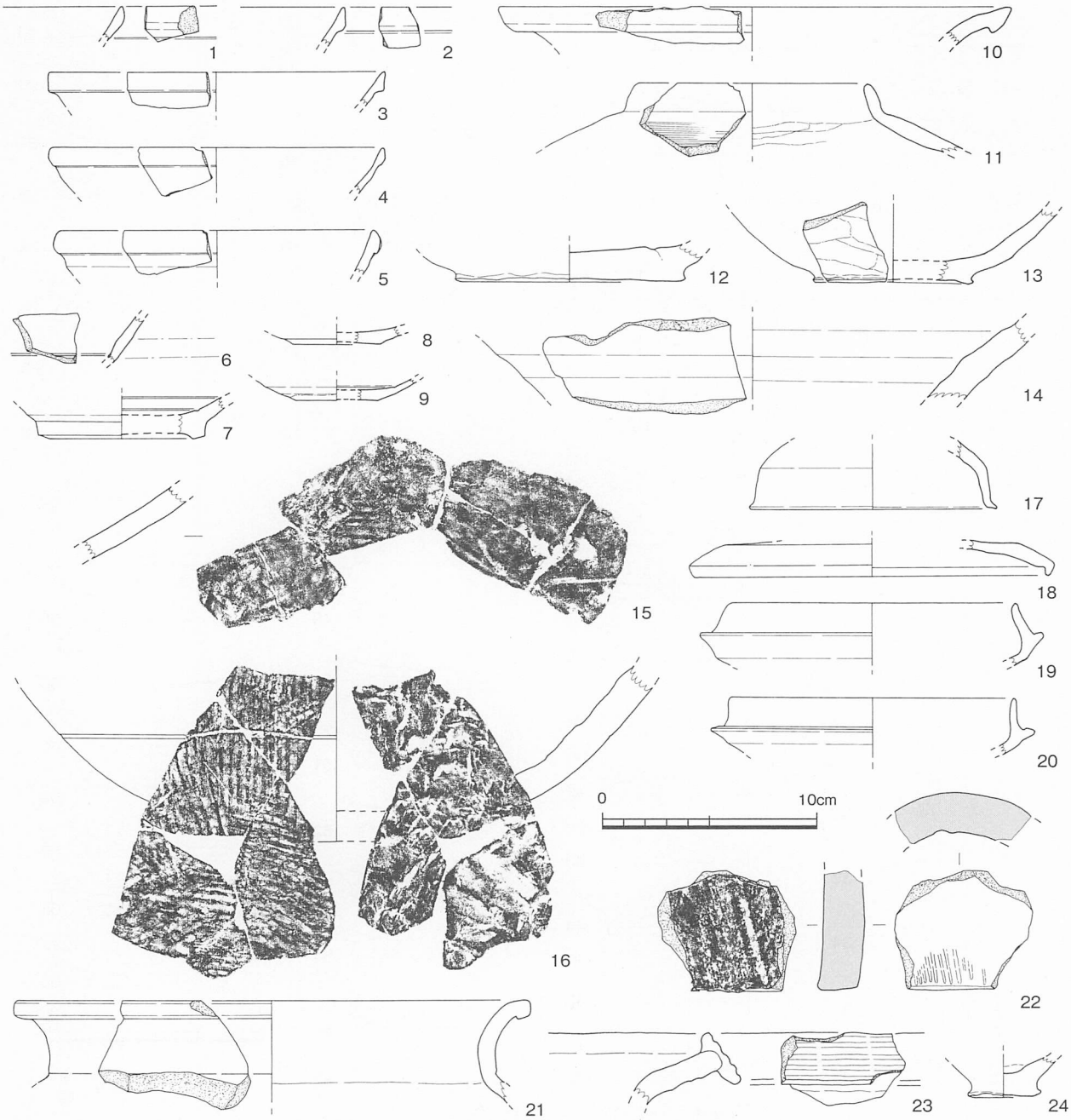


図28　A区Ⅱ-2-③層出土遺物実測図3（縮尺1/3）

ら出土した破片と接合する。27の内面は黒変したまま。34・50は、胎土に砂粒がほとんど混じらない精選粘土を用いる。46の外底面には回転糸切り離し痕が残る。39・55・56は、二次的な火熱を受け、器表面が赤変する。40・48・54・57・60・61の高台部や器壁の芯部に、淡黒色、灰色の黒化層が残る。66～71は厚い円盤状の高台をもつ。66の外底面には回転糸切り離し痕が残る。72は土鍋の口縁部片で、口縁端面～外面は刷毛目調整の後に横ナデを施す。内面は乱雑な横ナデ。

73～88は黒色土器で、73～75・77・78は内黒の椀、79は両黒の皿、76・80～88は両黒の椀である。

図28-１～７は白磁碗。６の外面は回転ヘラケズリで、露胎のまま。７の見込み部分に幅が一定しない沈線が巡る。外面は露胎のまま、内面は施釉。１は、二次的な火熱を受けているためか、くすんだ釉色となっている。８・９は白磁皿。８の胎は白色。外底面は露胎のままで、以外は施釉。胎の質から攪乱による混入の可能性を考えておく。９の外面は回転ヘラケズリ。内面は横ナデ。外底面周辺は露胎のまま。

10は緑釉陶器。釉色は濃青緑色。11～16は須恵質土

器。14～16は壺の底部片で、同一個体の可能性が高い。15の破片には、DT-41区SS-17・SD-16間畦畔部、DW-44区SS-26耕作土層から出土した破片が接合する。また、16には、DV-43区や上層水田のSS-22西側畦畔部から出土した破片が接合する。

17～19は須恵器で、17は短頸壺の蓋、18は坏蓋、19・20は坏身である。22は丸瓦の端部の破片。凸面の端部近くには平行条線のタタキ目が部分的に残る。凹面には平織りの布の圧痕が残る。

23・24は弥生土器。23は口縁端に粘土を貼り付けて上下に拡張し、端面に４条の沈線状の凹線文を巡らす。24は手捏ねの小型鉢と考えた。

図40-１は、サヌカイトの打製石鏃で、基部を欠損する。現存重量1.2ｇを測る。

5　Ⅱ-２-④（中層水田）層の遺構と遺物

Ⅱ-２-④（中層水田）層は褐色シルトないし暗灰黄色砂質土が混じる土層で、DR～DV-42区以北、西半ではDW～DX-43区以北、DY～DZ-44区以北の調査区北東のやや低くなった部分を中心として広がる。上部に堆積する、砂礫が多く混じるⅡ-２-③層とは比較的容易に区分できた。

また、Ⅱ-２-④層の上半は、粘性が強く土壌化が進んでいる。下半には砂が混じり、やや粘性が弱くなる。上半を耕作土層、下半を床土層として調査したが、平面的に区分することは困難で、調査区東壁沿いに設けた深掘りトレンチや攪乱溝の壁面で確認できた上半と下半の区分を参考としながら、上半の耕作土層と下半の床土層を掘り分けながら、精査に努めた。しかし、区分が混乱した時もあり、耕作土層下部～床土層として取り上げた出土遺物も多くなった。

（１）遺構

Ⅱ-２-④層上面では、畦畔で区画されたSS-105～113・115～118の水田面、これに伴うSD-101～104・114・119・120・122が出土した（図版９、10-１）。SX-121は埋積土層の観察から水溜遺構と考えた。SK-123はSS-105の水口底面からSD-122溝底に接するように掘り込まれている。SS-105の水口に関連する土壙である。また、調査区南西部のDV・DW-41・42区、DX～DZ-41～44区の微高地上では犂によると考えられる耕作痕跡が検出できた。

１）水田

SS-105～113・115～118の計13枚の水田面が出土した。水田面は北東に向かって緩やかに傾斜し、東西に走るSD-102・103を境として８cmほどの段差が設けられている。水田を区画する基軸となる畦畔は、南北方向に走るSD-101～103沿いに設けられた畦畔で、南北方向にのびる畦畔で小さく区画される。畦畔はいずれもⅡ-２-④層下半の砂混じりでやや粘性が弱い褐色シルトを削り出して造られている。

SS-105

Ａ区南東のDT-42・43に位置する。南北2.0～2.15m、東西2.25mの方形を呈し、水田面の標高は26.28m前後を測る。水田面にはⅡ-２-③層で埋まった凹凸がみられるが、耕起痕や足跡と確実に判断できるものはない。SS-105は、南北1.8m、東西2.35mほどの不整長方形を呈する。北側のSD-102とを区画する畦畔は、幅50～56cm、高さ２cm。南側のSD-101とを区画する畦畔は、幅58～68cm、高さ６～８cm。西側のSD-122とを区画する畦畔は、幅55cm前後、高さ２～４cmを測る。いずれもⅡ-２-④層下半を削り出して造られている。

南東部・北部・北西部の３ヶ所で畦畔が途切れる部分があり、水口と考えた。南東部の水口は、東側からのびてきたSD-114がSD-101と合流する地点に設けられている。幅37cm、深さ14cmを測り、底面はSD-101・114合流点に向かって低くなる。SD-101埋土上半部と同じく、径１mm～小指先大の砂礫が多く混じる灰黄褐色砂質シルトで埋まっている。北側のSD-102とを区画する畦畔に設けられた水口は、幅48cm前後、深さ２～６cmと、底面はSD-102に向かって低くなる。砂礫が混じるにぶい黄褐色～黄褐色の砂質シルトで埋まる。直径0.1～３mm前後の白色砂粒を多く含む。北東隅のSD-122とを区画する畦畔に設けられた水口は、幅75cm、深さ２cmを測り、水口西半からSD-122にかかる場所にSK-123が掘り込まれている。埋土はきめの細かい細砂が多く混じる灰白色砂質土である。以上の３ヶ所の水口では、埋土の観察から配水方向を確認

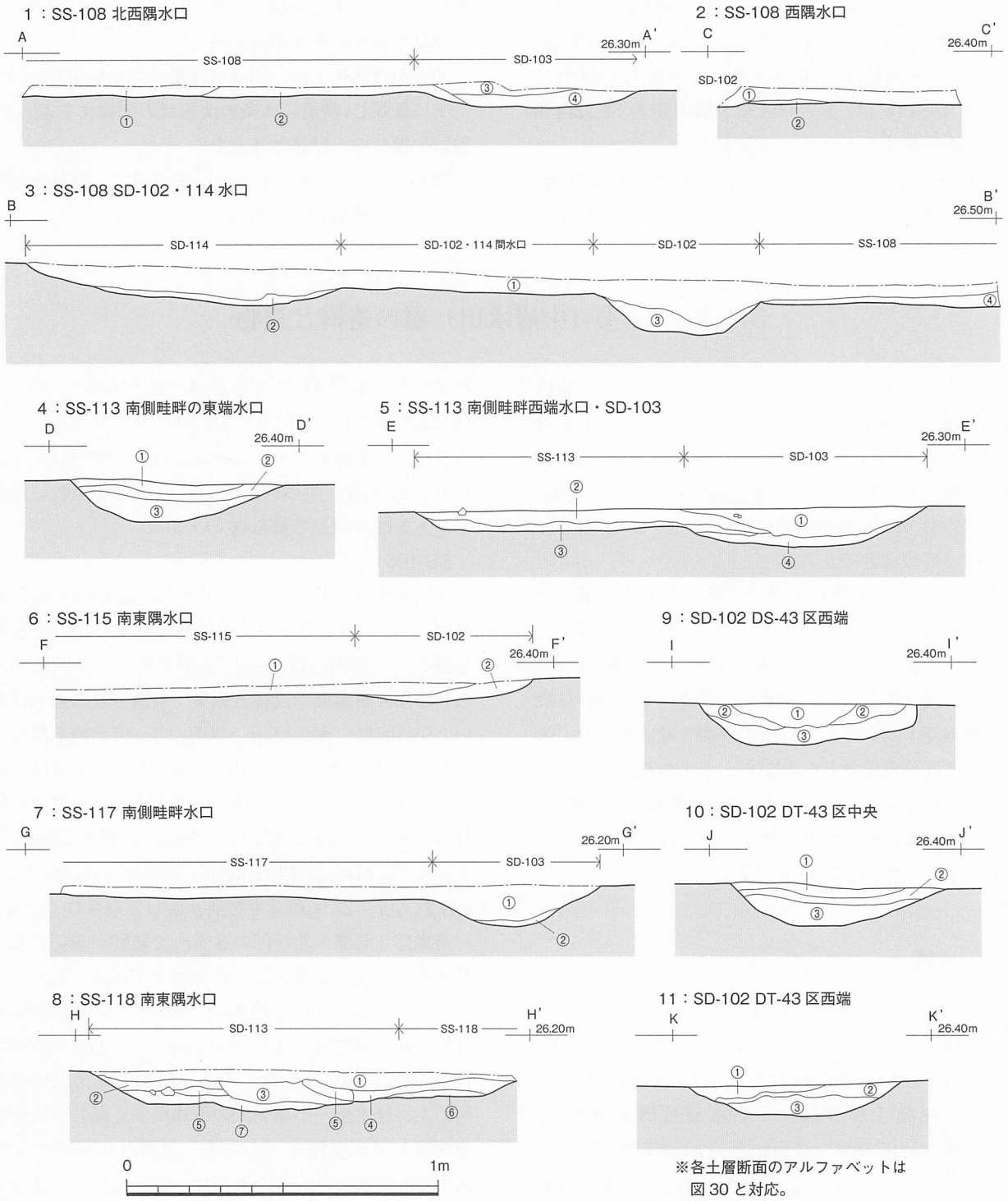


図29　A区Ⅱ-2-④（中層水田）層に伴う水口部分の土層断面図1（縮尺1/20）

できなかった。しかし、後述するように、SS-105南側のSD-101でもDT-42区付近に堰を想定することができれば、南東側の水口から給水して、北部の水口からSD-102へ、北西部の水口からSD-122を介してSS-106へ配水することが考えられる。

SS-105・SD-101間畦畔から土師器坏（図38- 8）、床土層から土師器埦（図39-20）などが出土している。床土層から出土した土師器皿の破片の中には、接合できないが、SS-108床土層下部出土の破片（図39- 4）と同一個体と考えられるものが含まれる。

SS-106

A区中央東よりのDT～DV-42・43区で出土した。

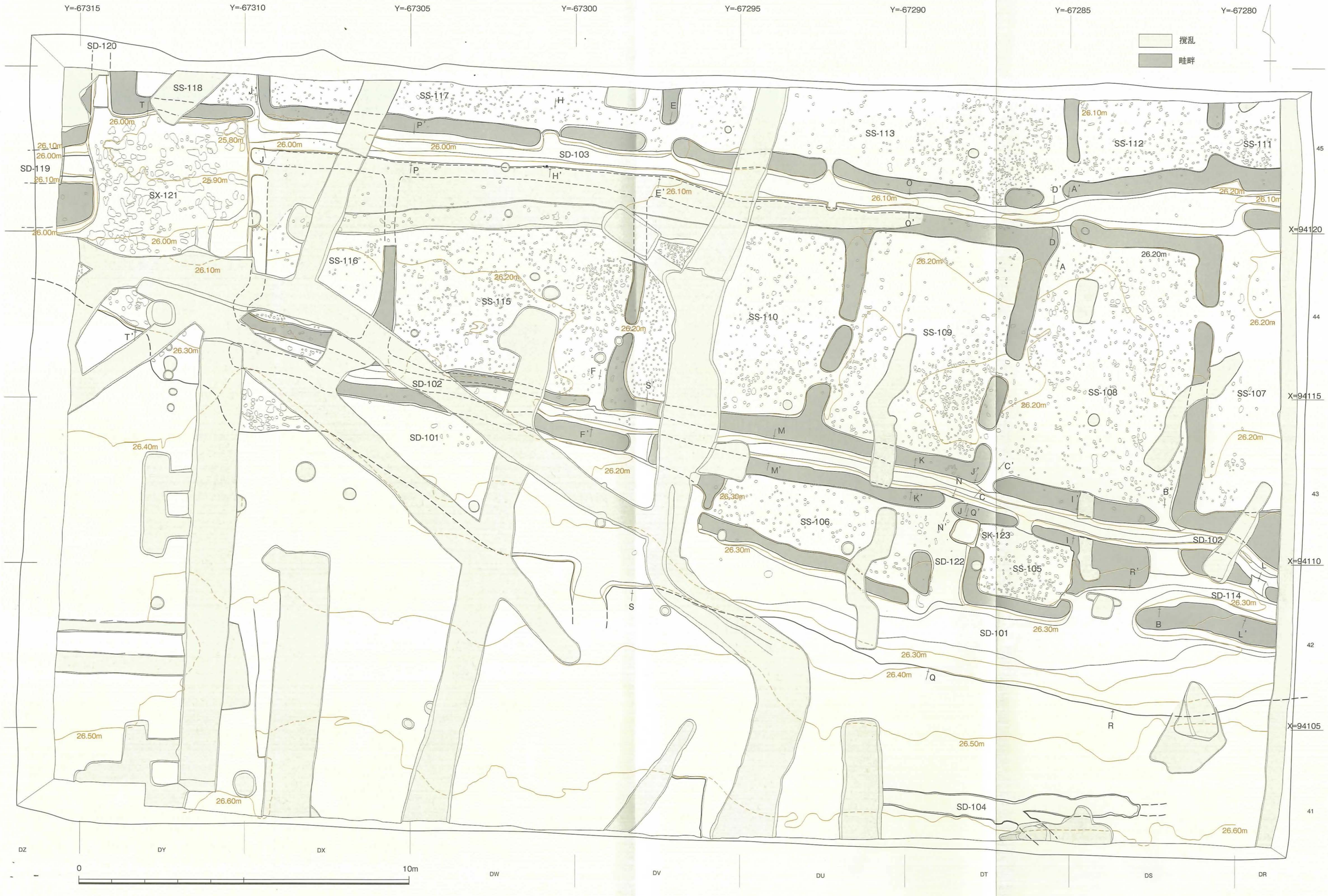


図30　A区Ⅱ-2-④（中層水田）層遺構配置図（縮尺1/100）

南北1.6～2.5m、東西6.3mの東西に細長い不整長方形の水田面である。北西部の畦畔が一部破壊されている。水田面の標高は26.26～26.28mで、東側のSS-105の水田面とほぼ共通する。水田面には凹凸があり、人間の足跡と考えられる窪みも含まれる。畦畔は、いずれもⅡ-２-④層下半を削り出して造られている。東側のSD-122とを区画する畦畔は、幅69～74cm、高さ５cm前後。北側のSD-102とを区画する畦畔は、幅65～68cm、高さ２cm前後。南側のSD-101とを区画する畦畔は、幅52～75cm、高さ６～８cm。西側畦畔は、島状にⅡ-２-④層下半を削り出して、南端をわずかに張り出させる。高さ４cm前後を測る。

SD-122とを区画する畦畔の南北端２ヶ所と、西南端のSD-101との連接部に１ヶ所、計３ヶ所の水口を確認した。SD-122とを区画する畦畔の南端の水口は幅25cmを測る。これに対して、北端の水口は幅1.37mと、幅が広い。何度か水口が切り直されていることが考えられる。水口部の底面は、SD-122の溝底と同じか、２～４cm高いだけである。ともに、水口を埋める堆積土層は、SD-101埋土上半部と同じく、径１mm～小指先大の砂礫が多く混じる灰黄褐色砂質シルトである。西南端の水口は、幅18cmで、SD-101に向かって４cmほど低くなる。埋土は細砂や小礫が多く混じる灰色シルトである。

SD-122とを区画する畦畔南端に設けられた水口から、土師器の柱状高台土器（図35-19）が出土。耕作土層からは土師器椀（図37-21）、SS-106・SD-101間畦畔から土師器椀（図38-18）や内黒の黒色土器椀（図38-32）、SS-106とSD-102・122間の畦畔から土師器椀（図38-14・15・19・29）、弥生土器の壺の底部片（図38-37）、床土層から土師器皿（図39-２）など、比較的多くの遺物が出土している。

SS-107

A区東端のDR・DS-43～45区で出土した。水田面は南北8.5mを測り、東側は調査区外にのび、東西2.75m以上を検出した。水田面の標高は26.20～26.25mで、北に向かってわずかに低くなる。水田面には凹凸が残るが、確実に耕起痕や足跡と考えられる窪みはみられない。北側のSD-103とを区画する畦畔は、幅75cm前後、高さ２cm前後を測る。南側のSD-102とを区画する畦畔は、西端で幅63cmと狭いが、東側は島状に広くなり、２mほどの幅を持つ。水田面からの高さ２cmほどが遺在する。西隣のSS-108とを区画する畦畔は、幅50～70cm、高さ２～４cmを測る。いずれもⅡ-２-④層下半を削り出している。

北西隅と西側のSS-108とを区画する畦畔で水口を検出した。北西隅の水口は、幅90cmで、SD-102に向かって６cmほど急に低くなる。埋積状況を観察しなかったが、SD-102への排水を目的とする畦畔と考える。SS-108とを区画する畦畔に設けられている水口は、上層に堆積したⅡ-２-③層の砂礫層で埋まっていた。幅50cm前後で、SS-107・108の水田面と同じ高さである。

耕作土層から土師器椀（図37-35）、SS-107・108間畦畔から土師器皿（図38-１）、SD-103・SS-107間畦畔から土師器椀（図38-９）や土鍋片（図38-31）、床土層から土師器椀（図39-17）、両黒の黒色土器椀（図39-40）、須恵器の短頸壺の蓋（図39-45）などが出土している。

SS-108

A区東半部のDS・DT-43・44区に位置する。水田面は不整な台形で、南北7.4～7.75m、東西4.3～5.7mを測る。水田面は南から北へ向かってわずかに低くなり、標高は26.18～26.24mを測る。南側のSS-105水田面と比べると６cmほど低く、東隣のSS-107とはほぼ同じである。水田面には凹凸が多く残るが、耕作痕や足跡と考えられる窪みはみあたらない。東側のSS-107とを区画する畦畔は幅50～70cm。北側のSD-103とを区画する畦畔は、幅49～60cm、高さ２～３cm。南側のSD-102とを区画する畦畔は、幅60～70cm、高さ４cm前後。西隣のSS-109とを区画する畦畔は、幅66～70cm、高さ３～４cmを測る。

東側畦畔、北西隅で各１ヶ所、西側畦畔の南半部で２ヶ所、南側畦畔の東西端で２ヶ所、の計６ヶ所で水口を確認した。東側畦畔の水口は、SS-107で報告した。北西隅の水口は、幅38～40cmで、底面は水田面とほぼ同じ高さである。SD-103との関係を把握するために、水口の縦断方向の土層断面を観察した（図29-１）。水田面上には、微細砂・小礫の薄いレンズ状ブロックが多くみられる砂礫混じり粘質シルトの①層が堆積する。Ⅱ-２-④層上面を覆うⅡ-２-③層に対応する。水口部分には、微細砂が混じる粘質シルトの②層がみられ、これがSD-103の下底面に落ち込む。SD-103部分は、上半部にⅡ-２-③層に対応する微細砂・小礫の薄いレンズ状ブロックがみられる砂礫混じり粘質シルトの③層、下部～溝底には細砂の薄いレンズ状ブロックがみられる灰色シルトの④層が堆積する。以上

の埋積状況から、SS-108の溝底面に④層が堆積する以前に、一時的に畦畔を切って設けられた水口と考えた。

西側畦畔南半部の２ヶ所の内、ほぼ中央部に位置する水口は幅65cmで、南よりの水口は幅50cmを測る。ともに、水田面であるⅡ-２-④層上面を覆うⅡ-２-③層で埋もれ、水口底面はSS-108・109の水田面と同じである。SS-109の水田面がわずかであるが、SS-108よりも低いことから、SS-108からSS-109への配水が考えられる。

南側畦畔の東端の水口は、水田面南東隅に設けられたもので、幅45cm、深さ４～５cmを測り、Ⅱ-２-③層にあたる砂礫混じりの灰黄褐色砂質シルトで埋まっていた（図29-３）。西端の水田面南西隅に設けられた水口は、幅40cm、深さ５cmで、Ⅱ-２-③層にあたる灰白色の砂礫が多く混じるにぶい黄褐色砂質シルトの①層で埋まるが、SD-102側からSS-108に向かって流れ込んだようにレンズ状に堆積する褐色砂質土の②層を確認できた。SD-102からSS-108への給水を目的とする水口と考えた（図29-２）。

耕作土層から土師器の土鍋片（図37-45）、両黒の黒色土器椀（図37-48・49）、白磁碗（図37-52）、須恵器の壺（図37-54）、丸瓦片（図37-55）、磨製石庖丁（図40-３）、SD-102・SS-108・109間畦畔から土師器椀の高台部破片（図38-16）、SS-108・109間畦畔から土師器椀の高台部破片（図38-26）、瓦器椀（図38-35）、床土層から土師器皿（図39-１・４）、坏の底部破片（図39-12）、土師器椀の高台部片（図39-14・22・24・27）、須恵質土器の壺（図39-42）、須恵器の胴部破片（図39-46）、弥生土器の脚付き鉢（図39-47）や壺（図39-49）の破片など、比較的多くの遺物が出土している。

SS-109

Ａ区北東部のDT・DU-43・44区に位置する。南北6.2～6.55m、東西4.45～4.65mを測る不整長方形の水田区画である。水田面の標高は26.20m前後とほぼ平坦で、南側のSS-106の水田面より６cmほど低く、西隣のSS-110よりも２cmほど高いが、東隣のSS-108とはほぼ同じ水田面の標高である。水田面には、南半部を中心として、凹凸が多く残るが、確実に耕起痕や足跡と考えられる窪みは確認できなかった。東隣のSS-109とを区画する畦畔は幅66～70cm。北側のSD-103とを区画する畦畔は、幅65～85cm、高さ２cm。南側のSD-102とを区画する畦畔は、幅70cm前後、高さ４cm。西隣のSS-110とを区画する畦畔は、幅60～72cm、高さ２～３cmを測る。いずれも床土層にあたるⅡ-２-④層下半を削り出した畦畔である。

東西の畦畔には、それぞれ２ヶ所で途切れ部分を確認した。水口である。東側畦畔に設けられた水口についてはSS-108で報告したように、上部に堆積したⅡ-２-③層で埋積され、水口底面はSS-108・109の水田面と同じである。西側のSS-110とを区画する畦畔のほぼ中央を切った水口は幅20cm、南部に設けられた水口は幅40cmで、水口部底面とSS-109・110水田面とはほとんどかわらず、Ⅱ-２-③層で埋積されている。わずかであるが水田面の標高差があることから、SS-109からSS-110への配水を考えておきたい。

SS-109・110間中央水口埋土からSS-115上面砂礫層出土の土師器椀（図27-50）と接合する破片が出土している。また、耕作土層からは、土師器皿（図37-３）、坏（図37-７・８）、椀（図37-12・13・36・41・43）、両黒の黒色土器椀（図37-50）、須恵器（図37-53）の破片、SD-102・SS-109間畦畔からは土師器皿（図38-７）、床土層からは土師器皿（図39-３）、椀（図39-６・８・９・11・23・28・30・33）、土師器の高坏（図39-43）、弥生土器の壺（図39-48）が出土している。

SS-110

Ａ区中央北よりのDU・DV-43～45区に位置する。北西隅の畦畔が上部からの削平で失われているが、南北5.6～5.7m、東西5.55～6.0mの不整方形を呈する。水田面の標高は26.18～26.20mで、西半部がわずかに低くなる。水田面には、西半部を中心として凹凸が多く残るが、耕起痕や足跡と確定できる窪みはない。東隣のSS-109とを区画する畦畔は幅60～72cm、北側のSD-103とを区画する畦畔は幅1.0～1.04m、南側のSD-102とを区画する畦畔は幅55～93cm、西隣のSS-115とを区画する畦畔は幅40～57cmを測り、水田面から２～５cmの高まりである。

東側のSS-109とを区画する畦畔で２ヶ所、西側のSS-115とを区画する畦畔で１ヶ所、計３ヶ所の水口を確認した。東側畦畔の水口はSS-109で報告したが、西側畦畔の水口は幅30cm前後で、水口底面の高さはSS-110・115の水田面とかわらず、上部に堆積したⅡ-２-③層で埋積されている。

SD-103・SS-110間畦畔から土師器椀の高台部破片（図38-24・27）、SS-110・115間畦畔から土師器椀の高台部破片（図38-25）が出土。また、耕作土～床土層から出土した土師器椀の破片が、SD-103・SS-117間畦畔

出土の破片（図38-28）と接合する。また、床土層からは、土師器の皿（図39-16）、埦（図39-５・25）、瓦器埦（図39-41）の破片や、円柱状の砂岩塊を利用した敲打具（図40-４）が出土している。

SS-111

Ａ区北東隅のDR・DS-45区に位置する。東側と北側の水田面は調査区外にのびるが、正方形または長方形の水田面と考えられる。検出した水田面は南北2.05m、東西2.3mで、標高26.12m前後と平坦で、南側のSS-107よりも８cmほど低い。水田面には多くの凹凸が残る。耕起痕や足跡と考えられる窪みもあるようだが、判然としない。南側のSD-103とを区画する畦畔は幅80cm前後で、上半は上層のⅡ-２-②（上層水田）層で削れているが、もともとは８～10cm近い高まりであったと推測される。西隣のSS-112とを区画する畦畔は、幅50～53cm、高さ２cmほどを測る。

西側畦畔の南端で幅80cmの水口部を確認できた。水口底面はSS-111・112の水田面とほとんど同じ高さで、上部に堆積するⅡ-２-③層で埋積されている。

SS-112

Ａ区北東部のDS-45区に位置する。北側は調査区外にのび、東西3.9m、南北2.5m以上の長方形もしくは方形の水田面である。水田面の標高は26.10～26.14mで、北西に向けてわずかに低くなる。水田面には多くの凹凸が残る。人間の足跡と考えられる窪みがあるが、歩行の方向性は認められない。東隣のSS-111とを区画する畦畔は幅50～53cm、南側のSD-103とを区画する畦畔は幅52～74cm、東側のSS-113とを区画する畦畔は幅32～45cmを測り、水田面から２～４cmの高まりである。

東西２ヶ所で水口を確認した。東側畦畔の水口はSS-111で報告した。西側畦畔の水口は幅57cmほどで、東側畦畔の水口と同じく、底面は水田面の標高とほとんどかわらず、Ⅱ-２-③層で埋積されている。

耕作土層から土師器皿の底部片（図37-６）や埦の高台部の破片（図37-25）、床土層から弥生土器の壺の破片（図39-51）などが出土している。

SS-113

Ａ区北壁沿いの西よりのDT～DV-45区に位置する。北側は調査区外にのび、東西11.8m、南北2.78m以上の長方形の水田面である。水田面の標高は26.09～26.15mで、西側に向かって緩やかに傾斜する。水田面に残された凹凸は、東半部のDT-45区に偏ってみられ、後述するようにDU-45区で南側畦畔に水口が切られていることから、簡易な小畦畔で小さく区画された可能性もある。しかし、そうした痕跡は、調査時には確認できなかった。東側のSS-112とを区画する畦畔は幅2～45cm、南隣のSD-103とを区画する畦畔は幅48～76cm、西隣のSS-117を区画する畦畔は幅55～60cmを測り、水田面から２cmほどの高まりである。

東隣のSS-112とを区画する東側畦畔で１ヶ所、南側のSD-103とを区画する南側畦畔で４ヶ所の水口を確認した。東側畦畔の水口についてはSS-112で報告している。南側畦畔の東端に設けられた水口は、幅62cmで、底面はSS-113水田面と同じ高さである。SS-113の水田面を覆う微細砂の塊状ブロックが多く混じる灰色砂質土の②層で埋まっている（図29-４）。南側のSD-103最上部に堆積する①層とほぼ同じ土質・土色であり、Ⅱ-２-③層に対応する。

東端水口から1.2m西へ離れて設けられた水口は、幅83cmで、底面はSS-113とかわらず、Ⅱ-２-③層で埋積されている。

DU-45区に設けられた水口は、幅30cm前後、底面はSD-103へ向かって５cmほど急に深くなる。他の水口とおなじく、Ⅱ-２-③層で埋積されている。

南側畦畔の西端に設けられた水口は、SS-113・117とSD-103を繋ぐ。幅85cm。底面はSS-117、そしてSD-103へ向かって緩やかに低くなる。南北方向の土層断面を観察すると、上半には、Ⅱ-２-③層に対応するにぶい黄褐色シルト小塊や砂礫が多く混じる褐灰色粗砂質土の①層や、砂礫混じりの灰黄褐色砂質シルトの②層が堆積する。下半でも水口部底面近くには、部分的に黄褐色シルトが混じる褐灰色シルトの③層、SD-103溝底ににぶい黄褐色シルトと褐灰色砂質土が薄い縞状に互層堆積する④層がみられる。③・④層は中層水田が利用されている過程で堆積した土層と考えられ、③層がSS-113からSD-103へ、さらにSD-103からSS-117へ向かって広がることから、SS-113からSS-117へ、そしてSD-103からSS-117への給水を目的とする水口と考えた（図29-５）。

耕作土層から土師器埦（図37-27・31・38・40）や両黒の黒色土器埦（図37-51）、SD-103・SS-113間畦畔からは土師器坏（図38-６）、床土層からは土師器埦（図39-７・29・32）や内黒の黒色土器埦（図39-38）などが出土している。

SS-115

A区北西部のDV～DX-43～45区で出土した。水田面の北半部は、上部のⅡ-2-③（上層水田）層の耕作で削れている。また、南側畦畔のDW-44区西半の一部を誤って掘り下げてしまった。東西6.6～7.2mを測り、南北は6m前後の不整方形の水田面と推定される。水田面の標高は26.18～26.20mで、西隣のSS-110水田面とほぼ共通し、南半部がわずかに低くなる。水田面には、東半部を中心として多くの凹凸が残されているが、耕起痕や足跡と確実に判断できた窪みはない。東隣のSS-110とを区画する畦畔は幅40～57cm、南側のSD-102とを区画する畦畔は幅43～50cm、西隣のSS-116とを区画する畦畔は幅39～80cmを測り、3～4cmの高まりをもつ。

東隣のSS-110とを区画する東側畦畔で水口を確認した。これについてはSS-110で報告している。加えて、南東隅の東側と南側の畦畔が接する部分でも水口を検出した。土層断面を観察すると、SD-102の溝底には灰色細砂の薄いレンズ状ブロックが縞状に互層堆積する②層がみられるが、その上面から水口部、そしてSS-115水田面は細砂の薄いブロックが多く混じる灰色砂質シルトの①層で埋まっている。土質の共通性から、①層は中層水田を覆うⅡ-2-③層に対応する堆積土層と判断した（図29-6）。

耕作土層や床土層から土師器の皿（図37-5）、坏（図37-9～11）や埦（図37-14・15・20・23・28・30・32・33・37・39・42・44）、内黒の黒色土器埦（図37-46）、SS-115・116間畦畔から土師器埦（図38-20・22・23）、床土層からは土師器坏（図39-13）や埦（図39-19・21・26・31・34）、皿（図39-15）、そして内黒の黒色土器埦（図39-37・39）などの比較的多くの破片が出土している。また、耕作土層から弥生土器の壺の破片は、DT-43区中層水田上砂礫層や、SD-122・SS-106間畦畔出土の破片と接合する（図38-37）。

SS-116

A区北西部のDX-44・45区では、塹壕である攪乱溝や、上部のⅡ-2-③（上層水田）層の耕作の削平が著しいが、東隣のSS-115とを区画する南北方向のびる畦畔の一部と、南側のSD-102とを区画する畦畔の一部を確認できた。さらに、西側でも床土層のⅡ-2-④層下半が帯状に残ることを確認できたので、SS-116とした。水田面の東西は3.55m、南北は4.5～5.0mと推定される。南北方向の不整長方形と考えられる。水田面の北半部は削り取られている。検出面の標高は26.16～26.26mを測り、南に向かって緩やかに低くなる。検出面には凹凸が多く残るが、耕起痕や足跡と考えられる窪みはみられない。東隣のSS-115とを区画する東側畦畔は幅39～80cm、南側のSD-102とを区画する畦畔は幅44～62cmを測り、2～4cmの高まりを持つ。西側畦畔と考えた帯状に残る床土層のⅡ-2-④層下半の幅は50cm前後である。

東西隅のSX-121と接する部分で、幅35cmほどでSX-121へ向かって落ち込む痕跡を確認できた。この落ち込み部分は、中層水田を覆うⅡ-2-③層で埋積されている。SS-116からSX-121へ排水する水口と考えられる。

耕作土層から土師器埦（図37-24）や内黒の黒色土器埦（図37-47）、耕作土層下部～床土層から土師器埦（図39-35）、SD-102・SS-116間畦畔から土師器の皿（図38-3）や坏（図38-5）や埦（図38-30）、内黒の黒色土器埦（図38-34）弥生土器の甕（図38-38）などの破片が出土している。

SS-117

A区北壁沿いの西よりのDV～DX-45区で出土した。水田面の北側は調査区外にのび、東西11.85m、南北1.35m以上の長方形の水田面と考えられる。水田面の標高は26.04～26.06mとほぼ平坦で、東隣のSS-113水田面と比べてわずかに低くなる。また南側のSS-115・1116と比べると10cm以上低い。水田面には凹凸が多く残るが、耕起痕や足跡と確実に判断できる窪みはみられなかった。東隣のSS-113とを区画する東側畦畔は幅55～60cm、南側のSD-103とを区画する畦畔は幅60～75cm、西隣のSS-118とを区画する畦畔は幅42cm前後を測り、水田面から2～4cmの高まりをもつ。

南側畦畔のDW-45区東端近くで、SD-103とをつなぐ幅58cmの水口を確認した。SD-103の溝底に灰色細砂の薄いレンズ状ブロックが互層状態で堆積する②層がみられるが、その上部および水口部、そしてSS-117水田面は、細砂・小礫が多く混じる灰褐色シルトの①層で埋まる。①層は中層水田層上を覆うⅡ-2-③層に対応する（図29-7）。

耕作土層から土師器の皿（図37-1）や埦（図37-26）、SD-103・SS-117間畦畔から土師器埦（図38-12・28）、床土層から土師器埦（図39-10）、などの破片が出土している。また、SS-117耕作土層出土の黒

色土器の破片は、DU-44区 SS-308を覆う砂礫層であるⅡ-２-⑤層から出土した破片（図118-48）と接合する。SD-301・SS-117間畦畔出土の黒色土器埦も、SD-209埋土やDU-45区 SS-308覆土砂礫層出土の破片（図118-52）と接合する。

SS-118

A区北西隅のDX・DY-45区で検出した水田面である。北側は調査区外にのびる。東西幅は3.5m、南北幅0.98m以上である。水田面は26.05m前後で、東隣のSS-117とほぼ同じである。水田面には凹凸が多いが、耕起痕や足跡と確実に判断できる窪みはみられない。東隣のSS-117とを区画する畦畔は幅42cm前後、南側のSX-121とを区画する畦畔は幅50～65cm、西側のSD-24とを区画する畦畔は幅90cm前後と広く、水田面から４cmほどの高まりをもつ。

南側畦畔の東端でSD-103とをつなぐ水口を確認できた。SD-103部分を含めて、上部には砂礫が多く混じるにぶい黄褐色砂質土の①層が堆積する。①層はSS-118水田面を覆うⅡ-２-③層である。中位には、砂礫混じりのにぶい黄褐色砂質土の②層、砂礫が多く混じる黄褐色砂質土の③層、砂礫混じりのにぶい黄褐色砂質土の④層、砂礫ブロックの⑤層が互層状態で堆積する。水口底面にはやや粘性のある明黄褐色砂質シルト⑥層、SD-103溝底には砂礫が混じり砂質が強い黄褐色砂質シルトの⑦層がみられる。中位に堆積する②～⑤層の堆積方向から考えれば、SD-103からSS-118への給水を目的とする水口である。（図29-８）。

２）溝

Ⅱ-２-④層上面でSD-101～104・114・119・120・122の８条の溝が出土した。いずれも水田面に伴う水路で、東西にのびるSD-101を基幹とし、これに平行するSD-102・103・114を配置し、さらにSD-122など補助的水路を設けている。SD-119・120はSX-121から西と北へ向かってのびる水路である。

SD-101

A区DR-42区～DY-44区で南東から北西へ横断する東西方向の水路である。東側は調査区外にのび、DS-42区でSD-114と合流し、DT-42区北西部ではSD-122と分岐し、DV-43区では畦畔を切った水口でSD-102と連結される。DV-42区中央では、南側から幅1.1mの溝が合流する。西端部は塹壕によって破壊されているが、DY-44区でSD-102と合流した後に、SX-121に連結すると考える。溝底の標高は、東端DR-42区で26.32mを測るが、DS-42区以西では26.22～26.26mである。西端のSX-121と連結する付近では26.25mである。溝幅は場所によって大きく異なる。東端のDR-42区では1.6mであるが、DS・DT-42区で2.3～2.6mと広くなり、DU-42区では1.8mと狭く、DV・DW-42・43区では再び3.6～3.8mと広くなる。西端付近は、塹壕で破壊されて南側の肩部しか残存していないが、1.1～2.0mほどの溝幅を復元できる。

SD-101では、土層断面をDS-42区・DT-42区・DV-42・43区、そしてDY-44区でSX-121の南北土層断面とともに観察した。

DS-42区では、SD-114が流れ込む連結部を含めて観察した（図31-２）。上半を厚く埋積する①層は、にぶい橙色砂質土が混じる褐灰色砂質シルトで、径0.1～３㎜の砂礫を非常に多く含む。中層水田を覆う砂礫層のⅡ-２-③層である。下半に堆積する②層は、褐灰色シルトに黄褐色が少量混じり、砂礫混じりを多く含む。底面とSD-114が流れ込む連結部を中心として、砂礫が混じる褐灰色砂質シルトの③層がレンズ状に堆積する。③層はSD-101が機能していた時期の堆積土と考えられ、旺盛な流水があったことがわかる。

DT-42区では、SD-122縦断面とあわせて観察した（図31-１）。上部は、Ⅱ-２-③層に対応する砂礫が多く混じる灰白色砂質土の①層や、砂礫が混じりのにぶい黄褐色砂質シルトの②層で埋積されている。SD-101の底面には、粘性をおびる灰黄褐色砂質シルトの④層が堆積する。含まれる砂はきめが細かく、灰白色砂質土や明黄褐色砂質土の小塊が混じる。DS-42区の堆積土層と比べて、それほど旺盛な流水は考えられず、水が停滞した環境を復元できる。この地点はSD-122が分岐する場所であり、埋積土層の観察結果ともあわせ、西側のDU-42区部分に堰を想定できる。ただし、堰を構成する杭跡は確認できていない。

DV-42・43区では、SD-102・SS-110も含めた土層断面を確認した（図31-３）。最上層には灰色～灰褐色のシルトである①層、中部には細砂・小礫が小さな塊となって多く混じる灰色シルトの②層が堆積する。②層は、SD-102上部やSS-110を覆う⑤層と同質の堆積土層で、①・②・⑤層は中層水田を覆うⅡ-２-③層と対応すると判断した。SD-101底面でも北側には灰色細砂がレンズ状ブロックで堆積した④層を確認できた。流水を示す堆積で、SD-101が機能していた時期

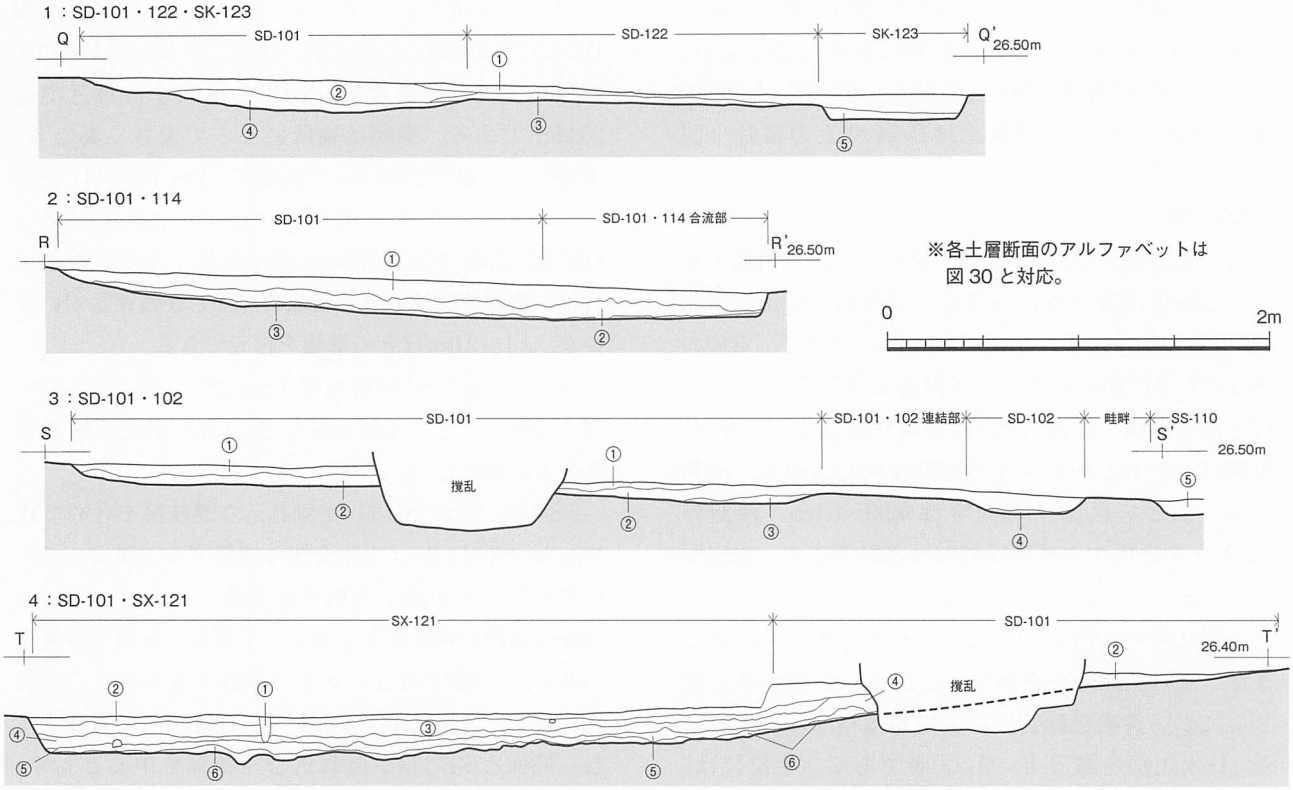


図31　A区Ⅱ-2-④（中層水田）層に伴う水口部分の土層断面図2（縮尺1/20）

の堆積土層と考える。

DY-44区では、SX-121の南北断面とあわせて、堆積土層の観察を行った（図31-４）。SD-101の南側の肩部が残存する部分は、黄褐色粗砂に浅黄色や褐灰色の砂質土がまだらに混じる②層で埋積されている。②層は砂礫が多く混じり、北側のSX-121の最上部を覆っている。中層水田を覆うⅡ-２-③層である。SX-121と連結するDY-44・45区境界部では、部分的に褐灰色砂質土が混じる褐灰色粘質土の④層や、黄橙色砂質シルトのレンズ状や丸い小塊がみられる褐灰色砂質土の⑤層がSX-121側へ流れ込むように堆積している。④・⑤層は、SD-101からSX-121へ流れ込んだ堆積土層と考える。

SD-101からは比較的多くの遺物が出土している。土師器の埦（図32-１～７・18～21・27・29～37・40～45・47・48・54～57）・皿（８・９・15～17・22・25・28・46・53）・坏（10・26・49）、白磁碗（11）、黒色土器の碗（12～14・23・24・38・39・58～61）、土鍋（50）、瓦器埦（51）、丸瓦（52）などがある。図32-１～３はDY-44区、４～24は溝幅が広くなるDV-43区西半部～DX-43区、25～58は堰を想定したDU-42区以東、59・60はSD-114との合流部から出土している。DV-43区西半部～DX-43区とDU-42区以東に出土遺物が多い。DV-43区西半部～DX-43区では、上半部に堆積するⅡ-２-③層との区分ができなかった。これに対して、DU-42区以東では、埋土下半から出土した遺物と比べて、図32-25～39の埋土上半出土遺物は遺存状況が非常によい。この地点の埋土上半の土層はⅡ-２-③層にあたる洪水堆積物であり、洪水時に流れ込んだ遺物と考える。一方、図32-43・53～58の溝底出土の遺物はSD-101が機能していた時期に埋積したものである。

SD-101から出土した遺物の中でも土師器埦の図32-29の外底面には×印のヘラ記号がみられる。34・57・58の外底面には板目圧痕が残る。42の外底面はナデ仕上げであるが、わずかに回転糸切り離し痕を観察できる。２の外面は二次的な火熱を受けて赤変。48は破片の状態で二次的な火熱を受けて部分的に黒斑が生じている。３の器壁の芯部には灰黒色の黒化層が残り、一部が器表面に染み出したような黒変部となっている。また、29・31・32の器壁の芯部にも、灰色や淡黒色の黒化層が残る。土師器皿の図32-８・16・22・28の外底面には回転糸切り切り離し痕が残る。図32-12・38は両黒、13・14・23・24・39・58～61は内黒の埦で

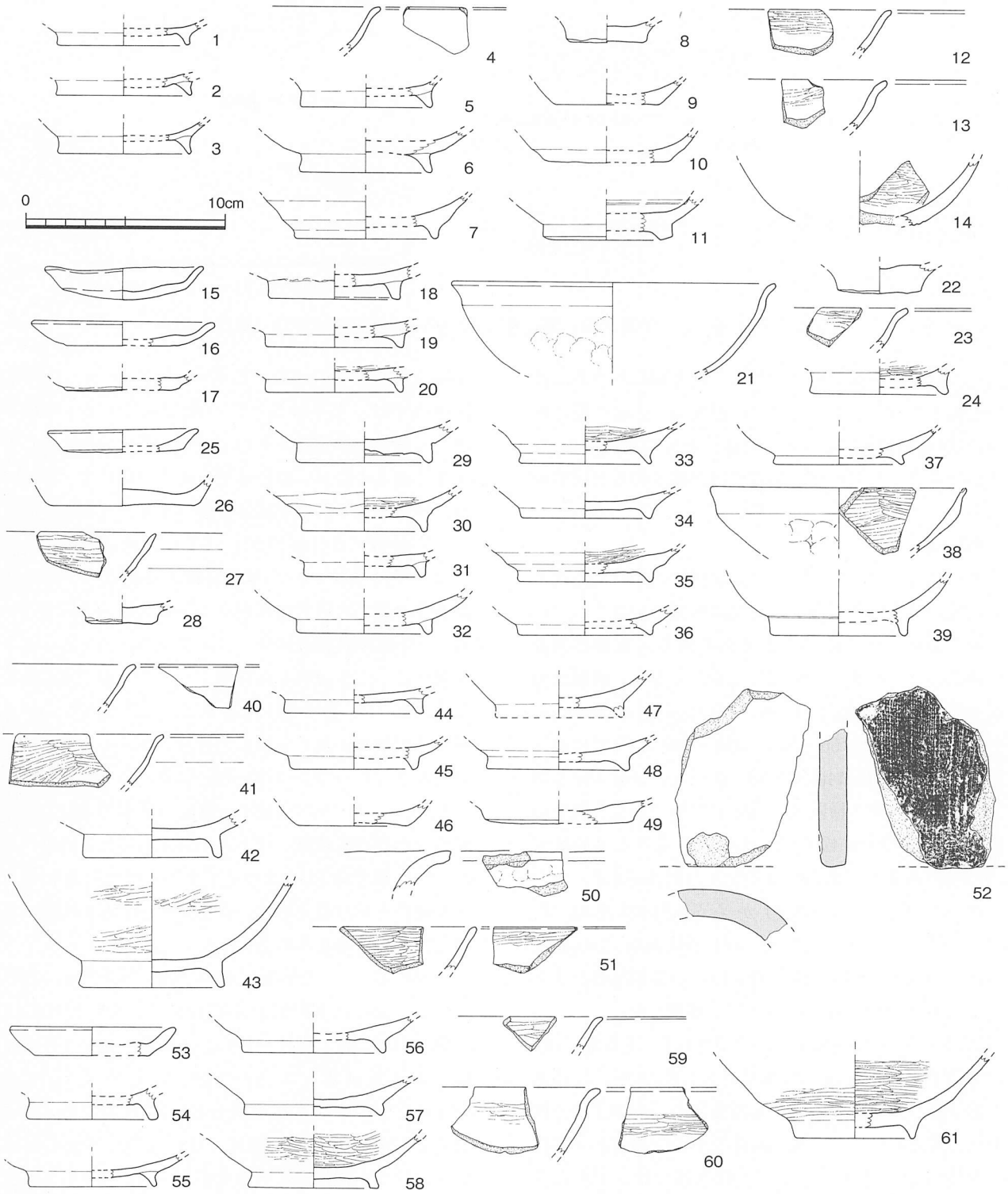


図32　A区Ⅱ-2-④（中層水田）層 SD-101出土遺物実測図（縮尺1/3）

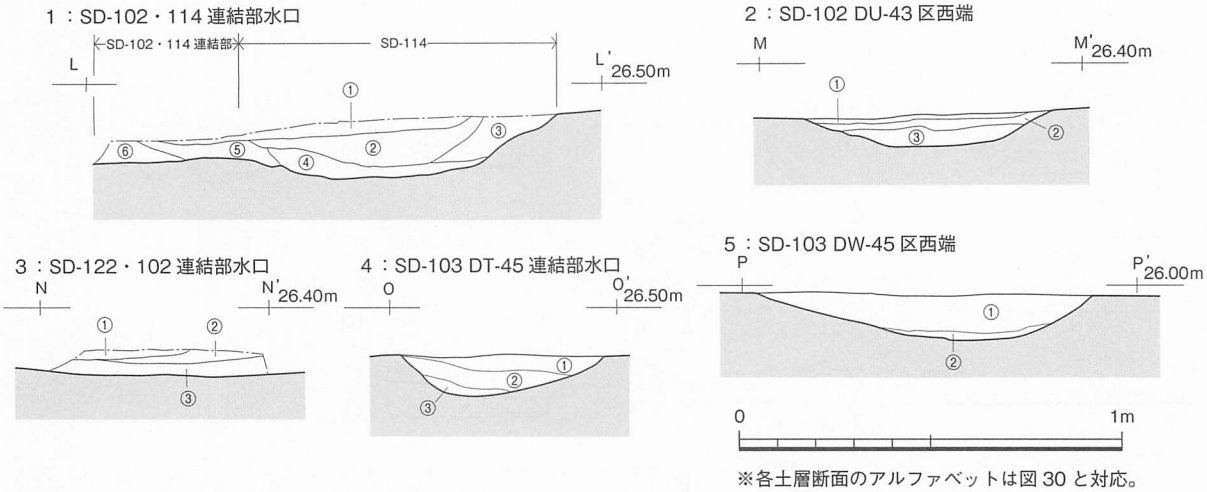


図33　A区Ⅱ-2-④（中層水田）層に伴う水口部分の土層断面図3（縮尺1/20）

ある。14は高台部の接合のため、接合面にヘラ状工具で沈線を３条巡らす。11は、白磁碗で、内面の見込み部に段状の沈線を巡らす。52は、丸瓦の端面破片で、凸面は荒れが著しいが、凹面には平織りの布目圧痕が残る。

SD-102

Ａ区中央のDR-43区からDX-44区に向かって流れる東西方向の水路である。西端部は塹壕で破壊されているが、SD-101へ連結すると考えられる。東側は調査区外にのび、検出した総延長は33mである。溝幅は東端のDR-42区では55～65㎝、DS-43区では60～68㎝、DT・DU-43区では56～70㎝、DV・DW-43区では45～73㎝、西端のDX-44区では53～60㎝と、ほぼ一定した溝幅である。溝の横断面は浅いＵ字形である。溝底の標高は東端のDR-42区で26.20㎝、西端のDX-44区で26.22mであるが、底面にはかなりの凹凸がある。

DS-42・43区SS-108水口からSD-114の連結部、DS-43区西端、DT-43区中央、DT-43区西端、DU-43区西端、DV-44区SS-115南東隅水口との連結部の計６ヶ所で、SD-102を埋める堆積土層を観察した。

DS-42・43区SS-108水口からSD-114の連結部では、上半は中層水田を覆う砂礫層（Ⅱ-２-③層）に対応する砂礫が多く混じる灰黄褐色砂質シルトの①層で埋まり、溝底にはにぶい黄褐色砂質土の③層がレンズ状に堆積する（図29-３）。DS-43区西端では、上半にⅡ-２-③層である径0.1～３㎜の大小の砂礫が多く混じるにぶい黄色砂質シルトの①層や、径0.1㎜前後の砂粒が多く混じるにぶい黄色砂質シルトの②層がみられ、溝底には細砂を若干混じえるが粘性をややもつにぶい黄色シルトの③層が堆積する（図29-９）。DT-43区中央では、上半はⅡ-２-③層である大小の砂礫が混じる黄褐色砂質シルトの①層や、径１㎜前後の小礫が多く混じるにぶい橙色砂質シルトで埋まる。溝底には、砂礫を若干含むが粘性が強いオリーブ褐色砂質シルトが堆積する（図29-10）。DT-43区西端では、上半には、やはりⅡ-２-③層に対応する径２～３㎜の砂礫が多く混じる灰黄色砂質シルトの①層と、灰黄色砂質シルトに明黄褐色砂質シルトが斑状に混じる②層が堆積する。下半は灰黄色砂質シルトの③層で埋積される（図29-11）。DU-43区西端では、上半に径１㎜～小指先大の砂礫が混じる灰黄色砂質シルトの①層、礫がほとんど混じらないにぶい橙色砂質シルトの②層がみられる。下半には、径0.1㎜前後の砂粒が混じるが、粘性をおびた灰黄色シルトの③層が堆積している（図33-２）。以上のSD-102の埋土下半～溝底に堆積したやや粘性をおびる土層は、流水が停滞ぎみの環境で堆積したものと考えられる。

これに対して、DV-44区SS-115南東隅水口との連結部では、SS-115水田面および水口部、そしてSD-102の埋土上部には、細砂の薄いレンズ状ブロックが多く混じる灰色砂質シルトの①層が堆積する。①層はSS-115などの中層水田を覆うⅡ-２-③層である。ところが、SD-102下半～溝底には灰色砂の薄いレンズ状ブロックが縞状に互層堆積する②層がみられる（図29-６）。流水の痕跡である。

以上、SD-102埋土下半～溝底の土層は、中層水田を覆う砂礫層であるⅡ-２-③層とは異なり、SD-102が機能していた段階に堆積したものと考えられる。

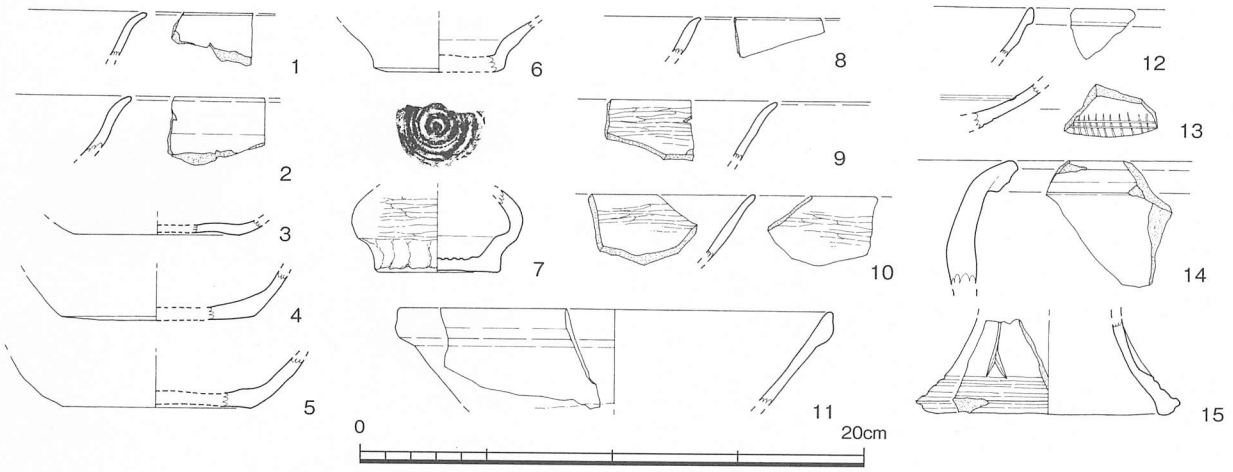


図34　A区Ⅱ-2-④（中層水田）層 SD-102出土遺物実測図（縮尺1/3）

DV-44区 SS-115南東隅水口との連結部で流水の痕跡もあるが、多くの土層断面で観察できた埋土下半～溝底に堆積したやや粘性をおびる土層と、溝底の標高が東西で大きな差がないことも考慮すれば、SD-102は水路とは言っても、かなり停滞ぎみで、常時流水があったとは考えられない。

SD-102埋土からは、土師器椀（図34- 2・6）や坏（3～5）、土師質土器の壺（7）、黒色土器椀（8～10）、白磁の碗（11・12）や皿（13）、須恵器の甕（14）や弥生土器片（15）などが出土している。偏った出土分布はみせない。確実に SD-102が機能していた段階に堆積した埋土下半から出土した遺物は、図34- 3の土師器坏と14の須恵器甕であるが、14は古墳後期の遺物で混入品である。

SD-102から出土した遺物の中で、図34- 7は、土師質土器の小壺で、胴部外面は上半をミガキ、下半を指頭による成形の後に横ナデ。外底面はケズリ調整を施す。内面は横ナデ、内底面には同心円文をもつ当て具を押捺する。8は内黒の黒色土器椀。11・12は玉縁口縁の白磁碗。13は白磁皿で、外面にはカンナケズリ状の調整痕跡が残り、露胎のまま。内面にはヘラ状工具で削り段をつくり、施釉。14は古墳後期の須恵器甕の口縁部片。15は弥生中期後葉の高坏の脚部片。脚裾部に3条、脚端面に1条の凹線文を巡らし、脚中位に未貫通の矢羽根透かし文様を施す。器壁の芯部には淡黒色の黒化層が部分的に残る。

SD-103

A区北壁沿いの DR ～ DZ-45区で出土した東西方向にのびる水路である。西端は SX-121へつながり、検出した総延長は31.6mで、東側は調査区外にのびる。溝幅は、東端の DR-45区では62㎝、DS-45区では1.42mと広がるが、DT・DU-45区では58～95㎝、DV・DW-45区では62～85㎝、西端の DX-45区では95㎝前後を測る。溝底にはかなりの凹凸がみられるが、溝の横断面は浅いU字形である。東端の DR-45区で26.08m、西端の DX-45区では25.96～26.00mと、西へ向かって緩やかに低くなる。

SS-108北東隅水口との連結部、SS-113南側畦畔東端水口との連結部、DT-45区西端、SS-113・117水口との連結部、SS-117南側畦畔中央水口との連結部、DW-45区西端、西端の SS-118南東隅水口との連結部の計7ヶ所で、SD-103埋土の観察を行った。

SS-108北東隅水口との連結部では、上半にⅡ-2-③層に対応する微細砂・小礫の薄いレンズ状ブロックがみられる砂礫混じり粘質シルトの③層、下部～溝底には細砂の薄いレンズ状ブロックがみられる灰色シルトの④層が堆積する（図29- 1）。SS-113南側畦畔東端水口との連結部では、SS-113水田面・水口部を含めて、上半はⅡ-2-③層に対応する微細砂の塊状ブロックが多く混じる灰色砂質土の①・②層で埋まり、下半～溝底には部分的に微細・小礫の薄いレンズ状ブロックがみられる灰褐色砂質土の③層が堆積する（図29- 4）。DT-45区西端では、上部～中部に微細砂を主とする灰色砂質シルトの①層、①層と比べて砂質がかなり強い灰色砂質シルトの②層がみられる。①・②層はⅡ-2-③層に対応する堆積土層である。溝底には③シルトに灰褐色砂質シルトとの微細砂が縞状に互層堆積する③層がみられる（図33- 4）。SS-113・117水口との連結部では、上半にはⅡ-2-③層に対応するにぶい黄褐色シルト小塊や砂礫が多く混じる褐灰色粗砂質土の

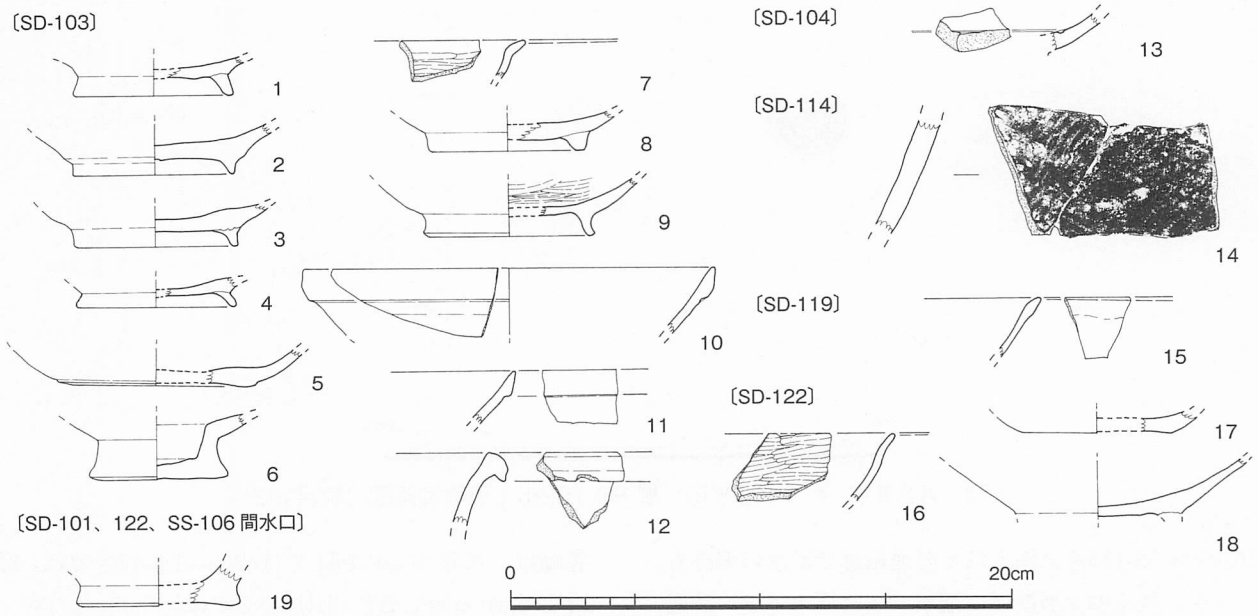


図35　A区Ⅱ-2-④（中層水田）層 SD-103・104・114・119・122・水口出土遺物実測図（縮尺1/3）

①層や、砂礫混じりの灰黄褐色砂質シルトの②層が堆積する。下半でも水口部底面近くには、部分的に黄褐色シルトが混じる褐灰色シルトの③層、SD-103溝底にはにぶい黄褐色シルトと褐灰色砂質土が薄い縞状に互層堆積する④層がみられる（図29-５）。SS-117南側畦畔中央水口との連結部では、SD-103の溝底に灰色細砂の薄いレンズ状ブロックが互層状態で堆積する②層がみられ、上部とSS-117水田面および水口部には、Ⅱ-２-③層の細砂・小礫が多く混じる灰褐色シルトの①層が堆積する（図29-７）。DW-45区西端では、上部～中部にⅡ-２-③層にあたる細砂・小礫が多く混じる灰褐色シルトがたまり、溝底には灰色細砂の②層がレンズ状に堆積する（図33-５）。西端のSS-118南東隅水口との連結部では、上部にⅡ-２-③層である砂礫が多く混じるにぶい黄褐色砂質土の①層が堆積する。中位には、砂礫混じりのにぶい黄褐色砂質土の②層、砂礫が多く混じる黄褐色砂質土の③層、砂礫混じりのにぶい黄褐色砂質土の④層、砂礫ブロックの⑤層が互層状態で堆積する。SD-103溝底には砂礫が混じり砂質が強い黄褐色砂質シルトの⑦層がみられる（図29-８）。

いずれの土層断面でも、SD-103の溝底にはレンズ状に砂礫や砂質土が堆積しており、SD-102と比べて流水が比較的旺盛であったと考えられる。

SD-103埋土からは、土師器の埦（図35-１～４）・坏（５）・柱状高台土器（６）、黒色土器の埦（７～９）、白磁碗（10・11）、須恵器甕（12）などが出土している。その中で、図35-３は、高台部の接合にあたって予めヘラ状工具で３条の深めの沈線を施す。５の土師器坏は外底面に回転糸切り離し痕が残る。６は土師器の柱状高台土器で、外底面には回転糸切り離し痕が残る。底部の芯部には灰色の黒化層が部分的に残る。外面には黒斑が生じている。７～９は内黒土器の埦である。

以上の遺物の中で、SD-103が機能していた段階に堆積した溝底の砂や砂質土などの土層から出土した遺物は、図35-４の土師器埦、７・８の黒色土器埦に限られている。12は混入品の古墳後期の須恵器甕の口縁部片で、内面には自然釉が付着する。

SD-104

Ａ区南東部のDS～DU-41区で部分的に出土した東西方向にのびる溝である。周辺では、Ⅱ-２-③・④層は堆積しておらず、Ⅱ-２-②層を掘り下げた時点で、基本層序Ⅳ層に切り込まれた窪みがあらわれた。埋土はⅡ-２-④層に類似する褐色～灰褐色のシルトで、砂礫が多く混じり、底面には細砂のレンズ状ブロックが点々とみられるので、水路と考えた。

検出した総延長は7.85mで、DT-41区東半で二又に分岐するが、南側は調査区外にのびる。溝底は凹凸が多いが、横断面は浅い逆台形を呈する。溝底の標高は東端で25.81m、溝が分岐するDT-41区東半で25.84m、西端のDU-41で25.85mで、深さ３～５cmを測る。

埋土中から土師器片に加えて白磁碗（図35-13）な

どが出土しているが、遺物の出土量は少ない。

SD-114

A区南東部のDR・DS-42区に位置する。東西にのびる水路で、DS-42区北西部でSD-101と連結する。また、DR-42区とDS-42・43区境界部の２ヶ所で、畦畔を切ってSD-102と連結される。東側は調査区外にのび、検出した総延長は6.5mである。溝底は凹凸が著しく、DR-42区では標高26.31m、DS-42区南西部のSD-101と連結する部分では26.21mと、東から西に向かって緩やかに低くなる。横断面形は浅いU字形で、溝幅は67～68cm、DS-42・43区境界部のSD-102との連結部分では95cmほどを測る。

SD-102との連結部分２ヶ所で埋積土層を観察した。DS-42・43区境界部では、SD-114の溝底には、細砂の薄いレンズ状ブロックがみられる灰黄褐色砂質土である②層が堆積することから、流水があったことがわかる。上部～中部とSD-102との連結部には、Ⅱ-２-③層に対応する砂礫混じりの灰黄褐色砂質シルトの①層が厚く堆積する（図29-３）。これに対して、DR-42区のSD-102との連結部分では、上半に径２㎜以下の砂礫が混じる黄褐色砂質シルトの①層、部分的に粘性をおびる灰黄褐色砂質土の②層、砂礫混じりの灰黄褐色砂質土の③層が堆積する。①～③層はⅡ-２-③層に対応する堆積物である。下半には、きめが細かな灰黄褐色砂質土の④層、砂礫が混じるが部分的に粘性をおびる灰黄褐色砂質シルトの⑤層、⑤層より粘性が強い灰黄褐色砂質シルトの⑥層が、SD-114からSD-102へ向かって流れ込むように堆積する（図33-１）。

前述したように、SD-102では常時流水があったとは考えられない。これに対して、SD-114では溝底に流水を示す堆積物があり、かつSD-114の溝底がSD-102よりも６～10cmほど高いことから、SD-114からSD-102への配水を目的として連結部が造られたと考えた。

SD-114では、須恵質土器の胴部片（図35-14）や土師器の細片が出土している。須恵質土器の甕または鉢の胴部片で、DU-45区のⅡ-２-③層から出土した破片と接合する。しかし、いずれも埋土上部のⅡ-２-③層に対応する土層からの出土遺物で、SD-114が機能していた時期を示すものではない。

SD-119

A区北西隅のDY・DZ-45区で出土した。SX-121から東に向かってのびる水路の一部で、調査区内では１mほどを確認したにすぎない。幅1.1～1.2mを測り、逆台形の横断面である。溝底は、かなり凹凸がみられるが、標高は25.96mで、SX-121底面から４cmほど高くなっている。

埋土は砂礫混じりの黄褐色粗細砂と灰褐色～灰白色砂質土で、後述するSX-121上部に堆積した土層と共通する。遺物は埋土中から須恵質土器の坏（図35-15）や土師器の小片が出土したのみである。

SD-120

A区北西隅のDY-45区で確認したSX-121から北に向かってのびる水路の一部である。調査区内では1.1mほどを確認できたのみである。幅58～60cmを測り、逆台形の横断面をもつ。溝底は、かなりの凹凸があるが、標高は25.98mで、SX-121底面から６cmほど高い。

SD-119やSX-121上部に堆積した土層と共通する砂礫混じりの黄褐色粗細砂と灰褐色～灰白色砂質土を埋土とする。埋土中から土師器の細片が出土しているが、図示できる遺物はない。

SD-122

A区南東部のDT-42・43区に位置する。SD-101・102を繋ぐ南北方向の長さ3.4mほどの水路である。溝幅はSD-101から分岐する地点で1.1mと広いが、SD-102をつなぐ部分は畦畔部を切り取ったように幅35cmしかない。溝底は凹凸があるが、標高26.22～26.26mで、SD-101側からSD-102へ向かって緩やかに低くなる。また、SD-122溝底面は、SD-101・102とは４cmほどの緩やかな段差が設けられている。

SD-101からSD-122の縦断面と、SD-102との連結部の土層断面を観察した。SD-101からSD-122縦断面をみると、上部は、Ⅱ-２-③層に対応する砂礫が多く混じる灰白色砂質土の①層や、砂礫混じりのにぶい黄褐色砂質シルトの②層で埋積されている。SD-122底面には、径５～６㎜のにぶい黄褐色砂質シルトの丸い小塊が混じる灰白色砂質土の③層が堆積し、それほど旺盛な流水は考えられない（図31-１）。また、SD-102との連結部では、上部に砂礫が多く混じる褐灰色砂質土の②層と、やや砂礫が細かな褐灰色砂質土の②層が堆積する。ともにⅡ-２-③層に対応する堆積土である。底面には、砂礫が混じるが、粘性をおびた灰黄褐色砂質シルトの③層がみられる（図33-３）。以上の埋積状況から、SD-122は、SD-101・102をつなぐ水路であるが、常時流水があったとは考えられない。

埋土中から、土師器椀（図35-16～18）などの小片が

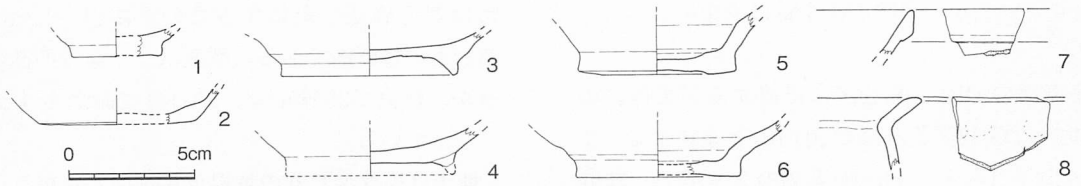


図36　A区Ⅱ-2-④（中層水田）層 SX-121出土遺物実測図（縮尺1/3）

出土している。

3）水溜遺構

SX-121

A区北西隅のDY-44・45区では、北側と東西側をⅡ-2-④層の畦畔で区画されたⅡ-2-③層の広がりを確認できた。当初、水田面と考えて掘り下げていったが、東隣のSS-116水田面の高さまで掘り下げても、依然として砂礫が多い堆積土が続く。そこで、南北方向に先行トレンチを設定して土層断面の観察を行った。その結果、水田層であるⅡ-2-④層はみられず、SD-101から流れ込んだ砂礫混じりの堆積土や薄い粘質土層が互層状態で堆積することを確認できた。そこで、SX-121として調査を進めることとした（図版10-2）。

SX-121は、南側を塹壕で破壊されているが、南北6m前後、東西4.8～4.9mの方形の掘り込みである。周囲を区画する畦畔から18～25cmの深さをもつ。底面は、南辺が標高26.08～26.10m、北東隅が25.80mと、南から北東に向かって緩やかに傾斜する。また、長さ5～20cmの不整楕円形や細長い不整形の窪みが多くみられ、凸凹が著しい。ただし、底面に残る窪みには、規則性を読み取ることはできなかった。南東隅でSD-101・102、北東隅でSD-103が流れ込み、北西隅から北に向かってSD-120、西側へSD-119が連結されている。南西隅でも西へのびる溝を部分的に確認できたが、SD-101の延長部分と考えられる。

DY-44・45区中央西よりで、SD-101を含めて南北方向の土層断面を観察した（図31-4）。①層は黄灰色細砂で埋まる小穴状の掘り込みである。②層は黄褐色粗砂に浅黄色や褐灰色の砂質土がまだらに混じり、DY-44区のSD-101南半部を含めて、SX-121の上部全体を覆う。土質の特徴から中層水田を覆うⅡ-2-③層に対応する堆積土層と判断した。③～⑤層は南から北に向かって流れ込んだ状態で堆積する。③層は砂礫混じりの明黄褐色細砂で、部分的に灰白色砂質土の薄いレンズ状ブロックがみられる。④層は部分的に褐灰色砂質土が混じる褐灰色粘質土、⑤層は黄橙色砂質シルトのレンズ状や丸い小塊がみられる褐灰色砂質土で、ともに細砂・粗細・小礫の薄いレンズ状ブロックが多くみられる。⑥層はSX-121底面の窪みを薄く覆う砂混じりの黄橙色砂質シルトである。②は中層水田が廃絶される契機となった洪水でもたらされた砂礫層（Ⅱ-2-③層）、③～⑥層はSX-121へ流れ込むSD-101・102・103で運ばれた堆積土層であり、水溜遺構と考えた。

SX-121から出土した遺物は、水田面や水路と比べて少ない。土師器の皿（図36-1）、坏（図36-2）や椀（3～6）、白磁碗（7）、弥生土器甕（8）などがある。とくに、5・6・8は、SX-121底面に堆積した⑥層から出土し、SX-121が水溜遺構として機能していた時期に流れ込んだ遺物である。

4）土壙

SK-123

A区DT-43区のSS-105北西隅の水口からSD-122にかけての地点で出土した土壙である。SD-122を底面まで掘り下げた時点で検出できた。78×80cmの隅丸方形を呈し、SD-122底面からの深さは7cm前後を測る。

SD-122の堆積土層を確認するため設定していた土層観察用ベルト上にあり、SD-122との関係を再確認できた。砂が混じるが、粘性をおびるにぶい黄褐色シルトの⑤層で埋積されている。部分的に灰白色砂質土が少量混じる（図31-1）。このように、SX-123は流水が少なく停滞した環境で埋積を推定できる。位置関係も考え合わせれば、SS-105の水口と関連する施設と考えられる。

埋土中からは土師器の小片が出土しているが、量は少ない。その中で、土師器碗の高台部破片は、SD-101・SS-106間畦畔出土の破片（図38-18）と接合する。

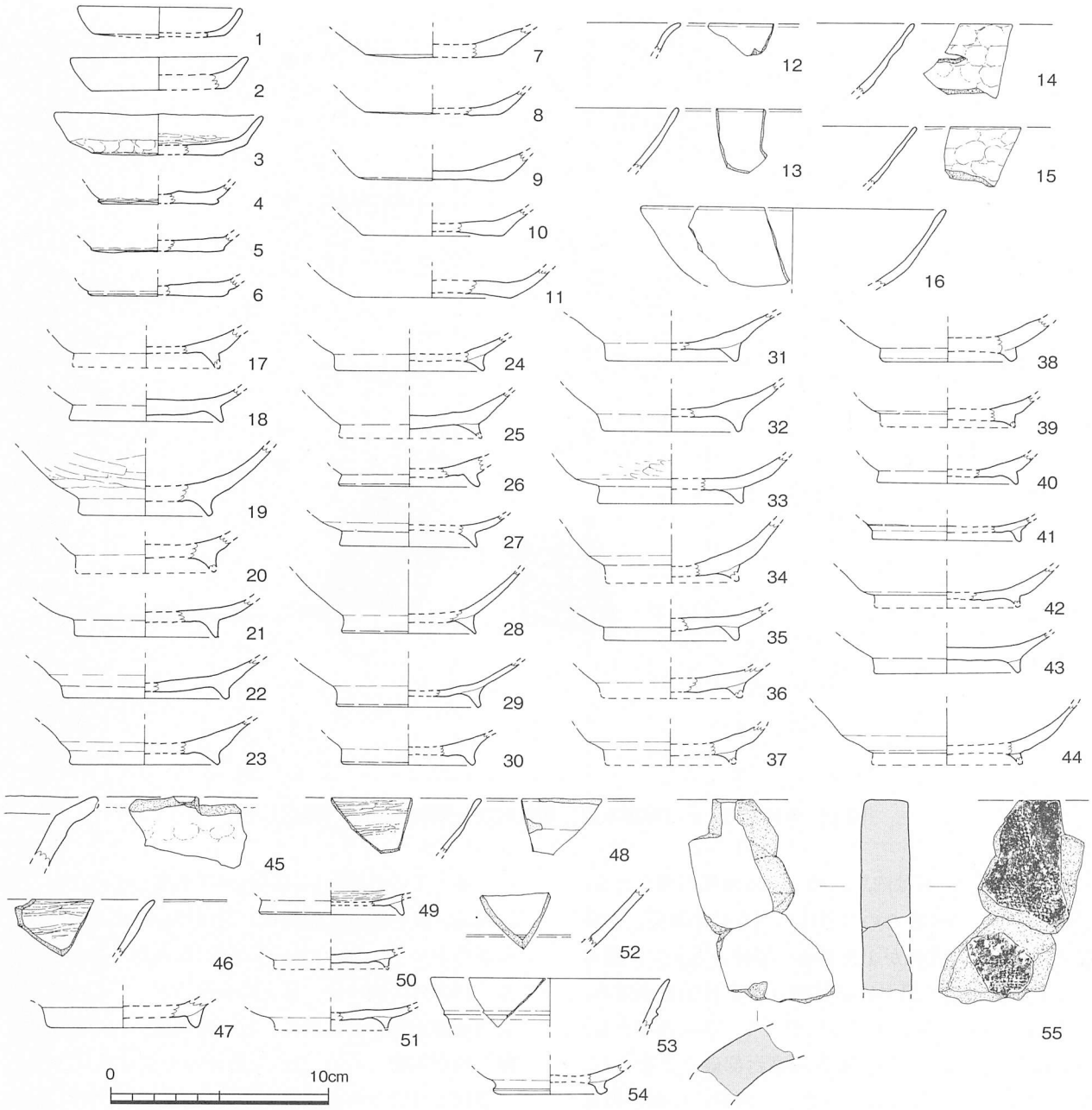


図37　A区Ⅱ-2-④（中層水田）層耕作土出土遺物実測図（縮尺1/3）

（２）水田耕作土･畦畔･床土出土の遺物

１）耕作土出土の遺物

土師器・黒色土器・白磁・土鍋・石器などが出土している（図37、図40- ３）43は、DR-45区 SS-1耕作土層、44は SD-101（DW-43区北西部・DX-43区北東角）から出土した破片と接合する。。

図37- １～６は土師器皿。１の器壁の芯部には黒灰色の黒化層が残る。２は厚でのつくり。４の外底面には、回転糸切り離し痕が残る。５の外底面には回転ヘラ切り離し痕が残る。７～11は土師器の坏。11は、器体が歪んでいるため、復元底径はやや不確実である。外底面に回転糸切り離し痕が残る。12～44は、土師器埦。17～44はいずれも輪高台をもつ。12・16は、比較的薄でのつくりで、胎土も精選されている。とくに、28は砂礫をほとんど含まない精選粘土が用いられている。24・29・41も薄でのつくり。これに対して、34・37・38は比較的厚でのつくりである。18・22・28・36・40の器壁の芯部には黒色、灰色、灰黒色の黒化層が残る。43の外底面には回転糸切り離し痕が残る。

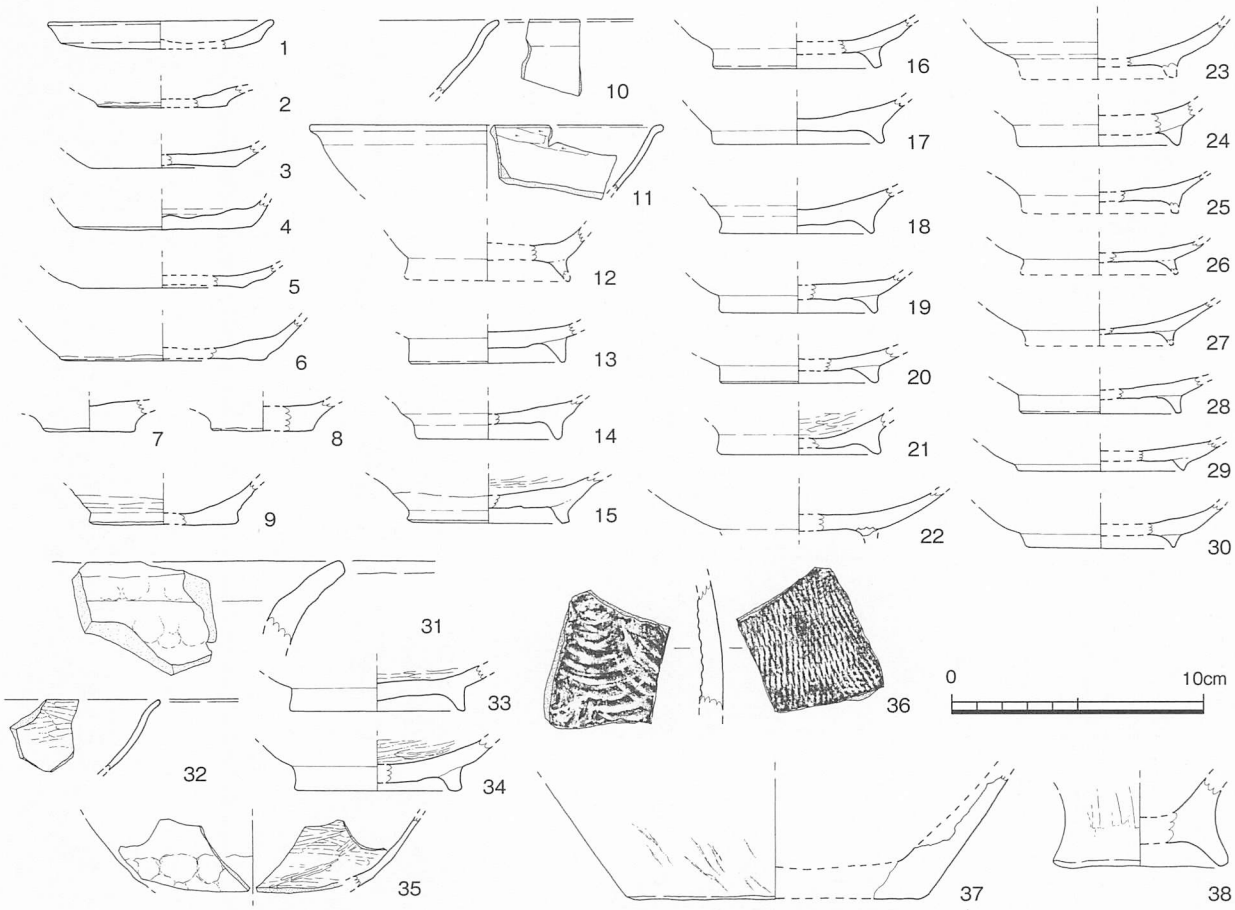


図38　A区Ⅱ-2-④（中層水田）層畦畔出土遺物実測図（縮尺1/3）

45は土鍋。46･47は内黒、48～51は両黒の埦である。52は白磁碗。小片のために器体の傾きは不確実。内底面見込み近くに沈線が１条巡る。55は、丸瓦で、端面がわずかに残る。凹面には平織りの布目圧痕が残る。53･54は、古墳後期終末期の須恵器で、混入品である。54は高台径から小型の長頸壺の高台部破片と考えた。図40- ３は、片岩製の磨製石庖丁。両刃。片面の刃部は両側から交互に研磨してつけられる。刃部に直交する整形時の研磨痕が部分的に残る。また、右端部には整形時の敲打痕が部分的にみられる。重量74.7ｇ。

２）畦畔部出土の遺物

土師器･黒色土器･瓦器･石庖丁が出土している（図38、図40- ２）。この中で、図38-28はDV-44区SS-110耕作土～床土層から出土した破片と接合する。

図38- １～３・７・８は土師器皿。２は外底面を回転糸切り離ししたものか？　３は砂粒がほとんど混じらない精選された粘土を用いる。８の外底面には、回転糸切り離し痕跡がわずかに残る。４～６は、土師器坏。６・７の外底面には回転糸切り離し痕跡がわずかに残る。９～30は土師器埦。９は厚い円盤高台、他は輪高台がつく。９の外底面には回転糸切り離し痕が残る。19の外底面はナデ仕上げられるが、回転糸切り離しの痕跡が部分的に残る。21の外底面には回転糸切り離し痕が明瞭に残る。22は、高台の貼り付けのために、ヘラ状工具で３条の沈線を予め施す。26・27は、胎土に砂粒をほとんど含まず、精選された粘土を用いる。比較的薄でのつくりである。また、30も精選粘土が用いられている。22・23の器壁の芯部には淡い黒色の黒化層が残る。23の外底面は黒変したままである。20・24・29は二次的火熱を受けて赤変する。

31は、土鍋で、「く」字形に屈曲する口縁部と考えられる。32～34は黒色土器の内黒の埦である。33は、厚でのつくりで、器体の歪みが著しい。35は、瓦器埦で、胴部外面は上半を乱雑な横ナデ、下半を指頭によるオサエ。内面はミガキ仕上げする。

36は古墳後期の須恵器の胴部片。37･38は弥生土器。37は、壺の底部片で、内面は薄く器面が剥離する。層

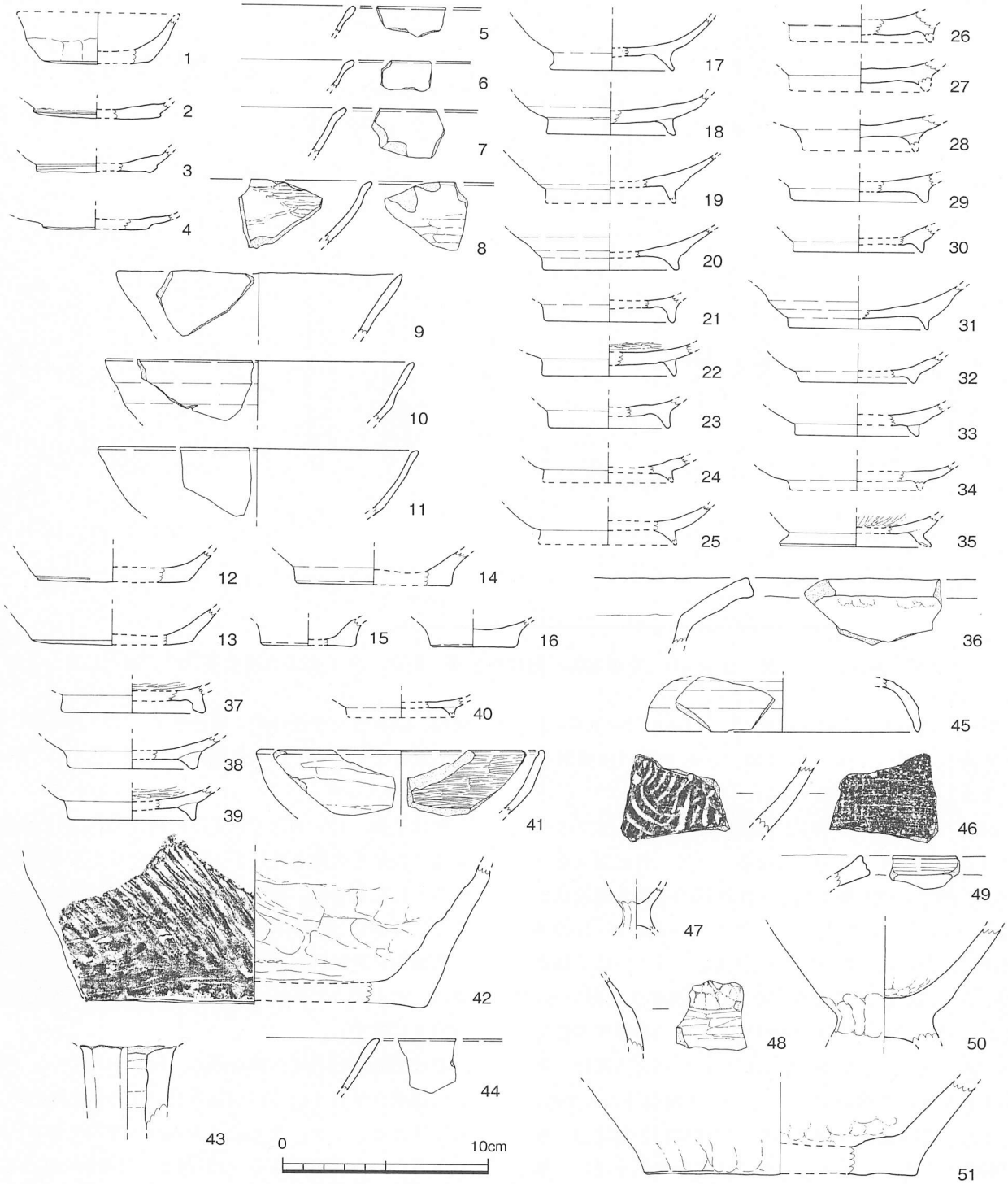


図39　A区Ⅱ-2-④（中層水田）層床土層出土遺物実測図（縮尺1/3）

状焼成破裂の可能性も考えられるが、確定はできない。DT-43区のⅡ-2-③層、DW-44区のSS-115耕作土層から出土した破片と接合する。弥生中期～後期前葉。38は、脚台状の上げ底で、底部周辺は二次的な火熱を受けて赤変する。36～38は混入品である。

図40-2は片岩製の磨製石庖丁の破片である。両刃。側端は研磨で面取り。刃こぼれが著しい。残存重量13.3gを測る。

3）床土層出土の遺物

土師器・黒色土器・瓦器・須恵質土器・石器が出土している（図39、図44-4）。接合しないが、図39-4

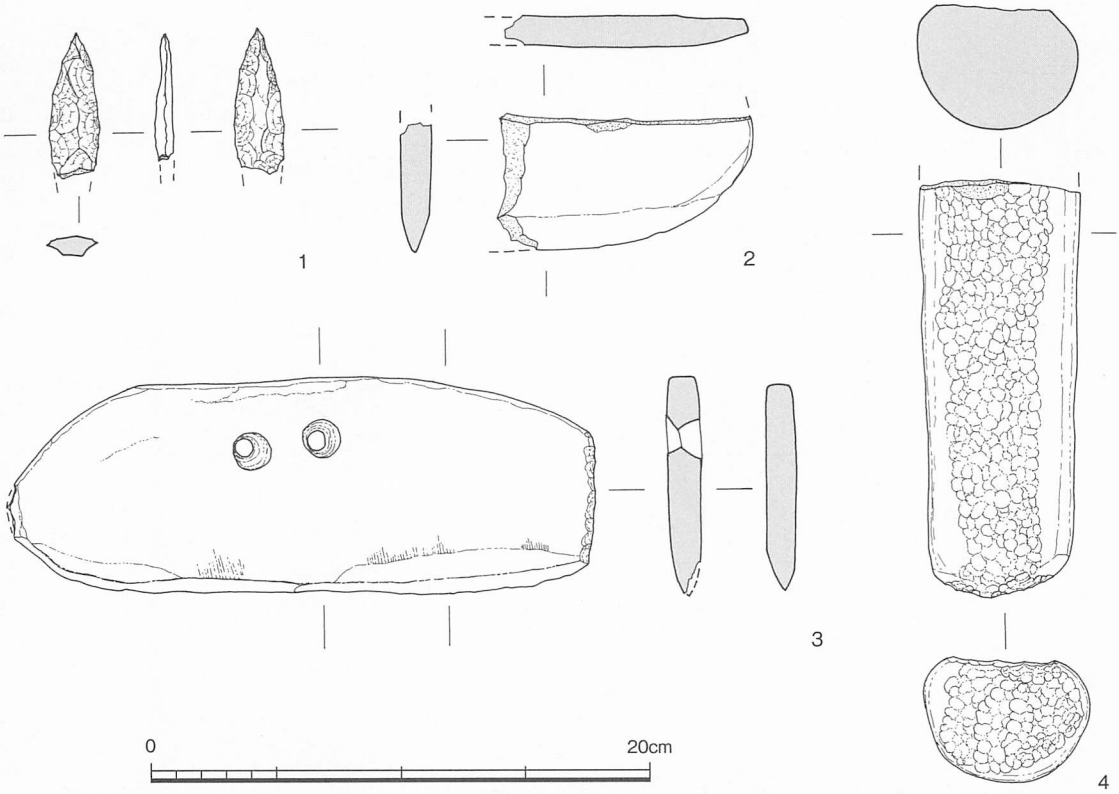


図40　A区Ⅱ-2-③層、Ⅱ-2-④（中層水田）層耕作土層・畦畔・床土層出土遺物実測図（縮尺2/3）

と同一個体と考えられる破片が、DT-42区 SS-105床土層から出土している。17は SS-116東半部の砂礫層から出土した破片と接合する。

図39- 1 ～ 4 ・15・16は土師器皿。1は、厚でのつくりで、他の皿とは全く異なる。3は、外底側面をヘラ状工具でナデを施すため、沈線状の条線が螺旋状に巡る。また、部分的に粘土がよれている。4・16の外底面には、回転糸切り離し痕が残る。5～11は土師器埦。5・6は、薄でのつくりで、精選粘土を用いる。これに対して、9は厚でのつくり。8の器壁の芯部には、淡灰色の黒化層が部分的に残る。10の内面は二次的火熱を受けて赤変する。12･13は土師器坏の底部片。14・17～35は土師器埦である。14は厚い円盤高台、他は輪高台をもつ。内外面とも二次的な火熱を受け、外底面は赤変する。19は薄でのつくりで、胎土も精選されている。26は、非常に厚でのつくりで、内面は黒変のまま。28も厚でのつくりである。20の外底面には、強い指頭によるナデ調整を施すためか、底部周辺の器体の歪みが著しい。22は外底面を回転糸切り離しした後にナデ仕上げを施す。31の外底面には板目圧痕が残る。17は、灰白色の焼き上がりであるが、器壁の芯部に黒色の黒化層が残る。19・27・28は、器壁の芯部に灰色、淡灰色や黒色の黒化層が残る。28の外底面は黒変したままである。27の外面は二次的火熱を受けて赤変する。

36は土鍋。37～39は黒色土器の内黒、40は両黒の埦。38は二次的な火熱を受け、内面の黒色もかなり薄れている。41は瓦器埦。42は須恵質土器。底径から壺と考えた。外面は、粗い平行条線のタタキ目を施した後に、底部側面を逆時計回りにヘラ状工具でケズリとる。内面は、粘土がよれるほど強い指頭によるナデ調整を時計回りに施す。

43は土師器の高坏の脚柱部片。幅が一定しないが8面に面取りされている。44は奈良時代の須恵器坏の口縁部片と考えたが、胎土には大粒の砂礫が混じり、ややざらついた質感である。45･46は古墳後期の須恵器。45は短頸壺の蓋か？　47～51は弥生土器。47は手づくねの小型品。脚柱部には指頭痕が多く残る。48は壺の胴部片。外面には、推定径5～6㎝、深さ2～2.5㎜の楕円形もしくは円形の剥離痕が残る。内面は黒変したままであるが、剥離面は外面と同じく赤茶色に焼き上がる。焼成破裂痕と判断した。49は、壺の口縁部片。口縁端部を横ナデによって、わずかに上方に拡張して端面に2条の沈線状の凹線を巡らす。50は脚台付き鉢

である。43～51は混入品である。

図44- 4は、円柱状の砂岩を利用した敲打具である。一側面と先端部に敲打痕が集中して残る。

6　Ⅱ - 2 - ⑤層上面から掘り込まれた遺構と遺物

Ⅱ - 2 - ⑤層を掘り下げ、下層水田面のⅡ - 2 - ⑥層上面で遺構検出を行っている途中に、Ⅱ - 2 - ⑥層の水田を切るやや淡い淡茶褐色土を埋土とする溝・土壙・小穴があることに気がついた。調査区東側の土層断面を再確認したところ、２条の溝がⅡ - 2 - ⑤層上面から掘り込まれていることを明らかにできた。他の遺構も埋土の特徴が共通することから、下部のⅡ - 2 - ⑥層の下層水田がⅡ - 2 - ⑤層を堆積させた洪水以後、Ⅱ - 2 - ④層の中層水田が造成される以前の時期の遺構である。

出土した遺構は、SK-201～204の土壙４基、SD-208・209の溝２条、SP-205・207・210～214の小穴である。

（1）遺構

1）土壙

SK-201

Ａ区南東部のDT・DU-42・43区で出土した不整円形の土壙である（図41、図版13- 2）。西側は攪乱で上部を破壊されている。南北径2.35m、東西径2.45～2.5mを測る。検出面から深さ30cmが残る。下層水田層であるⅡ - 2 - ⑥層を掘り抜き、基本層序Ⅳ層上部まで達している。底面はかなりの凹凸がある。

上半部は粗砂、径１cm～拳大の花崗岩円礫が多く混じる淡茶灰色砂質シルトの①層で埋積されている。壁

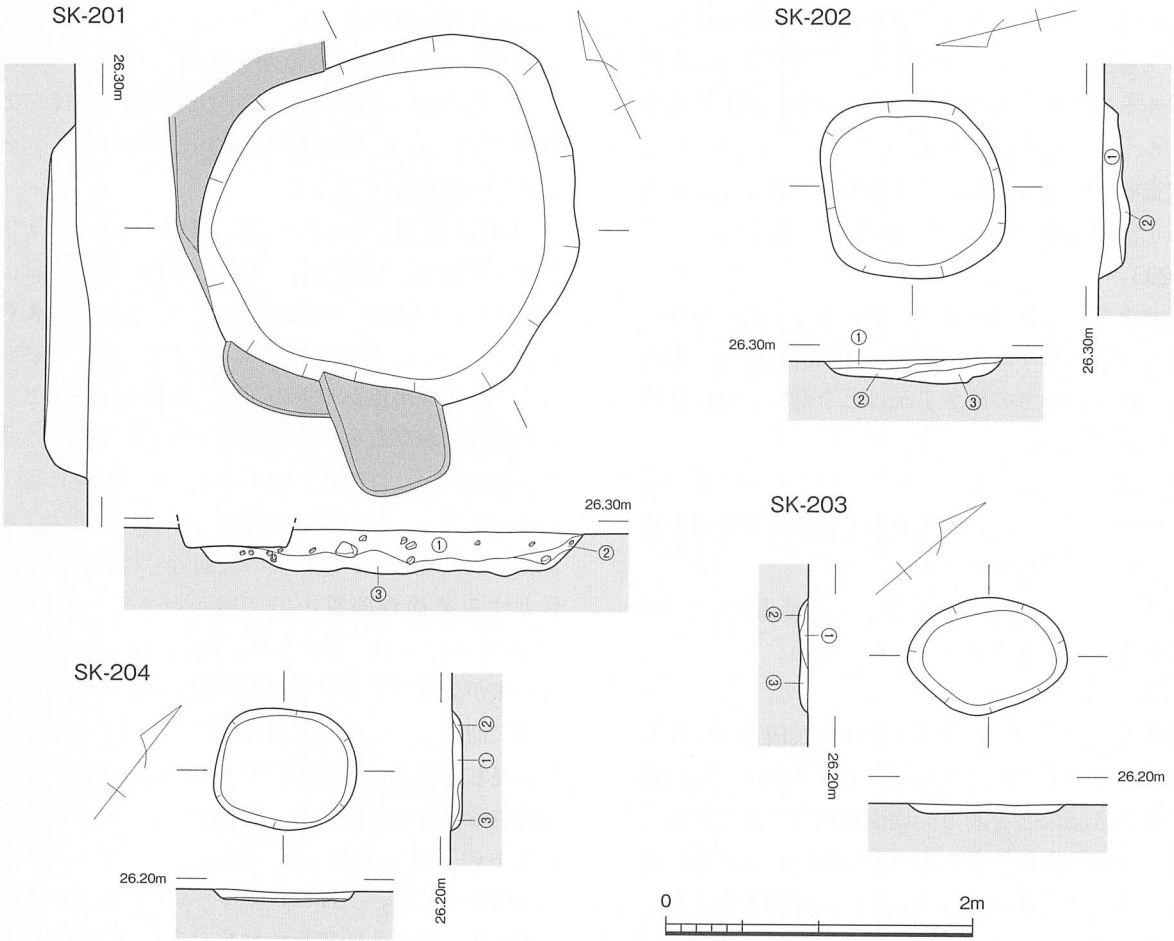


図41　A区SK-201～204遺構実測図（縮尺1/50）

際には南側から淡茶褐色シルトの②層が流れ込み、下半部は淡茶色シルトが斑点状に混じる灰黄褐色砂質シルトの③層で埋まる。

埋土中からは土師器の小片が点々と出土。土師器の坏の底部破片(図43-１)が埋土③層から出土している。外底面には板目圧痕が残る。この他、砂岩円礫を利用した敲打具（図44-１）や磨石（図44-２)、鉄器（図45-１・２）がある。図45-１は、一端を環状に曲げた棒状鉄器で、残存長4.2cm、幅３㎜を測り、断面は方形である。２と同一個体の可能性がある。２は、残存長３cm、幅３㎜を測る棒状鉄器である。断面は方形を呈する。

SK-202

Ａ区中央のDU・DV-43区に位置する。膨らみをもつ隅丸方形の土壙で、径1.15m、検出面から深さ18cmほどを測る（図41)。下層水田層であるⅡ-２-⑥層を掘り抜き、基本層序Ⅳ層上部まで達している。底面は南西側がやや深い。

検出時から円礫が多く混じることを確認でき、北側から流れ込むように、砂質がやや弱い淡茶褐色砂質シルトの①層、径２～３cmの円礫が多く混じる淡茶褐色砂質シルトの②層、灰褐色粗砂質土が多く混じる淡茶褐色シルトの③層が堆積する。

出土遺物は土師器小片が少量あるが、東半部の埋土中から土師器の皿（図43-２）が出土している。

SK-203

Ａ区北東部のDU-45区東半に位置する。浅い不整な長円形の小型土壙である（図41)。南北径103cm、東西径75cm、検出面からの深さ７cmほどを測る。底面はほぼ平坦である。

上部には淡茶褐色砂質シルトの①層がレンズ状に堆積し、底面には周囲から砂礫が多く混じる淡茶褐色砂質シルトの②・③層が流れ込む。

埋土中からは土師器の小片がごく少量出土したが、埋没時期を判断できるような資料はない。

SK-204

Ａ区中央のDV-43区に位置する浅い長円形の小型土壙である（図41)。南北径90cm、東西径78cm、検出面からの深さ６cmほどを測る。底面はほぼ平坦である。

上部には淡茶褐色砂質シルトの①層がレンズ状に堆積する。周囲から流れ込んだように、砂礫を多く混じる淡茶褐色砂質シルトの②・③層が壁際を埋める。

埋土中からは土師器の小片がごく少量出土したが、埋没時期を判断できるような資料はない。

２）溝

Ａ区北半部で南東から北西にほぼ平行してのびるSD-208・209の２条の溝が出土した。Ⅱ-２-⑤層の掘り下げ中には気づかなかったが、Ⅱ-２-⑥層上面で平面的に観察すると、Ⅱ-２-⑤層と比べて、SD-208・209の埋土に径３～５cm大の花崗岩円礫や小礫・粗砂が多く混じることを確認できた。平面検出は比較的容易であった。

SD-208

Ａ区北半部のDR～DZ-43～45区に位置する。SD-209を切り、SP-212に切られている(図版12)。また、DV-44区部分の溝底でSP-213を検出した。東西ともに調査区外にのび、検出した総延長は38mである。溝幅は、東端のDR-43区では2.5mを測り、DS-43・44区では次第に狭くなり、DT-44区東半では55cmほどとなるが、北側が急に張り出して1.3mとなる。DT～DX-44区では1.25～２m、DZ-45区では0.9m前後と一定しない。Ⅱ-２-④（中層水田）層の耕作で上部を削られているため、溝幅が一定しないものと考えられる。溝底はかなりの凸凹があるが、東端のDR・DS-43区では標高25.88～25.91m、DT・DU-43区では25.92～25.95、DV-44区では25.88～25.93m、DW・DX-44区では25.98～26.00mを測る。

DS-43区東端、DT-43・44区、DU-43・44区の３ヶ所で土層断面の観察を行った。DS-43区東端では、上半部は砂粒や径１～２㎜の小礫が多く混じる黄褐色砂質シルトの①層で埋積される。下半部には、砂礫が混じるオリーブ褐色シルトの②層、砂礫がほとんど混じらず粘性をおびるオリーブ褐色シルトの③層が堆積する（図42-１)。DT-43・44区では、溝の中央に径１㎜～小指先大の小礫が混じる黄褐色砂質シルトの①層がレンズ状に堆積し、溝側面の底面近くには、細砂を主体とする黄褐色砂質土の②層が溜まる（図42-２)。DU-43・44区では、最上部に、砂粒や径１㎜～親指先大の礫が少量混じる灰黄褐色砂質シルトの①層がレンズ状に溜まる。下部～溝底には、径１㎜前後の小礫が少量混じるにぶい黄褐色シルトの②層、きめが細かい黄褐色砂質シルトの③層、細砂混じりのにぶい黄褐色シルトの④層が堆積する（図42-３)。DV・DW-44・45区境界部では、上部は、細砂・粗砂・径１～３㎜の小礫が多く混じる灰黄褐色砂質シルトの①層や、部分的に粘性をおびる灰黄褐色砂質シルトの②層で埋積さ